第五章●野毛地区

第一節●野毛地区登場

(1) 開港とともに

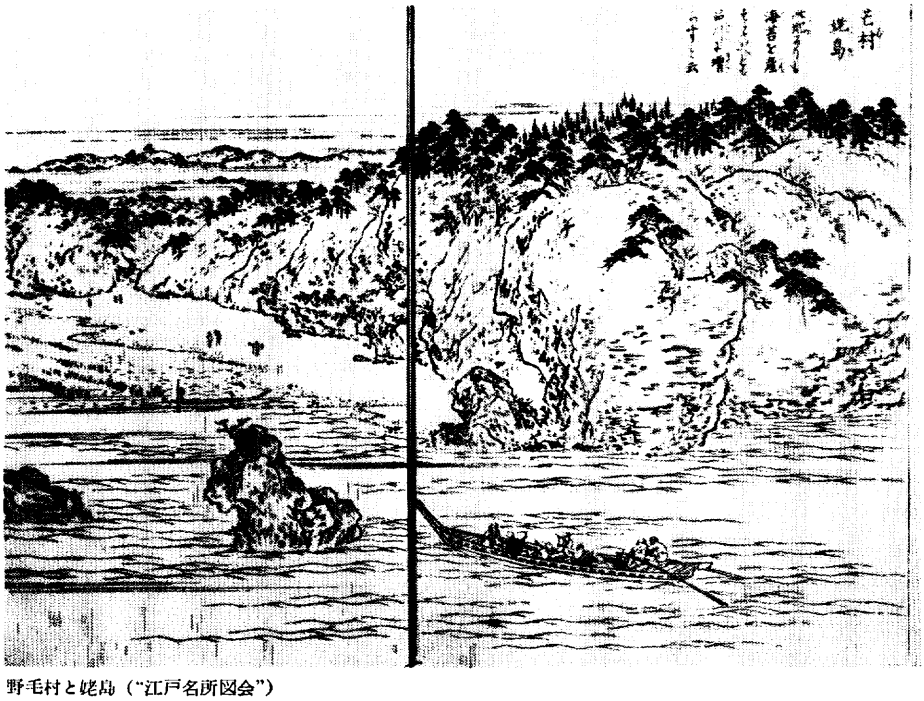
◉**野毛地区**――ここでの野毛地区は大岡川左岸沿いの野毛町ほか九カ町、面積五六・二ヘクタールの地区で、これに西区の宮崎、老松、紅葉ケ丘、高島各町の一部を加えている。この西区の一部は野毛山、伊勢山として述べることがある。

地形は西区の部分が丘陵地のほか、すべて平坦部で、大岡川河口に当っている桜木町、内田町は横浜港に面している。

大岡川をへだてて関外と関内地区に、西側は南区にそれぞれ接している。

◉**野毛浦**――野毛一帯は『江戸名所図会』にも見られるように、いまの野毛町、花咲町から宮川町にかけて一部きり立つ崖で、その下は白波寄せる浜辺であった。

いまの桜木町駅構内辺りも海で、海には姥島という岩礁があって、向い側の洲干弁天の森と一対の光景をなしていた。文化七年(一八一〇)刊行の清水浜臣の『杉田日記』にも「高さ三丈(約



野毛村と姥島(“江戸名所図会”)

九メートル）ばかり、周囲は二十間（約三六・四メートル）あまりだろう。五年ほど前までは、この岩はたいへん大きくて、乳母が乳児を抱いているような恰好をしていたので『姥島』と呼んだという。四、五本ばかりの木が、岩の頂上に生えていたが、今は岩の一部がくずれて、けものがうずくまっているようなありさまになってしまった……」（意訳）と書かれている。

浜辺には海苔ひびが植えられ、カキやアサリがよくとれたところで、きり立つ崖には、小さな滝が落ち、丘からは吉田新田や山手の丘、洲干が一望された。

対岸は吉田新田のうちの吉田土手、その一帯は沼地で、そこには「肥り肉」の量目豊かなウナギが獲れ、勘左衛門の蒲焼は「頗る珍」であったといわれていた。（『横浜市史稿・風俗編』）

◉役宅――開港の年、安政六年三月、野毛の丘には、神奈川奉行所（戸部役所）が関内の運上所と同時に建てられた。また奉行所の付属施設として、野毛、戸部にわたり、役宅一〇棟、が建てられた。

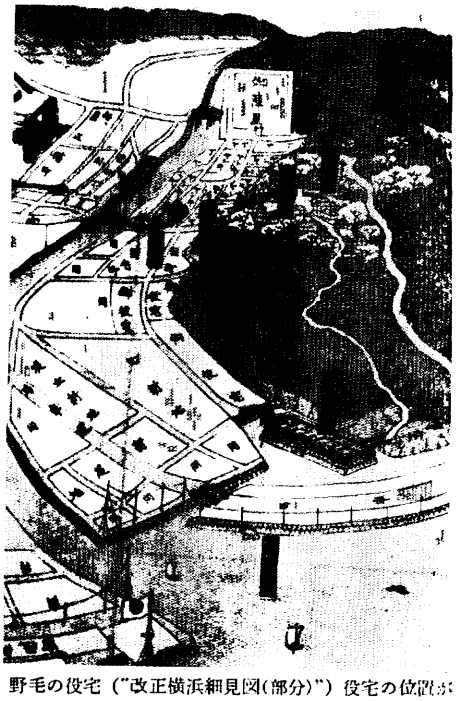
戸部村にはまた下田から三四坪（一一二・三九平方メートル）ほどの牢屋敷が移築され、さらに九月には太田村（現、日ノ出町一丁目一帯）には、陣屋（太田陣屋）が設けられ、そこを本拠として越前福井藩によって、横浜の地区が警備されることになった。また戸部役所構内には武器庫が設けられ、六斤野砲八門、小銃などが格納された。元治元年、野毛の山下（現、花咲町五丁目）の一角には、小規模ながら五十間（九〇・一メートル）ほど、海岸を埋立て、石炭倉庫六棟が設けられた

石炭庫は石炭のほかに生麦村あたりからの年貢米も収納された。（『関口日記・第一七巻』）

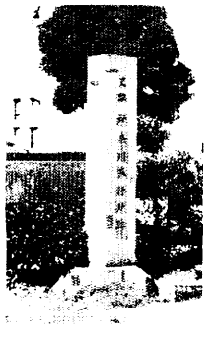
開港場を見下す丘には奉行所、そのまわりには役宅など、これら一連の施設は、ほかでもなく開港場横浜の内政を司るものであった。

万延元年には、野毛村を町として、野毛町と命名。まわりの戸部、太田村などとともに神奈川奉行預地として、その直轄支配地となった。

幕末、野毛のはじめての地域的な変化は、こうした役宅など



野毛の役宅（"改正横浜細見図（部分）"）役宅の位置が示されている



神奈川奉行所跡の碑

が、多く建てられたことであった。

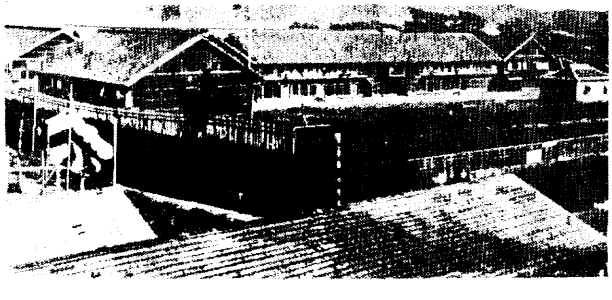
「野毛浦は他村に比べると狭かったので、開港早々全村の過半は官舎の敷地や、そのほか、政府の用地に取上げられ、海面までも埋立てられて住民は生業を失うようになったが、幸い宅地が残っていたので、それへ貸家を建てたりしてようやく踏み留まったものもあるが、おおかたは土地を失ない、職業を奪われて、他所へ移転することになりました」（野毛町、一老翁談「戸部村と野毛浦」『横浜どんたく・上巻』）

「陣屋の正門外から野毛通りまでの両側と、山に沿って大聖院の下まで、幾棟となく役宅があって、運上所へ勤める役人が住んでおりましたが、官宅ですから、一面に板塀で取囲まれていて、その淋しさといったらひととおりではない。夜になるとまったく人通りが絶えて、寂乎（ひっそり）となってしまいました」（南太田町、塩谷幸三郎翁談「陣屋の松」『横浜どんたく・上巻』）

◉**太田陣屋**――太田陣屋を拠点として、はじめ警備に当っていた越前福井藩が文久元年（一八六一）三月に信州松代藩と替り、のち幕府直轄となり、慶応二年にはフランス式陸軍の三兵伝習所となった。

三兵とは歩兵、騎兵、砲兵のことで、ダンブクロ、韮山笠といういでたちの兵士たちへ洋式調練が行われた。慶応三年三月、徳川将軍慶喜はここで調練を閲兵した。しかし六月に、この調練場は、江戸越中島や駒場に移転した。

太田陣屋調練風景〈"横浜史料"より〉



太田陣屋（一八七一年）〈〝市民グラフヨコハマ№46より〉

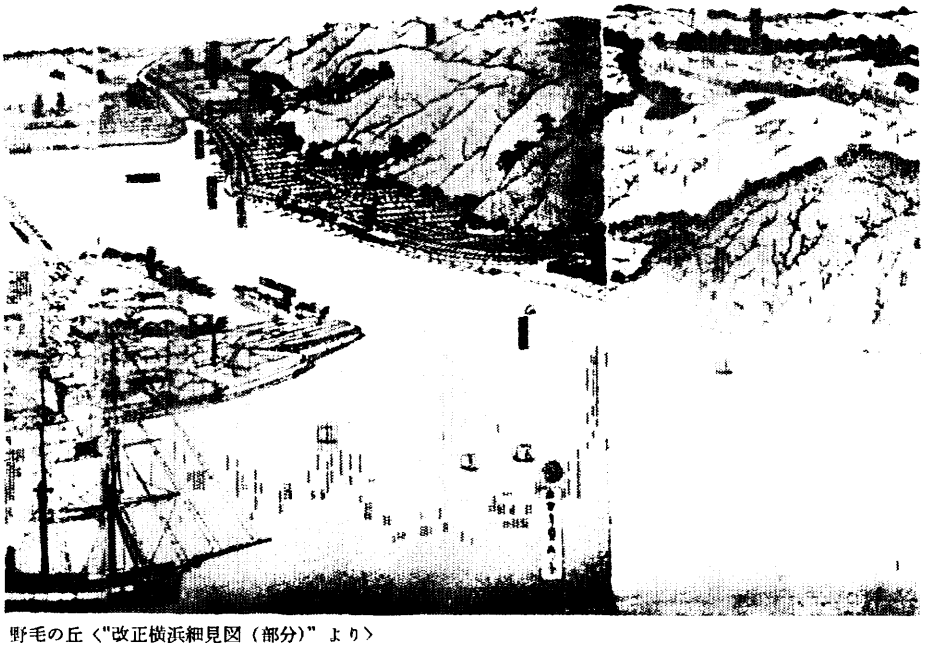
●のど元――野毛地区はまた交通の要衝であった。東海道から横浜村への交通は、芝生村（現、西区浅間町）から南下し平沼新田（現、西区平沼あたり）、戸部村（現、西区戸部町）を経て、野毛の切通しから野毛浦に至り、野毛浦から吉田新田の八丁縄手（現、長者町通り）を迂回する陸路のコースと、野毛浦からは渡船で対岸の洲干弁天地先に入る海を使うコースもあった。また、対岸の神奈川宿青木町の洲崎神社地先海岸から船で洲干へ渡る方法もあった。

開港後野毛・戸部には、関門や見張番所が設けられて、一般の交通にも監視がむけられることになった。野毛と向き合った関内と、直線的に結ばれた野毛橋がかけられてからは、ますます野毛は交通の要衝となった。

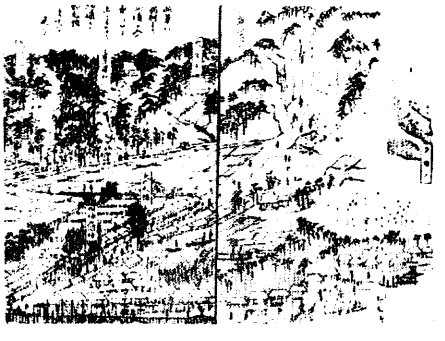
野毛はまさに開港場関内ののど元に当っていた。それで、奉行所をはじめ役宅、陣屋などの設置は、内政が司られるとともに、開港場の不測の事態を予想した防衛の拠点であったといえる。

(2) 野毛は花盛り

●改廃――明治改元とともに、神奈川奉行所ほか旧幕府の施設一切は、明治新政府に引き継がれた。そしてそのおおかたは改廃された。子神社（ねのとんじゃ）わき二丁目のあたり、およそ六十間（約一〇九メートル）、役宅五棟がこわされ、土地は入札をもって貸与された。約半分以上が越前屋宗兵衛というものが落札、拝借した。



野毛の丘〈"改正横浜細見図（部分）"より〉



切通しから野毛橋までの図〈"横浜地名案内"より〉

明治元年（一八六八）、政府は旧幕府の施設の修繕か所の調査を行った。野毛地区内では組頭、調役などの役宅一四棟、同心長屋九棟、ほかに文学所、俯文館、野毛坂と野毛橋の番所、戸部地内では役宅一七棟、同心長屋二棟などが調査された。（『神奈川県史料・第二巻』より）

調査し修理されたのち、これらの役宅の一部は、政府官員の官舎として使われた。

二年四月、野毛橋わきの番所が廃止、入札払下げとなり、三年には石炭庫、四年には関門と相次いで廃止。太田陣屋跡は一時的に県兵隊の本営に使われて、のち建物も取毀された。本営の跡には大砲用の煙硝庫が残っただけで、所々に大樹がある草原にもどり、のち陸軍省の用地となった。

さらに、慶応二年に建てられ、旅館をかねた文学所の俯文館は、旅館に変更され、教授は弁天武術講習所で行うこととなった。いわば旧幕の施設は戸部牢屋敷（のち監獄、明治二十六年根岸へ移転）のほかは明治に入って四年間ほどで一切廃止となった。

明治初年、野毛町には商人たちが許されて、本格的に移住しはじめてきた。ただでさえ狭い面積の野毛にとって、新しい土地が必要であった。すでに慶応三年、野毛町の町役人が連署して野毛橋わきのおよそ一、〇五〇坪（三、四七一平方メートル）の海面埋立許可を申請、横浜や江戸の問屋筋の資力によって翌年には埋立が終った。

●鉄道用地と埋立――こうした土地の拡張につづいて、明治二年（一八六九）、野毛浦海面を、鉄道敷設用地とするため埋立することが布告され、三年五月には停車場の用地が決定した。野毛海岸から測量がはじめられた。測量の対象となり、鉄道が敷設される地域のうち、神奈川や生麦の場合次のような記録がある。

抜すいして原文のままあげると、明治三年六月の項には、

「三日戊戌陰天

鉄道御製造ニ付子安通ゟ当村（生麦村……編者）江先日中異人付添御役々様御見分之上八幡前通ル印旗御建置有之候処尚又今日定杭打ニ御出ニ相成候

十二日丁未薄晴

鉄道御製造ニ付神奈川台下海岸ゟ本覚寺へ相掛リ候ニ付紀三（人名……編者）最寄取払ニ相成候ニ付紀三江為見舞大いな求秋太郎遣し候

当村ニ而も耕地通リ鉄道路ニ相成候ニ付今日田畑改いたし候」（横浜市文化財研究調査会編『関口日記・第十七巻』）

といったように記されていて、敷設準備の状況が想像される。

この鉄道用地の埋立てと並行するかたちで吉田橋の北側から野毛浦、石崎の海面およそ一四万三、五〇〇坪（約四七・四ヘクタール）の埋立が計画された。内田清七、福島長兵衛がこれを請負った。このときの人足は一、五〇〇人、賃金は一人につき玄米一升二合、茶代銀三匁あて、三食食事つきであった。（『横浜市史稿

・政治編』）工事は急ピッチですすめられた。

埋立は、一条の水路を残してしゆんせつの後、紅葉、錦、瓦斯、雪見、花咲の各橋が架橋された。川は桜木川（明治五年命名）といわれた。工事は四年に竣工した。現在の宮川、桜木、花咲、野毛、内田の各町、それに関内の尾上町六丁目、常盤町六丁目の土地が造成された。さらに隣接の常盤町、尾上町の各五丁目、改所脇の地先海面拝借埋立が高島嘉右衛門、元町の原木藤七、太田町の宝田屋太郎右衛門らによって願い出され、許されて着工、工事は数カ月の後に完成した。ここでも埋立地の中央部に大岡川を通した。野毛浦は平坦な土地に生れ変った。

鉄道用地はほぼ野毛浦埋立地の外まわりが指定された。測量のち、埋立工事は石崎から神奈川の青木町まで、延長約一・四キロメートル、はば六三メートルの帯状に埋立てるもので、高島嘉右衛門が請負った。三年三月二十五日工事が完了した。ゆるくカーブした埋立地の中央部が鉄道軌道敷地となった。

それに沿う道路は、当時一番の大道路となった。内外人はいずれもこの道を交通し、車馬の往来は非常に多くなった。

◉地がため――「明治三年（一八七〇）の五月、吉田橋脇から入船町、野毛浦まで埋立てが出来上って、これを新街道と名付けましたが、地固めのため、葭簀張りの納涼茶屋や、いろいろな屋台店が出て、軽業だの、辻講釈だのというような興行物もある。その夏はたいそう賑やかでしたが、いっそう景気を添えるために、野毛浦海面で烟火の打揚を許されて、六月十一日の晩、初めて川開きを行なった。数百本の烟火と、数個の仕掛烟火を交ぜて、すこぶる立派なものでしたが、それからますます賑やかになって、麦湯店が出るやら、納涼の客で埋地は混雑を極めるありさまとなりました」（天保老人談「野毛の川開き」『横浜どんたく・下巻』）

しかし一方では、海を失ない生業を失なった土地の人々は、この野毛浦埋立に反対したことは十分推測される。例えば三年四月、鉄道沿線となる地域では、測量に当って、測量の目標として立てた棒杭、旗竿などを引抜かぬよう、県は告示をするといったように、沿線農民の工事妨害も事実であったようであった。

◉交通路整備――こうして、埋立と前後して芝生村から戸部まで一直線とする「横浜道」が、二年七月戸部監獄の囚人によって切り拓かれ、「人通りの激しい道は丸太を横にして、その上へ板を敷いて往来をこしらえるありさまであった」（『横浜どんたく・上巻』）悪路は面目を一新した。開港場への人々の往来はますますはげしさを増した。さらに五年には長谷川秀造（作家長谷川仲の一族）や茂木惣兵衛らの献金によって、太田村の道路が広げられた。

さらに海岸（現、花咲町一丁目辺）から生麦村への渡船も開業され、陸、海ともに交通路が整備された。これは地区の繁栄の決定的な要因となった。

◉皇大神宮――明治三年、この地区の山の手、伊勢山や野毛に変

切通しから野毛を見る〈〝神奈川横浜二十八景〟より〉

化が始まった。その一つは皇大神宮の造営であった。権令井関盛艮は、横浜の市民にたいして、人民は協力し合って神宮の造営に必要な資金を奉納せよと告諭した。その結果「人々の赤誠は響の如くに応じ、或は鳥居その他の造営を願い、或は財物の寄進を願い出るものが多く」（龍山親祇『浜のいさご』）、社殿が竣工したのであった。

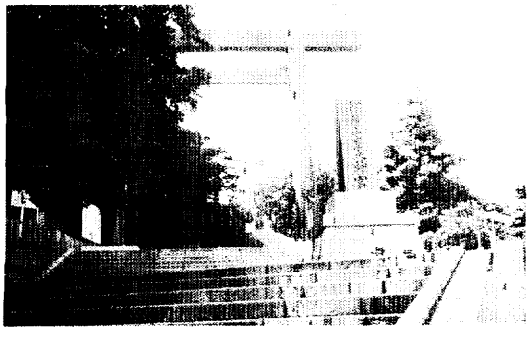
さらに権令は、町々の総代に対して大々的な祭礼を行うことを命じた。

このときの模様は「当日及翌日共に大祭を挙行す、横浜各町より山車十五本、手踊二十余台、付属地走、道化踊、花駕籠、引物等、各町競争して華美を尽したり。当日県庁東に桟敷を仮設し、各国公使領事を招待し、知事以下皆縦覧す」（太田久好『横浜沿革誌』）

祭礼は、市民あげての盛事となった。この日の人出をあてこんで、アイスクリームを売った町田房造は大いに利益をあげたという。房造はわが国における氷水、アイスクリームの元祖といわれている。

このときに植えられた桜はのちの世にも咲き誇り、横浜の名所となった。この祭礼は盛会であって、これはそのまま野毛一帯の繁昌のありさまでもあった。当時は都橋手前の子の神社あたりは、各種の店も増加し賑わいを増した。それが吉田橋あたりに延びて関内との連絡が深まってゆくことになった。

伊勢山秋月　"横浜地名案内"より



いまの伊勢山皇大神宮

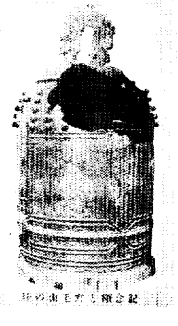
◉**山の変化**――これよりさき、明治元年には、丘地九百坪（二、九七五・二平方メートル）が選ばれて鐘楼が建てられ、横浜の町に時刻を知らせた。これは横浜にとってもはじめてのことで、港内を見下す野毛の丘は、このためにはうってつけの立地であった。

時の鐘は、開港以来、建築を願い出る者が多かったが、神奈川裁判所では公共性の高いもので、一人の私人には許可せず、設置を町役人に命じ、横浜町の総年寄苅部清兵衛や名主小野兵助らがその任務に当っていたが、本町五丁目の伊豆屋宗蔵がその一切を請負って竣工させた。元年の十二月三十日のつきはじめから、大正十二年九月の関東大震災まで延々五五カ年の間鳴りつづくことになった。

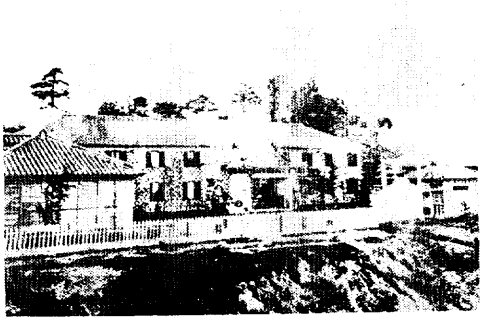
さらに四年には太田町にあった病院が野毛山に移転建設され、横浜共立病院と称された。七年（一八七四）には十全医院と改称された。

一方、この伊勢山皇大神宮の近く（現、西区宮崎町五八）には、離宮が設けられた。一二間四方ほどの洋館であったという。七年三月十八日、天皇と皇后が灯台寮や瓦斯会社に行幸啓の際に立寄られたほか、数度の小休止があった。明治十八年九月払下げになり、現在は東京銀行宮崎町社宅となり、鉄筋アパート一二棟が建てられている。入口左手には、かつての庭園を思わせる石組が、一帯の老樹の繁みにかこまれて残されている。

野毛の鐘楼〈横浜市図書館提供〉



時の鐘――戦時中金属回収によって供出された〈震災記念館旧蔵〉



十全病院――いまの老松中学校位置

この頃、成田山延命院が勧進された。もともと太田村の普門院に分霊を勧請されていたものだが、高島嘉右衛門からの敷地の寄進をうけて建立されたもので、成田山教会所、のちに一寺となって延命院、市民からは野毛不動といわれ、市民の信仰を集めた。十年頃からは桜咲く景勝地と相まって、参詣者の絶えまない状況となってゆくのであった。

不動堂の崖下には水行場、明治十二年八月には新栄講の行者海老塚徳浄、森田友昇、高橋長蔵らの勧進によって参詣人の休憩所、男女の籠堂、玉垣、放生池の寄進が行われている。寄進者には下大岡村（現、南区上大岡町）や本牧村（現、本牧町）の人々が名を連らねた。（森　篤男『ヨコハマ散歩』より）

野毛の丘つづきの宮崎町（三九番地）では七年十二月九日メキシコの担当によって、金星の日面経過観測が行われた。これは、神戸はフランス、長崎はアメリカ、横浜ではメキシコと、それぞれの国によって分担して観測が行われた。観測に適したのがわが国で、なかでも横浜が最適とされ、金星の観測所としては「蓋し世界最初のものであるといわれる」（『横浜市史稿・風俗編』）ように野毛の丘が活用されたのであった。

観測機の礎石は六〇センチ角、立上り四〇センチ一個が個人宅に残されているが、金星観測を記念して昭和四十九年十二月、県立音楽堂入口に記念碑が建てられた。

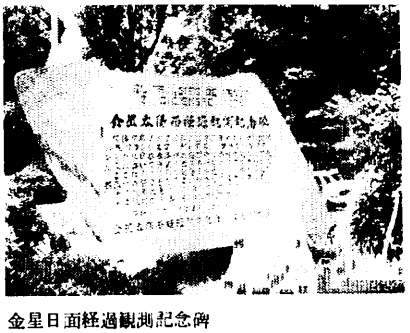
こうして野毛の山の手はすっかり変った。

「どこが変ったとおっしゃられると、みな、変ってしまったといいたいくらいですが、ちょっと思い出したところを申し上げたら、程ケ谷から横浜へ入ると、暗黒坂から野毛坂、あの野毛坂が最初から三、四回切り下げられたもので、明治元年ごろは細い道で大木が茂っていて、それはそれは物凄いところでした。それだから、昼でも剽盗が徘徊していて物騒なことでした。そのころ、どういう目算あってか、草繁き伊勢山の頂上へ茶店が数十軒出来、それから皇大神宮が引遷って、宮崎町が出来てから、チョンキナ屋が出来、淫売が盛んでした」（名はいわぬが花の某老妓談『横浜どんたく・下巻』）

◉**四時皆宜園**――そして野毛には、野毛坂の植木屋によって、四時皆宜園が出来、その付属としてメーズ（迷い路のこと―Mase）

離宮跡――いまの東京銀行社宅団地

野毛不動尊


金星日面経過観測記念碑

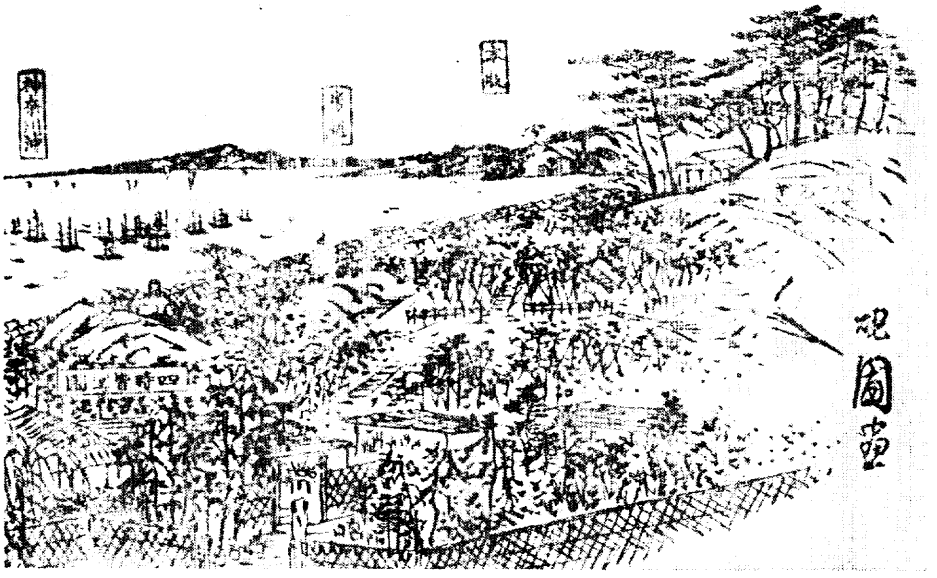
が造られた。その地続には仮名垣魯文経営の窟蝼蟻（現、老松会館位置）という茶亭もできた。魯文は九年七月二日に新聞で開園の広告を出したが、三、四年にして四時皆宜園も窟蝼蟻も廃園となった。明治三年九月に宮崎町、五年には旧野毛浦埋立地では宮川町、花咲町、鉄道用地の埋立地では内田町、福長町のそれぞれの町名がつけられ、名実ともに市街化が進んでいった。

◉**わが国最初の鉄道**——野毛の丘がつぎつぎと活用され、埋立地を含む平地一帯では、官、或いは私人によって、つぎつぎと近代的施設が創られていったが、明治五年（一八七二）、この地に日本最初の鉄道が開業した。これは単に横浜だけでなく、近代の日本にとって画期的なことであった。

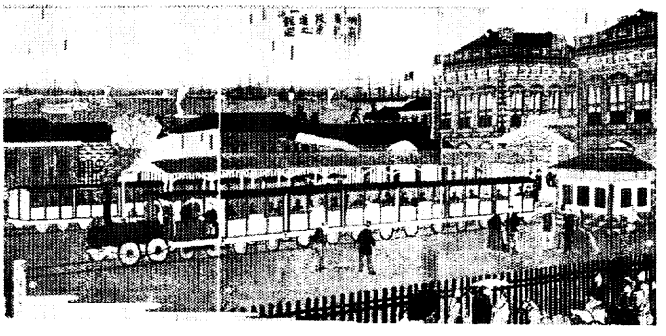
埋立ができると同時に鉄道の敷設工事が始められた。イギリスの外債一〇〇ポンドを資金に、技師長の、イギリス人エドモンド・モレルらによって建設された。

五月七日には横浜—品川間が仮営業するはこびとなり、七月二十五日には品川—新橋間の線路も敷設が終り、全延長二九キロメートルが完成した。九月九日開業式の運びとなったが、前日の雨天により順延され、九月十二日、明治天皇行幸のもとに開業式が盛大に開催された。

陸蒸気が新橋に向って出発進行、まさに近代への出発であった。「いよいよ陸蒸気が走り出すと、いまの桜木町一・二丁目の間は、汽車の発着のときは蒸気の音がごうごうとして、乗馬用や小



四時皆宜園（左下）と窟蝼蟻園（右上）——中央部はメイズか横浜港を見下している。（"文明開化・広告編"より）



"横浜鉄道館蒸気車之図"

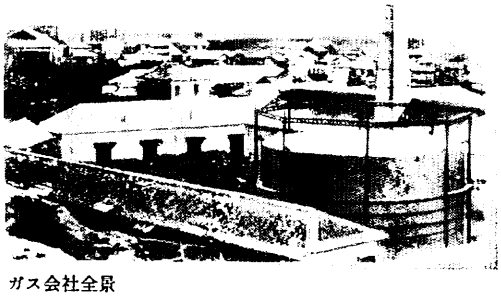
荷駄の馬がおどろき、狂ったようにかけ出してしまうため、往来の人々に危険で、場合によっては桜川に転落してしまう恐れがあるので、地元の人々は川べりには二〇〇本の柳を植え、それを丸太で結ぶよう人除けをしたこともあった」（『神奈川県史料・第二巻』より）

◉**鉄道用地柵外**――この鉄道用地の柵外の土地には、新しい道路に沿って早くも街並みができ、五月には桜木町、もとの野毛浦埋立地を花咲町、野毛橋から旧野毛浦西海岸にかけては宮川町と、それぞれ町名がつけられた。さらに川には紅葉橋、柳橋、錦橋、緑橋、雪見橋などの橋がかけられ、さらに大岡川には黄金橋が新設された。その上、野毛橋をこわし、位置を若干変更して改修、名も都橋と改称した。こわした古木材をもって栄橋を架橋し、さらに六年二月には、野毛の切通しをさらに切り下げるなど、交通の便が図られたのであった。

鉄道用地以外の部分は五年四月、高島町と命名され、そこへは、吉田新田の吉原遊廓が移転することになった。遊廓はいつも新開地に設けられたもので、吉田新田吉原一帯が市街地化するに従って、この高島の新開地が適地とされのであった。この遊廓は高島遊廓といわれ、一時的ではあったが、不毛の埋立地から、地域繁栄へと導くことになる。

◉**瓦斯灯**――黒煙を吐いてばく進する蒸気機関車が、文明を代表する一つであれば、瓦斯（ガス）はまたこれに劣らないものであった。明治三年十月、横浜の紳商鈴木保兵衛、西村七右衛門、高島嘉右衛門、西村勝郎、田中平八、石川半右衛門ら九人は、市内へのガス灯建設を神奈川県へ出願し、先に出願済のドイツのシュルツ商社と争ったが、苦難の末、遂に高島嘉右衛門の独力によって、計画が実施に移された。翌四年、花咲町五丁目の石炭庫跡（現、本町小学校所在地）に、わが国初の水平炉のガス工場建設が、フランス人ペルグランなどのお雇外国人によって着手され、遂に翌五年九月には、わが国初めてのガス灯が関内を中心とする市内に点火されたのであった。しかし利用者のガス代金不払などにより経営が困難となって、八年、町会所に譲渡、本町ほか一三

ガス会社正面――手前はガス橋、背景の丘に伊勢山皇大神宮の鳥居が見える



ガス会社全景

カ町がこれを引きつぎ、市制施行後の二十五年、横浜市がさらに引き継ぐこととなってゆくのである。

◉**高島学校**――そして明治四年（一八七一）十一月、高島嘉右衛門によって、高島学校が設立された。第一の校舎が伊勢山下、第二の校舎が関内にそれぞれ設けられ、洋学、漢学の二科が教授された。お雇教師スイス人カドリーがドイツ語とフランス語、アメリカ宣教師のバラ兄弟が英語を、福沢諭吉の門下荘田平五郎などが漢学を教授した。一時は生徒七百人といわれ盛況で、ここからは寺内正毅（陸軍大将）本野一郎（政治家）都築馨六（政治家）得能通昌（実業家）本田幸介（農学博士）らが輩出、若き日の高橋是清（政治家）もここで学んでいる。翌五年、横浜町へ寄付され、脩文館と合併して、横浜市学校と変遷してゆく。

第一の校舎の隣りには、登槐舎という小学校がおかれた。六年、学制の発布によって、敬業学舎、自疆学舎が設けられるなど、野毛の地区においてもこうして近代教育が芽生えたのであった。七年、内田町地先へ橋、緑、八年には高島裏海面がさらに埋立てられ、裏高島町と命名されるなど、地区も拡張と市街化がすすんでいった。

◉**周辺**――そのにぎわいは太田村にも影響し、この地区のシンボル的存在の東福寺では四・五年頃地蔵堂、閻魔大王堂とともにそれぞれ縁日がきめられ、境内には、見世物小屋、露店、草芝居などが出てにぎわいをみせた。このにぎわいは明治十年代、伊勢佐

高島学校全景（"横浜史料"より）

木町などが興行地として指定されるまでの間は特に盛況であった。

太田村では明治四年八月、家屋が連続するところに、日ノ出、三春、英（はなぶさ）、初音、清水、霞、兒玉とそれぞれの町名がつけられた。ここに野毛地区のひろがりがみられることになった。

明治初期の野毛地区は、まさに、旧幕府の施設を改廃し、野毛浦の埋立が行われ、官によって伊勢山皇大神宮が造営され、さらに瓦斯局の操業など、明治新政府の施策がまともに実施されたのであった。

(3) 新時代

◉高島遊廓――明治政府（神奈川県）の統治が横浜において強化、進行されるにつれて、この地区の今までの施設の一部に修正を加えながら、新らたに諸施設が設けられてゆくことになった。

高島遊廓の場合はその代表的なものであった。遊廓は、新開地に繁盛をもたらしたが、いよいよ鉄道が開通され、外国人の乗降が多くなり、その上、しばしば天皇が横浜に行幸するようになると、この風俗営業の遊廓は、目障りとなった。そこで、ふたたび遊廓は新開地へと移転されることになった。十三年、関外の山吹町、富士見町、千歳町の各町の一部の地が移転先と定められた。そのため、翌年の十五年には一斉に取毀されて、五月には長者町、不老町の空地に移転し仮営業を行った。移転予定地の一部をもって真金町、永楽町として、ここに遊廓の各店を移転させこの十五年には「市街ノ体裁ヲナス」（『横浜沿革誌』）という状態になった。

市街化するとともに、野毛は一時的な盛り場となった。それは山の上にも及んで、外国人を相手とするチョンキナ踊といったような、新風俗もいつしか発生していた。次は野毛の山での見聞である。

◉伊勢山の裸おどり――「近頃の暑気に昼は難去要事あるも、健康を害するとか道理をつけて、他行を止め、アア早く涼しくなればいゝな、アゝたまらねへと云ふ間も暫時にて、夕陽西山に落ちて冷水おもむろに吹来る中を、御尻も落付ず夕飯を仕舞や否や、拾銭のベラ一枚を懐に入れ、団扇を携へてノコノコ然と出かけ、先づ本港第一の勝地なる伊勢山に登り一軒の茶店に入り、遠く海上を眺むれば、海波銀色をなして房総を眼下に見、近く市街を見渡せば、数百の瓦斯燈輝きて昼の如く、蒸気車の走る音を聞へて驚く閑静なる眺めなりと思ふ折柄、隣家の茶店にて甚句カッポレのスッチャンが始りしに忽ち興もさめ、ふと其茶店を覗へて見れば、此は如何に真裸の新造が三四人にて一人の外国人を取巻き、裸舞踏の真最中なり、拙生驚愕仰天思はず叫んで曰く、嗚呼是何等の怪物ぞや彼の銀座の怪物は実に可憎可恐とは雖も、猶暗夜柳下に立って醜顔を覆ふの情あり、伊勢山の怪物は銀燭昼の如き座敷に外国人の面前をも憚らず、其秘すべき所を隠さずムキダシニ

シテ舞踏ハネマワル有様少しも是を恥とせず、如何に金銀の勢ひたりとも、誠に嘆息至極なり、若し夜る密行の官員此等の怪物を見ば只は相済間敷か、拙生年久しく此港に住するに、如此の有様噺にも不聞事なりければ記して貴社に投ず」（片岡志道『片岡志道見聞録抄三』明治十～十四）

●新時代の施設――野毛の市街化は、明治十年代から三十年にわたり、さらに新しい時代に応じた施設が増加していった。明治九年（一八七六）七月には敬業学舎（明治六年五月）が大聖院の仮校舎から同じ野毛山の一角に移転、老松学校として創立された。この学校は明治十二年三月には神奈川県師範学校付属小学校となった。十一年の五月には師範学校内に教育博物所が設置され、二十年十月には、野毛山貯水池から市内に給水が開始され、十三年、太田村には屠場の建設が許可された。

一方、町では二十年（一八八七）七月、福長町、長住町、内田町の各一部の町名改正が行われて長住町が誕生、二十一年一月には、繁盛の野毛町に大火がおこり、宮川町、花咲一丁目まで、一、一二〇戸を焼き、この地区での開港以来の大火に見舞われたこともあった。

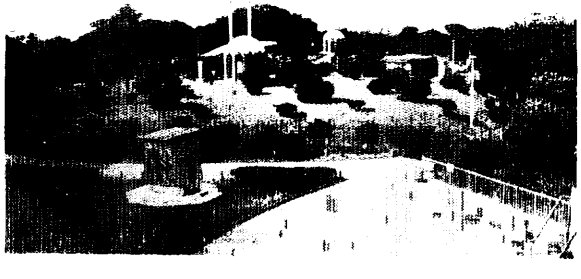
大火は旧来の町形態を消していったが、焼けなかった野毛坂上老松町などの官舎敷地が払下げとなったように、野毛地区の変化が見られた。

一方、二十二年六月には、大谷嘉兵衛、高島嘉右衛門など三〇数人が船舶修理を目的とする大規模な工場を設立する計画をたてていた。のち内田町に建設される横浜造船所の発芽である。

明治二十二年四月一日市制が施行されたが、市の施策が早くも、この地に実行された。この地区に所在する瓦斯局と伊勢山時報所を、従来の所有管理の本町外一三カ町から横浜市が買収、引きつぐことが二十五年の市会で決定された。このうちガス局の価格は十二万円と評価されたが、その代金は本町外十三カ町から市へ寄付することにより、事実上市は寄贈をうけた。これにたいして市はその代替として、本町外十三カ町の区域の街灯点火料を無料としたのであった。

このことは、ゆれ動いた瓦斯局事件の結末でもあった。瓦斯局事件をきっかけとして、文明開化の先端をゆくガス事業が発展し、これ以来公共的事業として、明治を経て大正にまでつづくことになった。そして町のなかでは二十八年、日本製茶株式会社（資本金二〇万円）が大谷嘉兵衛によって宮川町に創立、製茶の直輸出が試みられ、花咲町十丁目（現西区）には三十一年十月に横浜煙草専売所、三十二年には養老貯蓄銀行が野毛町に創立されるなど、この地区にとっては、いずれも新しい企業体が発足するのであった。

そして、この地区には教育関係の施設も、老松小学校の創立につづいて、三十二（一八九九）年二月、日ノ出町二丁目に横浜女学校（三八年四月横浜高等女学校と改称、三十九年三月元町に移



野毛山の貯水池

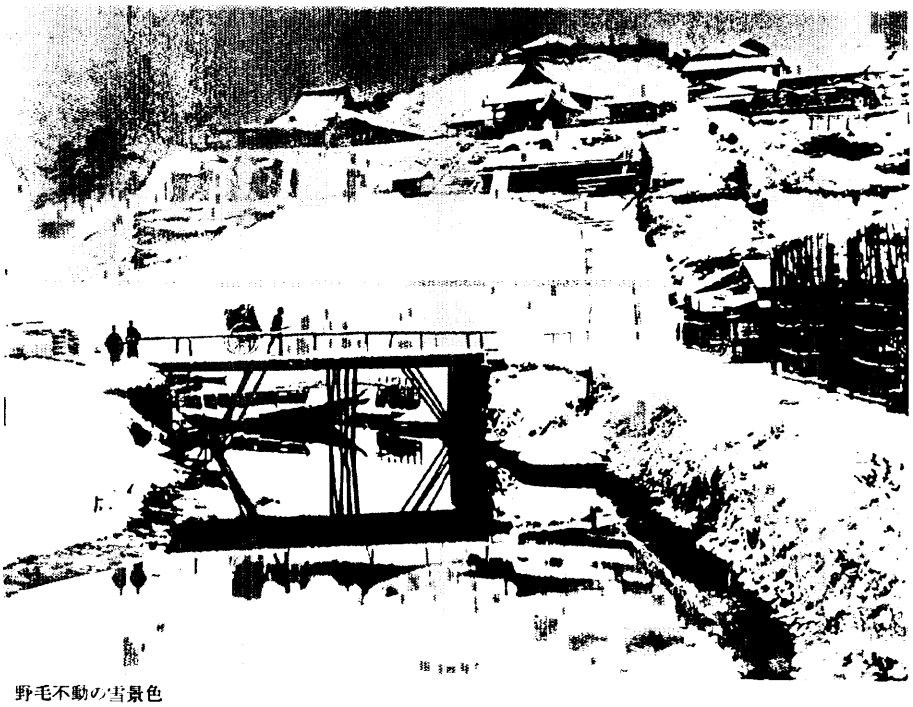
転）三十七年十一月には横浜漢学校が野毛町に、この頃同じ野毛三丁目にはピアノ、オルガン等教授の横浜音楽学校がそれぞれ創立されている。またそれに礼法小笠原支場もでき、三十年代の野毛には和洋それぞれの施設がつくられていった。

こうした公共的施設の増加は、市街化がいよいよ進んだことを示すものであった。野毛にあっては、子神社周辺を中心としての繁栄であった。二十一年には大火があったが、界隈は復興され、のちに都橋あたりは、関内に入る唯一の陸路としての見通しから、神社を中心に露店、見世物、軍談師などがならび、縁日さながらのにぎわいを見せた。（『横浜市史稿・風俗編』）

しかし明治中期の野毛地区は、新旧こもごもの変化を見せていたが、旧制の打破は、さまざまな問題を引きおこしていた。なかでも野毛山の十全医院は、三十五年（一九〇二）その経営に不都合が生まれ、市民の間からもその改革案が叫ばれ、遂に市会に十全医院の改革が建議され、市会の大問題となった。結局、十全医院は野毛から浦舟町へと大正十五年十一月に移転して改革が行われることになる。

◉街並み――しかしこのような公的施設が集中的に建てられてゆくなかにあったこの地区全体は、静かなたたずまいを見せていた。作家大佛次郎は明治期の野毛について次のように語っている。

「いまのように商店街がぎっしりと並んだ浮ついたにぎやかさは



野毛不動の雪景色

なく、どこかのんびりとした静かな町でした。東海道からぬける道すじなので、旅人相手の宿屋も数軒残っており、往来に面して、しもた家が多かった。野毛通りの四つ角にある栗原薬局が親せきなので、子供のころはちょいちょい遊びに出かけた。

古本屋も二、三軒あったが、表通りはそれほどにぎやかでなく、むしろ不動尊から吉田町に通ずる道のほうが開けていた。裏街へ一歩入ると外国渡航前の移民宿が多く、いまのようにバーや料理屋は見当らなかったね」（大仏次郎「〝霧笛〟を生んだ波止場情緒」『横浜今昔』）

「町を通ると、今でもかざり屋はある。あるにはあるが、騒音に消されて、幸ひな事に彼の子細あり気な声を聴かれずに済む。私は以前から、いまでもかざりやの前を通らないやうにしている。

町はつまらなくなった。目にも、耳にも、それでもまだ明治も二十七八年頃だと、いまよりかづうっと面白かった。例へばお菓子屋の前に立つとする。そこには片襷をかけた職人が三人位、こんぺい糖を拵へていた。小豌ほどもある大きさの銅の鉢の裡の、豆粒ぐらいの白い塊を片手で掻廻していた、砂糖の玉である。時々蓮華の大きいやうな物で、少しづつ砂糖水をかけてゆく、その掻廻す手つきが面白さうなので、誰しも一寸立停って見ている。一體その頃はいまより世の中が暢気だったから、往来で立停って何か見ている位の道草は誰もがやった。見ている中にその豆粒に、角がはへて来た。生へて来た、あゝあんなに生へて了っ

伊勢山の桜見物

た。やっと金平糖は出来あがったのである」（磯萍水『ひなたぼこ』）

◉にぎわいつながる――一方野毛に地つづきの、旧陣屋跡地は明治政府にひきつがれ、陸軍用地となっていたが、明治二十五年に民間に払下げられ、ここが住宅地化のはしりとなった。払下げ後、道路の両側三〇〇余間には桜が植えられ、日ノ出町通りの桜として市内の名所となった（震災で焼失）。その上、日ノ出町には家並みがととのった。これは川一つへだてた繁盛の伊勢佐木町から、直接、間接に影響されて、急速に町となっていった。さらに東福寺を中心とした地点と野毛とが、にぎわいの地帯として平面的につながるもととなった。

◉赤門寺界隈――この東福寺を中心として日ノ出町界隈は、奇しくも横浜の作家にゆかりがある。長谷川伸が明治十七年三月、日ノ出町に生誕、獅子文六は生後一年の明治二十七年月岡町に、大佛次郎は三十年十月に英町で生誕。その兄で星の博士といわれた野尻抱影もここに居住、吉川英治も三十三年清水町に移住してきているなどである。これらの人々は、この界隈の明治を記している。

「さて、赤門寺へは、小学校へ入ってからもいつも遊びに行った。かや葺きの、両側に〝曰く窓〟の長屋のついた山門で、大きな厚い、乳ビョウを打った両扉は、朱が黒く時代さびていた。

裏山は深ぶかと茂って、その間をめぐって八十八カ所巡りの祠が残っていた。明治の政客の出入りした富貴楼のおくらの奉納の大きな御影石の井戸もあった。

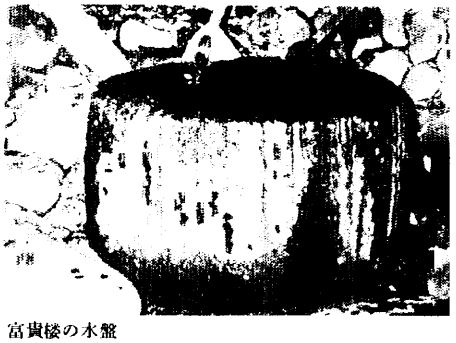
本堂はかや葺きの急勾配の大屋根で、高い頂に卍文様が金色に輝き、深い奥庭から滝の音が聞えていた」（野尻抱影随筆集『鶴の舞』）

この赤門寺とは、東福寺のことで、ここには横浜における一代の女傑富貴楼お倉（斉藤くら）夫妻の墓所と長谷川伸一家の墓所がある。

「日の暮れ近くなると、寺男が現れて、赤門の重い扉をギイと閉める。子供たちは『カエルが鳴くからカエロ』と口ぐちに歌いながら、石段をカタコトと下り、近所へ散って行く。……」（前掲書）

「ここで時どき葬儀も行われていたが、子供たちが上って遊ぶの

東福寺（旧本堂）



富貴楼の水盤

は春の彼岸会と誕生会のときだった。地獄極楽の大幅が乾ぞってずらりと懸り、針の山や血の池、生塚の婆や牛頭馬頭の絵はひどくこわかった。枝垂れ桜も満開となり、いろいろの露店で賑う。がま口や、目覚ましの当るドッコイドッコイや、キンカトウ屋も出て、その天神さまは五銭もして、子供の小使いでは手が出ない。

それと、秋の晩、たぶん十夜法要のあと、影芝居や幻燈会があった。宇都谷峠の文弥殺しにおびえたり、幻燈の円い画が本堂の闇に青く浮き出て、五色の花輪車が開いたりつぼんだりするのも、妖しく美しかった」（前掲書）

この「地獄極楽の大幅」は戦災で焼失、現在は復製の大幅が寺にある。

町には、

「ひとつには明治の夜の暗さもあった。まだ街燈などはなく、人通りもまばらな往来を、ちょうちんが遠く近く人魂のように動いていた。後に赤門の寺子屋へ通ったときは、義士の討入りのような〝がんどう〟をふり照らして歩いた。それだけに夜空の星は降るようだった。

家ではランプの生活だが、寝間では枕もとの有明けあんどんがほの暗く、陰々滅々として、そば屋の『そばウワウー』という遠い売り声が子供をおびえさせた。また、夏でも昼寝どきに母や弟妹も奥の間の薄べりで眠り、世間がしーんと鎮まり返っているのが何か不気味に思われた」（前掲書）

「行きつけの髪床は学校裏にあった。おやじの本職はちょうちん屋で、隅っこの粗末な鏡の前で、イスの箱の上に掛け、まだバリカンがなくて、チョキチョキ虎刈りにされた。ちょうちん屋は正月の凧も造って売っていたが、凧では、一度遊びに行った友だちの裏長屋で、税関に勤めているという父親が、生活のためらしく、障子骨、巻骨の凧を張っているのを見た。下絵から描き彩色していて、子供の目にもうまく見えて、後に北斎の人物を見たときもその武者絵を思い出した。この人も藩士くずれらしかった」（前掲書）

弟の大佛次郎は、

「生家は赤門寺のすぐそばにあった。静かな住宅がならんでいてね、父はそこから日本郵船の横浜支店に勤めていたが、なんでも父が出張中にぼくが生れたんだそうだ。なにしろ明治三十年代のことだから当時の風俗ものんびりしたものだったが、旧士族で巡査になった人とか、アメリカ帰りのモダンな医者とかいう、ちょっと変った人たちが家の近所に住んでいて、子供心になんとなく、興味をひかれたね」（〝霧笛〟を生んだ波止場情緒」『横浜今昔』）

と記している。

吉川英治の場合、今の赤門町に家があった。

「いとも閑静な、そして小さな町で、清水町は一番地から四番地までしかないのである。戸数も何軒と数えられるようなその真四

角な住宅地の周りを、西北の戸部山や久保山から流れてくるきれいな小川が繞っていて、どの家の門にも、その家だけの小さな橋が架かっていた。

ぼくの家は、赤門とよぶ寺の山門通りに面した角地であった。だから家の横にも前にも、その清冽な水が繞っていた。この辺には、異人館も皆無だったし、混血児の友だちもいないし、以前の山手環境とは、まったく空気がちがっていた。山本安英さんの生家もこの清水町だった。

家の前は広い三叉路で、北へいくと、鉄温泉とよぶ鉱泉宿があった。南には、すぐ南太田小学校の校舎が望まれ、普門院というお寺やら、英町、霞町などという静かな町並の生垣がつづき、もすこし行くと初音町に出る。そこまで出ると、かなり賑やかで、角に大きな乾物問屋があった。そこの息子が、その頃漸く擡頭し出した壮士芝居というものの役者になって、森三之助という花形役者だということを、誰からともなく聞かされていた。

それと、もひとりその頃の著名人として伊藤痴遊の家が、ぼくの家から広い三叉路をへだてた向い側にあった。ぼくらが兵隊山とよんでいた山の崖をうしろにして見越しの松に船板塀といった構えの住居であった。事実、妾宅であったのかもわからない」

「赤門前一帯は閑静な住宅地で、わけて清水町一番地の角地にあったぼくの家は、家の横から門の前も、きれいな小溝が流れていて、幅一米余の小橋が架っているのである。すぐ南隣りは、大串という呉服問屋の大家の住居で、これも同様な橋懸りに長い黒板塀をめぐらし、その先も、また赤門寄りの静かな通りも、すべて生垣や門構えばかりである。

ただ近所に変わった家といえば、カゴ虎という俥宿と、英町の近くに、駄菓子屋、焼芋屋、小間物屋ぐらいがチラとあるだけの界隈だった」（『忘れ残りの記』）

この赤門界隈の上は月岡町、野毛山の西端にあたっている。横浜税関官舎があり、税関長だった父をもつ有島武郎、有島生馬、里見弴の三兄弟のゆかりの地でもある。

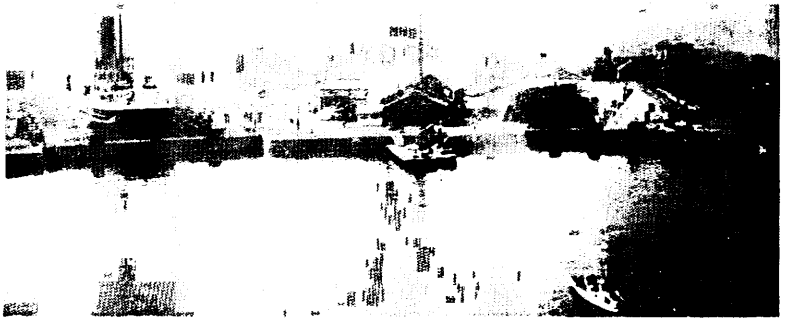
第二節●庶民の町として

(1) 野毛の栄え

◉造船所――明治末期から大正初期にかけて、野毛地区は商業の町として繁盛をつづけた。その基となったのは、ターミナル横浜駅（現、桜木町駅）の存在であった、そして瓦斯局、皇大神宮、野毛山不動などへの人の集り、などが間接的に作用した。

こうした状況のうえに、さらにこの地区を特徴づけて繁栄に導いたのは、横浜船渠株式会社（後の三菱重工株式会社横浜造船所）の創立で、造船の工業地域となったことであった。

同社は明治二十二年（一八八九）、原善三郎外二三名の紳商が



造船所部分（『開港五十年史・下巻』より）

発起人となって設立を出願、二十四年に免許をうけて二十八年に創立されたが、創立後は英人パーマーの設計で第一号、第二号ドックを牛島辰五郎らの工事によって建設して、事業開始。四十三年にいたっては第三号ドックも完成、さらに、当時海岸通りの一丁目にあった日本郵船の鉄工場も譲りうけ、ここで船の修繕部品などをつくるようになるなど、その他の関連設備も完備していった。

「毎朝七時になると工場からは、〃ボーッ〃と始業時間を告げる汽笛が流れた。一般市民はこの音で目をさまして店開きをはじめるといったほど規則正しく毎日鳴り響いたもので、野毛山で打ち鳴らされる〃ゴーン〃という鐘の音とならんでハマでは有名な〃時間知らせ〃の汽笛だった。

五百人ほどの工員が日給四〇銭くらいで働いていたが、腹がけ姿が多かった。主任クラス以上は全部英人だったが、これは近代的な造船技術を知らぬ日本人としてはいたし方なかった。英人技師は五百円、下級事務員でも二百円くらいはとっていた。こんな外人連中が「ダルマ」と呼ばれた自転車で通う姿がまたスマートなものだった。

修繕仕事は痛んだ部品をとりかえるとか、船底についたカキや海草類を取り除くのがおもな仕事だったが、ほとんどが英国船だった。英人技師ハロルド・パーマ氏の設計で現在地に初めて一、二号ドックが完成されたのは明治三〇年、これには海軍省でも大いに力こぶを入れて後援してくれ、これでやっと三千トン級船舶が入れるドックができ、造船所らしい形が整ったわけだ……」（石川沢吉「造船所第一船は天神丸」『横浜今昔』）と当時のありさまが記されている。

この頃、作家長谷川伸も、ここで働いた。

また、作家吉川英治も若き日、ここで働き、一八歳のとき、修理中の汽船の船腹の錆落しの最中、足場もろ共に一〇数メートルの船渠の底に転落、十全病院にかつぎ込まれ、九死に一生を得ている。こうしたことを含めて、回想記の『忘れ残りの記』にも、初期の作品『かんかん蟲は唄ふ』にも横浜ドックのことが、記されている。

その後も会社は敷地を拡張し続け、内田町、緑町へと拡がり、大造船所となっていった。

「会社設立後の二十年くらいは修理船専門で、造船はわずか数百トンという小型船だけだったが、第一次世界大戦当時の造船ブームにのって船台も完成し、延人員三千人で三千トン級という大型貨物船「天神丸」を完工、これを造船所の第一船とした。これが契機となって船台の増設と機械施設の拡張を図り近代造船業形態の基礎をつくり、ついに現在の隆盛をみるようになった」（前掲書）

いまの宮崎町の高台は大阪商船、日本郵船などの部長級の屋敷町といわれ、船景気とともに花咲、宮崎町方面の住宅化が進んで

いった。こうした景気のなかで、ドックには多くの従業員が増えていった。大正震災前後から昭和初期にかけてドックに通う人々は三五〇〇人、町のまわりは盛況をきわめたという。

◉ドック周辺――大正期に入ったドックはますます活気にあふれていった。それはまた工場周辺の店の繁盛につながっていった。勘定日（給料支払日）やその翌日には、ドックの門前や沿道付近には、雑貨や生活必要品を売る露天商が縁日のようにずらりと並んだ。

この状況は、やがて昭和に入って商店街形成がなされ、岩亀横丁などを中心に、活動写真、寄席、さらに一杯呑み屋などの飲食店が出来るようになった。さらに、会社の応接室のように、掃部山花街も利用が多くなっていった。現在の西区花咲町五丁目、戸部町四、五丁目のにぎわいの基となった。

こうして、あるときは重工業の花形として実績を積みあげた造船について、大かたの市民は巨大な施設に目をみはり、折からの軍艦進水などの華やかさに声援を送ったものであった。

ここで建造されたものは、海軍の巡洋艦、航空母艦をはじめとする艦艇と客船、貨物船であった。「大正六年以降、昭和五年末まで約百五十三隻、総トン数三十万一千トンに及んで、一万トン以上のものでは日本郵船会社の客船、秩父丸、氷川丸、日枝丸などがある」（『横浜市史稿・産業編』）さらに船舶以外にも大江橋や瓦斯橋など橋梁の構造材などの製作も行われている。

◉問屋街――野毛地区が発展していくのは、こうした新施設の創立によって、地域的な景気をはね揚げていったことで拍車がかけられた。そして、大岡川、桜川の水運によって、川筋には、各種の問屋が形成されていった。特に大岡川の川筋、都橋あたりは問屋に毎日積却しされる物資が常に満ちていた。

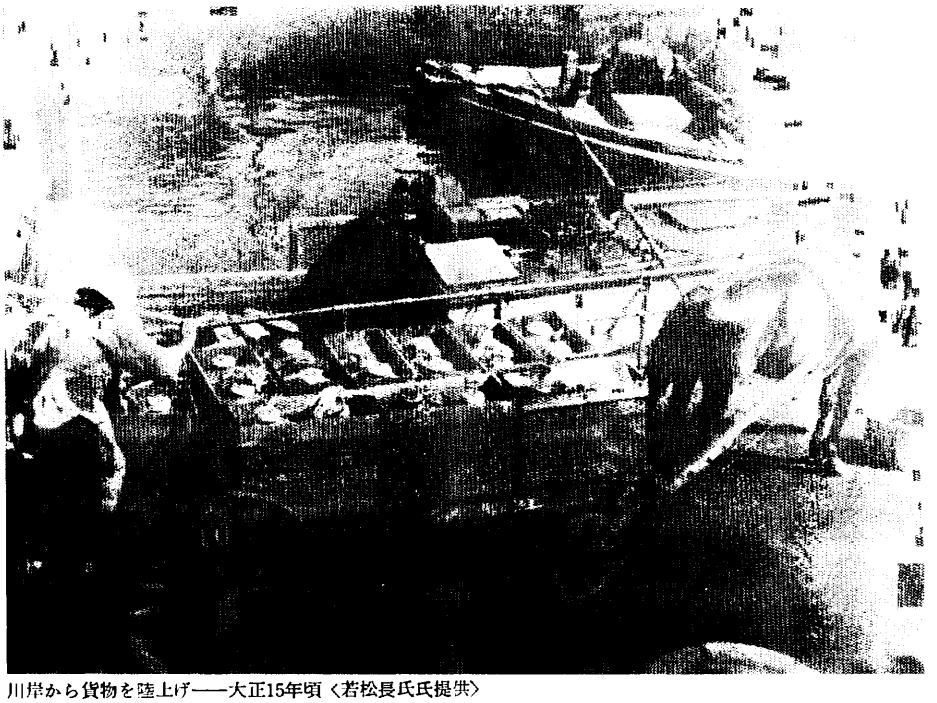
川筋に並んだ問屋について「私の処は塩問屋で、塩、ニガリを扱っていて、ニガリは明治屋に出していました。南吉田で製造して、今の油かんみたいな物に入れて輸出していました。店の主人（祖父）はちょんまげを結んだまゝで、シマの着物に黒い前かけ、懐には大きな紙入れ、その上を半紙で押え、角帯をしていました。岩塩を専売局から積んで、波止場で何トン何トンと数え、家に持って来て海の水でとかし、丁度酒作りのようなタルが二段になったような物でこしてました」（野毛町有志座談会）

◉川筋――問屋街は、「大岡川の河岸にずらりと、大村薪炭店、白井雑穀店、市原鶏卵店、原酒店、杉山砂糖店などの問屋が並び、桜川の河岸、緑橋を中心として、望月の外米専門の貿易商や船橋内地米問屋などが軒をつらねていました」（同座談会）こうした問屋街は、昭和になっても続いていた。

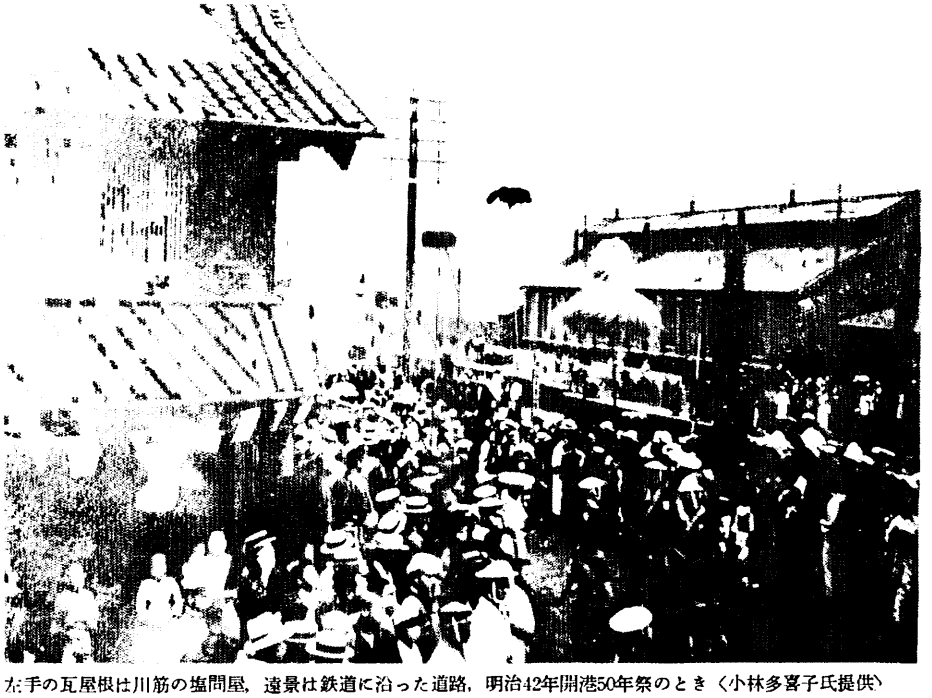
川筋の模様について土地の古老は

「野毛、花咲町の大岡川筋は、手鍋料理屋なんかが繁盛してて、特に牛肉屋の若い衆の呼び込みの声が景気をつけていました。それに桜木町駅線路沿いの桜川筋あたりには牛や豚肉の味噌煮込

岩亀横丁



川岸から貨物を陸上げ――大正15年頃〈若松長氏氏提供〉



左手の瓦屋根は川筋の塩問屋，遠景は鉄道に沿った道路，明治42年開港50年祭のとき〈小林多喜子氏提供〉

み、大福餅、焼き餅などの屋台が出ていました。そしてそれを買う人が高島町、雪見橋、大踏切りを通ってくる。子安、生麦方面からも歩いてくる。それにアサリ、シジミ売りや波止場へ往復する馬力の人たちも来るというようなもので、風物詩を描きました。それは今でも目に浮かびます。この川筋の河岸には柵がなくて、自転車にのった小僧さんがよく川のなかにおっこったものです。

河岸にそって材木屋、竹屋、瓦屋、煉瓦屋、薪、炭、石炭店の建物が大半を占め、ほかには、釣舟屋や河筋港内に係留の船に日用商品雑貨を売り廻る小舟商人（ウロ）の家がたくさんありました。この頃は川の水もきれいで、子どもの頃はよく泳ぎました。

昔は、横浜駅(現、桜木町駅)が終点だったでしょ。ですから、横浜駅から都橋に行く通りが、本当は伊勢佐木町にいく通りだったんです。鈴長とか牛屋が二軒あり、塩や砂糖などの問屋があり、川を使って荷の揚げ降しをしてました。野毛の本通りには店がつづいてましたが、店構えはそれ程がっちりしてませんでした。ですからまだその頃はそれほど盛んな所ではありませんでした。あの川ぶちは、ズーと料理屋が並んでいまして、川をバックにお座敷がありましたね」(花咲町　村上盛一氏談)

◉駅前――こうした商店街のほかに、各種の店も自然に増加していたが、野毛の丘の上の皇大神宮、野毛不動、水行場などへは、ターミナル横浜駅を利用して、参詣する者が多く、春ならば桜咲く皇大神宮など、四季を通じて市民にとっては信仰だけのものでなく、リクリエーションの場でもあった。こうしたことから、野毛あたりの商業地には、これらの人々の落す金もかなりのものであった。

横浜駅は、当時の交通機関の代表であった。

駅前には人力車が客待ちして、東京あたりの紳商が下車すると、この人力車に乗って関内あたりの商社にのりつけたものであった。「その頃、自動車がありませんから、駅から降りた人たちは人力（車）に乗るんです。明治の末、構内には人力車がおよそ一〇〇台ぐらいありました。うちの父親がその支配をしてたんでよく覚えています。

印半天に笠の車夫が駅の客を乗せると、『ハイヨッ』って威勢よく走り出すんです。それはそれは活気がありましたね。特に東洋一という根岸の競馬場のレースがある日なんぞ、各国の紳士や貴婦人たちが、横浜駅で乗り降りするもんですから、人力車が出はらうようなこともしょっちゅうでした。

当時、横浜駅の前は広場でしたね。今のバス停の所に小公園がありまして、そこの噴水で遊んだものでしたね。川ぶちには、桜とか柏の木や古い木がありましたよ。ちょうど今のゴールデンセンターの所と興産館のあった所が機関車の方向を変える場所で、そこには、機関車をぐるりとまわす機械があったんです。機関車に使う石炭の揚場を兼ねてました」(花咲町　村上盛一氏談)

大江橋から停車場を見る――川岸にもずらりと人力車が並んでいる

横浜駅（現，桜木町駅）――明治40年末期催事の際〈吉岡晋氏提供〉

鉄道創業以来の横浜駅は、大正四年八月、新設なった高島町駅にその名を譲り、桜木町駅となった。桜木町駅へは、前年運転を開始した電車が、十二月に延長、乗入れた。

◉忠泳館――この頃の野毛山や伊勢山は、いまと違って、ビルに視界を妨げられることもなく、横浜港は一望のうちにあった。この港の一角、弁天橋北わきで、神奈川と碧海橋との間に、三十三年（一九〇〇）十一月、小型蒸気曳船の客船の営業が行われていた。この通航の船の往復航路わきを利用して、忠泳館という海上の施設が設けられていた。貨物用のだるま船を利用して紅白のまん幕、五色の旗を風になびかせた華やかさであった。納涼、水泳場とされた。置かれたのは、一、二年間のことのようで、三十九年八月には通航船の休止にともなって廃止となったのであった。横浜らしい一つの風情であった。

「明治中期から水府流太田派の師範によって広められたもので、ここで教をうけた人達の中から、日本水泳の第一頁を飾る大選手鵜飼弥三郎が生まれ、現神奈川県水泳連盟名誉会長須藤求が出ている」（『神奈川県体育史』）

忠泳館を知る地元の老人は、次のように語っている。

「水泳場は男女別々になってましてね、船腹のところが水泳の教室、上の甲板の方が一般の人が遊ぶところとなってました。海岸通りの本問組の親父さんが持っていました。

水泳教室には一円二十銭で入れました。そう明治三十八、九年

の頃ですかなァ、先生は鵜飼弥三郎という人でした。極東オリンピックが開かれたとき、弥三郎先生も選ばれて参加しました。そう、これが水泳選手のはしりでしょう。

オリンピックは上海なもんですから、いよいよゆくときに、住吉町一丁目の「都川」という料理屋で、壮行会を盛大にやったんです、飲めや歌えやって……桜木町駅(ママ)ではバンザイバンザイ。そして「ヤーチャン」がゆくんだから、外国人なんかにはまけやしないよって、みんなで話をしてたんです。ところが、いつになっても何も新聞には出ない。帰ってきたので聞いたらウーンといって首を横に振るんです。どうやら、てんで問題にならなかった位遅かったらしいんです。なにしろ五百ヤードをむこうはクロールで泳いでいるのに、こっちは抜き手だっていうんですから、まあ当たり前のことですな」(伊勢佐木町七丁目　田村益太郎氏談)

この鵜飼弥三郎は本牧の船頭の息子、三十二、三歳で弥生町あたりで亡くなったと記されているが、横浜で国際大会に出場した水泳選手の草分け的な存在といえるのであろう。

要するに野毛は繁盛する要素に恵まれていて、商業の町となるのは必然であったといえる。しかし開港以来の関内方面へののど元として変ることなく、また横浜駅(現、桜木町駅)の所在地として関内の玄関口の使命を持ちつづけることになる。

(2) 商人の町

◉高級住宅地――明治三十年代、関内に居住していた横浜商人たちが、欧米人にならって、商店と住宅とを別にする傾向が現われはじめ(『横浜開港五十年史・下巻』)たが、その住宅地として格好の地となったのが野毛山あるいは伊勢山であった。

三渓園に移る前の原善三郎、それに茂木惣兵衛、平沼専蔵、それに渡辺福三郎、朝田又七、左右田金作、増田嘉兵衛、中村房次郎、小野光景、山の下には木村利右衛門など、横浜の財界の重鎮の邸宅が目白押しであった。それはあたかもはるか彼方の山手の丘、外国人住宅と相対して、そば立つようであった。こうして野毛山一帯は横浜商人の邸宅地となった。

いまこの遺構は、わずかに野毛山公園入口あたりの城壁を思わせる化粧間知(けんち)石の旧平沼専蔵邸の石崖とれんが塀、それに、もと三井家の所有地、伊勢山皇大神宮裏隣の旧原田邸(現、神奈川県議会議員集会所)におもかげを見るだけである。原・茂木両邸の跡は野毛山公園や野毛山動物園となっているが、わずかに老樹にそれをしのぶだけである。

高級住宅化した野毛山の入口左手には尋常老松小学校(現、市立図書館位置)、坂の上には十全病院(現、老松中学校位置付近)などの公の施設もあった。

地域の老人は、次のように明治末から大正初期にかけての状況

野沢屋別荘("横浜銅版画"より)

を記す。

「坂上の辻を山に向って右折すると、坂の途中までの右側は偉風に満ちた石崖である。その石崖に囲まれたところに富豪平沼専蔵氏の宏大な庭を擁した西洋館の邸宅があった。この平沼邸の東北の続きに渡辺銀行頭取だった渡辺福三郎氏の邸があった。いまは横浜市図書館となっているところに、横浜市立尋常老松小学校が建っていた。学校は坂を登った十字路のところまであって、この坂を真直ぐのぼると『十全病院』につき当たる。当時市立の唯一の総合病院であった。

この十全病院の前の道路を右に半周すると、病院とは反対側に急な細い下り坂となった。当時、豚谷戸といったところで、野毛山の切り通しができる前の往還道路であったと祖父から聞いた。

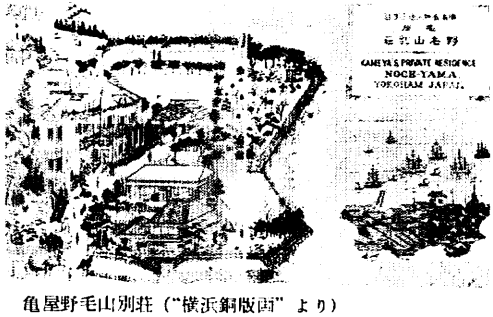
当時、老松小学校は丁字路角の木造二階建一部三階建で、見上げるようにりっぱな校舎だった。一階は小銃が整然と並べられた倉庫だった。二階は本校舎の一階に相当し、幼稚園、三階は六年生の教室となっていた。本校舎とは渡り廊下で連なり、二階の渡り廊下の中央からも校庭に出られるようになっていた。本校舎はL字型二階建で出入口は職員室前とL字型の角の二カ所あった。

この老松小学校の西北側は、貿易商、茂木惣兵衛氏の別邸で、石垣の上にあった。学校に沿って左折した坂道を登ったところにあたる。さらにのぼると、市長公舎があって、馬車で市長が毎日通勤したのである。市長公舎の向い側に松尾鉱業の中村房次郎氏の邸と増田増蔵氏の邸が隣り合っていた。その横裏に生糸貿易の小野哲郎氏の邸宅、市長公舎の筋向かいに当たり、また現在、噴水の池のある広場が原富太郎氏の邸宅で、門はすばらしい冠木門で、たしか欅の一枚板の二枚戸ではなかったかと思う。とに角、この一帯は、港横浜の富豪たちの邸宅が目白押しであった。

平沼専蔵邸跡——庭園遺構の一部

現存する邸宅（旧原田邸・現神奈川県議員会館）

◉山の下——野毛山の下には、明治の末から震災前まで、大聖院が、宏大な本堂をもって厳然と建てられていた。私ども子どもの頃には無かったが、祖父などの話によると、境内には大きな楠が高くそびえていたという。少しはずれて林光寺、そして成田の別院、狭い地域に寺院があるのは野毛らしかった。そこで、野毛坂には仏具屋が商売としてなり立つのは当然で、一時はそこかしこ



亀屋野毛山別荘（"横浜銅版画"より）

に出来たものだ。今も、数店が残っている。これは特殊な店といえるであろう。

それに、野毛坂下には俥屋が二軒あった。坂の上には十全病院があり、そのまわりには豪商の屋敷が多かったせいか、結構いい商売になっていた。今も変わらないが野毛坂は案外急坂で人力車は難儀をしたようで、坂にかかると、どうしても後押しが必要となる。そこで、二軒の車屋に待っていた別の車夫がとんでいってあと押しをやる、というのをしばしば見たものだ。

もっとも車には二人曳きというのもあって、坂なんぞ威勢よく走ったものだ。いつだったか、車夫に『そんなに早く長い時間走れるの』と聞いたら、『なあに車をひっぱってるから走れるのさ』という答に、判ったような判らないような気がしたのを今でも覚えている。とにかく、野毛の明治末から震災までは面白くてのんきな時代であった」(山本正喜　『明治大正頃の想い出』)

また町の人の談話

「野毛の山の下で一番大きな住宅は、木村利右衛門さんの邸ですね。伊勢佐木町の方から宮川橋を渡った突き当たりが木村さんです。大理石の大きな柱で、太さが四尺位のものが二本建っていて、大きな門がありました。左側は馬小屋、書生の家、競馬の馬を三頭飼っていました。

門の正面の右に井戸があり、きれいな湧き水がこんこんとでていました。高く御影石を井桁に組んでありました。そこに樫の木が一本あり、そこが憩いの場として、夏は随分土地の者も助かりました。よくみんなで水を飲んだものです」(野毛町有志座談会)

◉野沢の菊――邸宅をかまえた茂木家では大輪の菊を栽培していたが、明治の中期ごろからこれを市民に公開し、自由に観覧させた。以来「野沢の菊」として横浜名物の一つとなった。大正中期まで公開され、昭和三年、原・茂木邸の跡地が、野毛山公園として横浜市の公園となったとき、市民への公開が復活した。秋香会、重陽会などの団体が菊の栽培作品を出品した。のち昭和五年十月には公園正門前に、横浜菊技館という陳列場も出来て、市民に大いに親しまれた。

◉商人の町――しかしこのような高級住宅地域は、もとより庶民とはかけ離れた存在であった。庶民は丘下の町に活発な生活を営んでいた。明治末期の雰囲気を伝える大正十年代について「なんといったって、このあたりは商人の町です。お屋敷筋からそれほど買物があったわけではありませんが、うしろの方の住宅地や、地域的に条件がよかったこと、交通が発達していたことによるものでしょう。大体、道は戸部方面から関内方面へと別れていったので、交通の要所になって人の往来が多かったんです。この頃としては、市内でもザキにつぐにぎわいだったんです」(野毛町有志座談会)と町の人はいう。そしてその街並みが次のように記されている。

「野毛通りの店並みは大体そろっていたが、瓦屋根の純然たる二

階建て日本家屋の昔の型の店舗で、なかには土蔵造りの店もあった。野毛坂を下る右側には、今でも繁昌している数軒の仏具屋さんや刀剣屋さんがあった。日本堂というパン屋さんには、老松小学校の生徒達はずい分と厄介になったものだ。今でも盛大に商売している昔懐しい店である。

野毛坂を下りきった三丁目の右角には、結城屋八木商店（跡地はのちパチンコ屋、いまは駐車場）という大きな土蔵造りの酒の卸小売店があった。そして夕方にはこの角でおでんの屋台がでて匂いを発散させていた。吉田町の野毛おでんの元祖である。結城屋の並びに魚幸という大きな魚屋で、当時上等な魚を売っていた。上流家庭の仕出しもし、繁盛していた。野毛坂を下りる左側に楠があり、楠湯という銭湯があった

結城屋の反対側には栗原薬局という大きな店があった。この店の裏に子神社があり、神楽殿や樹木、入口に鳥居があって雰囲気のある神社だった。野毛坂の二丁目へ下りて結城屋とは反対の角には、大きな一枚板で、寿々木と金文字を浮彫りにした看板をかかげた和菓子屋があった。ここの礒最中は貝の形をしていて、なかには上品な塩気のあるあんが入っていて名物だった。寿々木の裏通りには天井にとどくような大きな醤油樽が二つある太田屋、その付近に山城屋、絵草紙屋、金久保果物店などがあった。

一丁目に入ると、みのや生菓子店、柳屋、稲垣商店（工業薬品）が続き、都橋付近で朝から金平糖やあんずに砂糖をまぶした乾菓子を作っていた、武蔵屋菓子店があった。このそばに、婦人用の化粧品を売っていた店、小間物屋が二、三軒あり、良い香りを発散させていた。この当時の店は少しの商品を店先きに出し、あとは一段高い畳敷きの処へ並べた構えであった。

土足で店の奥まで入れるのは、果物屋、八百屋、魚屋さんぐらいである。このような構造をもつ店のなかで、柳屋と稲垣商店の間にあった藤島洋品店は近代的であった。商品を通路に飾りたて、奥が畳敷きになっていた。手広い商売だった。

反対側の二、三丁目には山口自転車、もりかけ二銭五厘と張り出されていた中屋そば店などあり、栗原秤店は店に続いて工場をかかえた店であった。奥に倉があった江戸屋呉服店などが並び、ともかく当時は倉をもつ商店が並んでいたのである。

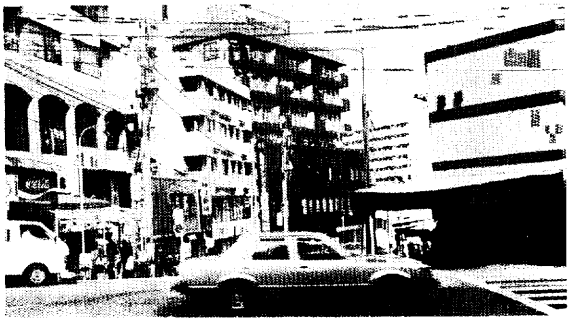
こうした町のうら通りは、地蔵横丁をはじめ、いつ頃からそう言われたか知らない腰弁横丁などの横丁が縦横にあった」（山本正喜『明治大正の想い出』）

◉**腰弁横丁**――「腰弁横丁と呼ばれる道がありました。野毛坂を下ってくると、みなと寿司と、みやこ寿司が並んでいる所があり、そこから栗原薬局の横丁に出て、革新クラブのあった横丁を抜け、石炭ビルに抜ける道がそれで、生糸屋などへ戸部方面からの人達が近道として通ったもので、今でいうサラリーマンが通った道です」（伊勢佐木町有志座談会）

次図は明治期の野毛の通り前方がやや高台になっているところ

明治期の野毛の通り〈ニイル・ペトラ氏提供〉

明治期の野毛坂〈ニイル・ペトラ氏提供〉



いまの野毛坂

から、現在の野毛町三丁目の通りの辺りのようである。右手には火鉢を積んだ瀬戸物屋の広屋、次に高木糸商店と唐草模様の斬新な看板、次に白露鉱泉、二階建の店は琴のばち型で、御琴三絃師とみえる。道ゆく男女とも和服で、コウモリ傘の婦人は日本髪、路上には荷車、遠くの方に豆腐屋が見える。

下図は野毛坂の模様明治末期、左手は学生、右手には姐さんかぶりの婦人と老母、後ろにはカンカン帽の男性、かなりの賑わいである。右手前には露店がある。左手は果物屋、次々に鮭、雞、乾海苔と読める。ひさしの白く見える看板には、牛乳販売とある。坂はかなりの勾配で、よく見ると、坂の途中にガス灯が見える。遠くに横浜正金銀行のドームらしい屋根が見えている。

◉**花咲あたり**——野毛の隣、花咲町の大正初期について、

「私どもはここ（花咲町）に親の代から七五年ほど住んで居ります。町内の中央、いまの本町小学校運動場のあたりには大型のガスタンク二基が並んでいました。隣り合った工場から、まっ赤になったコークスが出来、表広場に山積みされていたもんです。

その会社の前の桜川には瓦斯橋がかかってて、河岸にいつも船が横付けされていました。大勢の労務者が船からパイスケで石炭を工場まで担ぎ込んでいました。このこぼれた石炭やコークスを近所の人は拾って燃料にしたもんです。

ガス会社の横隣り、山ぎわでは、山から引いた清水で池を作り、立派な庭を持った料亭の『鳴門』がありました。これは、相撲の八角灘右衛門のお妾さんの経営でした。大相撲が両国で終り、地方巡業がはじまる第一に、ハマに来て伊勢佐木町の角力常設館で興行するんですが、場所中はひいきの糸やさん（生糸貿易商）や株屋がここに来て、芸妓をあげての散財でしたね。

相撲とりは二人引きの人力車、芸妓も関内から乗り込み、それはそれは派手なものでしたね」（花咲町　村上盛一氏談）

◉**宮川町**——宮川町のうら道にはまた、

「震災前のこと、衛生組合の隣りに、長谷川稲荷というお稲荷さんがあり、近所の子どもが二月の午の日に集まって太鼓を叩いて遊んだものです。

衛生組合の事務所は私の一軒隣りにそのまま残っています。若松さんの焼鳥屋の横丁を入って突き当たりに今のお稲荷さんがあります」（野毛町有志座談会）

「関東大震災直前の宮川町は、町の半分の面積が鉄道省の高架線敷地となって家が取り払われ、一、二、三丁目合わせても、ほんのわずかな家があった程度でした。従って、町内会というものがなく、町の有志五、六人が集まって、いろいろと町の面倒をみていたようです。町の出銭があれば、その有志で話し合って出しあったようです。勿論、町内会費というのがないんですから。

町内の道路は、舗装道路というのは少なく、土と砂利道でした。もっともその頃は、どこでも殆んどそんな道路でしたが……。その道には車といえば馬力車、荷車、リヤカー、自転車が通

瓦斯局——大正初期

るほかは、自動車などはめったに通りませんでした。

街並みといえば、商店は少なく住宅地でしたが、そこには職人衆が多く住み、『職人町』と呼ばれていました。それとどういう訳か、医院、病院が多かったんです。アパートが多かったですね」(同、座談会)

◉野毛の隣接地――また、震災前の日ノ出町や初音町方面は、野毛の隣接地として、いまの南区や西区をつなぐ中間の地域で、交通の要衝でもあった。

この界隈の中央部には、折れまがってはいたが南太田方面へのメイン道路、その両側には小規模な商店と郵便局、看護婦会、戸部貯蓄銀行、それに医院などが街並を形づくっていた。

商店街の北側は野毛の丘、丘上の大邸宅群の下、中腹から商店街うらにかけては閑静な住宅地であった。反対側の大岡川沿いは、さほど大きくはないが、工場、事業所が多く、子神社が鎮座していた。それに、旧陸軍省用地の名残りの空地がところどころにあって、草原や材料置場でもあった。

「震災前の道といったら、日ノ出町から野毛の方にゆくと、黄金町の通りと野毛からの通りとがつき当る道とか、初音町の通り位が主な道路で、ほかはこまかい道ばかりでした。それでも表の通り、日ノ出町や初音町の通りなんぞは野毛やザキに負けないほどにぎやかだったんです。そのくせ日ノ出町あたりの表通りを一寸はずれれば静かな町でね、病院(医院)がたくさんありました。そう、覚えているだけでも、宮本、堺、桜林、大西、木村というようなお医者さん、それに田崎、小林というような歯医者さんというようにね。十全が野毛山にあったせいかどうか知りませんけど、医者の町といわれてましたね」(同座談会)

日ノ出町の裏通り、いまの子神様のとなりは教会で、その上の山は「れんげ山」と呼ばれ、春ともなると、レンゲの花で一面に埋ったという。

「この地区で、震災前後で一番変ったのは、東小学校のあたりね、坂はもとはだらだら坂で、上の方は金持ち、下の方はそうでない人という具合に住んでいました。震災ですっかり住宅が焼けて、そのあとに学校を建てるのに土地を平らにしたんですが、その丘のすぐ前には上郎さんのお屋敷がありまして、あの人が道をうんと拡げたんです。上郎さんは磯野庸幸さんとご兄弟で、大地主で貴族院議員、神奈川県で二番の自動車のナンバーを持っていたのでも有名でしたね」(第一北部有志座談会)

「うら通りの住宅地は官吏や銀行員などのつとめ人が多くって、門がまえの家がずい分ありましたよ。それにイキな格子づくりの家にはお妾さん、昼間でも三味線が聞えるんです。のんびりしたもんですよ」(同座談会)

「わたしの祖父は英町で人力車屋をやっていましたが、六、七台の車が絶えず溜ってましたが、屋敷町のようなところですから、随分とはやったもんですが、ほとんどは特別のお宅のお抱えのよ

うなもので、うちから毎朝その家にお迎えにゆくんです」（同座談会）

◉**川のふち**――「川のふちのところね、子神様は震災前、朝日橋と黄金橋との間の川のふちにありました。土手のところに桜がズーとなびいて、とてもいい風景でしたね。『松かぶ』という大きなそばやがありまして、小部屋をいくつも持って、横浜一といわれていました。

それと西川のオルガン工場があって、中は知りませんが、外にはうすい木材が十文字に組んで積みあげてました。馬力がいつも出入りしてましてね。馬力といえば、栗加運送店というのがあって、長者橋からズーと広い土地を使ってました。あそこは馬だけでも四八頭もいたんです。

それに、初音町の三丁目には、宮崎工場という大きな染色工場がありまして、一二〇人ほどの女工さんがさかんに仕事をしていました。四丁目（当時）には豊川稲荷もありました」（同、座談会）

町の人々には、こうした多くの追憶がある。けれどもこのような町のたたずまいは、やがて襲った関東大震災によって一瞬のうちにくずれ去り、そして炎上してしまうのであった。町の人々のなかに、きっとまだまだ多くの追憶がある。しかし、それは、ふたたび想い出したくないという追憶でもある。

大正末期震災前までの野毛地区を大きく分けると、海に臨み桜木町駅を中心とする公共施設の地域。桜川、大岡川に沿う花咲町の問屋街の地域。野毛山の高級住宅地。野毛山の丘すそに沿う日ノ出町、初音町にかけて、丘すそは医師、弁護士、商館の勤め人など。下道に沿って商店と勤労者の住宅、そして野毛坂から都橋の通りの商店街、裏にはここも勤労者の住宅、いわば住商混在などとかなり明確な地域の区分ができるようになった。

(3) 一度の惨状

◉**猛火に追われて**――大正十二年（一九二三）九月一日、突然襲った地震は、この地区にも直接に悲惨な被害を与えた。

前述の町の人々の追憶にもあった震災直前のこの地区の中心といえる町は、桜木町駅の所在地の桜木町一丁目から三丁目まで、と、隣の野毛町であった。桜木町はターミナルであって、関内の陸路の入口的な存在であった。ここには横浜日日新聞社、海外渡航検査所、横浜市中央職業紹介所、神奈川県農工銀行、横浜米穀倉庫などがあり、野毛町には女子商業補習学校、興信銀行、左右田銀行、平沼銀行の各支店（二丁目）、子神社、税関宿舎、酒井病院、小松病院、飯田病院（三丁目）、大聖院、横浜瓦斯局などが主な建物であったが、瞬間の激震によって中央職業紹介所、海外渡航検査所を残してすべてが倒壊、そして焼失した。

野毛町と宮川、福島、花咲の各町は、戸数一、七〇〇戸、人口七、六五〇人であったが、この地域にも火が四方八方から襲い、逃げ遅れた人々のうち三〇〇人が無残な焼死、又は行方不明とな

った。親子もろともに焼死したのもざらであった。人々は桜木町駅前広場、伊勢山、掃部山、水道貯水池、平沼邸、久保山などへ命からがら避難したのであった。

一方、日ノ出町ほか清水、霞、初音、三春、黄金、英の各町でも目立った建物はなかったが、民家、店舗などいずれも倒壊し炎上、おびただしい死者を出した。日ノ出町の場合、黄金橋、朝日橋、長者橋のいずれもが焼失落下、避難者は逃げ場を失ない、このため、一四〇人以上の犠牲を出した。人々は省線建設予定の空地などへ避難したが、そこで焼死する者も多かった。鉄道省建築事務所跡地や一丁目の五〇〇坪ほどの邸跡の空地では三〇数人、鉄道省建築事務所跡地、長者橋付近にはそれぞれ数十人と折り重なり、一四三人ほどが犠牲者となった。

清水町ほか五つの町も倒壊、焼失、道路は亀裂、埋没、人々は水道貯水池や久保山などに避難したが、二〇〇人以上の死者を出した。

「震災の時は、一丁目から三丁目まで一直線に地割れしました。またその時、末吉橋のところを湘南電車が通ることになるというので、その下が空地になっていました。そしてその上の方に『松の湯』というお湯屋さんがあって、お湯屋さんの前の水道が破裂しましてね。水が湘南電車の空地に流れ、まるで川のようになったのです。震災の時に火事がすごく、逃げ場がなくなって、水があるというので皆そこに逃げたんですが、そこで四〇〇人位の人が折り重なってなくなりました」（第一北部有志座談会）

「私どもは、はじめ東福寺の境内に避難しましたが、ここにも火が迫ってきたので水道の山（水道貯水池……編者）へ逃げました。お寺も焼け、まわりの一四〇戸ほどが焼けました。赤門の谷戸も四〇〇戸ほどありましたが、霞耕地や谷原耕地の人たちが、バケツや手桶でもって下水の水を汲んで建物にかけてくれたので、火は出なかったんですが、延焼でだめになりました。

それと墓地あたり四カ所ほど長さ七〇メートルぐらいに地が割れまして、それはすごかったですね」（同座談会）結局、川と山にはさまれた人々にとっては、どこへ逃げても多くの犠牲を払わなければならなかった。その一つの原因としては、不規則な道路、木橋がその犠牲を大きくした。

◉復興始まる――一面の焦土となったこの地区の、かつての野毛、宮川町の繁盛も問屋街の華やかさも、野毛山の邸宅も日ノ出町方面の落着いた雰囲気も、すべてなくなってしまった。ただの平地と山と川二筋、となったこの地区には、わずかにくずれ残った駅舎と、駅のまわりの鉄筋構造の建物数棟が見られた。比較的早かった鉄道の復旧と運転開始が市民を安心させ、救いとさえなった。横浜市存亡の瀬戸ぎわにあたって、焼け残った桜木町の海外渡航検査所は、九月二日、一時的に県庁の仮庁舎にあてられ、のちに罹災者の治療班の本部となって活動を開始、中央職業紹介所は横浜市の仮庁舎とされ、十一日には早くもその屋上で青空市

会が開かれた。

そして鉄道の復旧開通とともに、官民一体、全市あげての復興への動きがはじまった。

しかし市民は四散してしまっていて、その復帰には数ヵ月が必要であった。野毛の横浜財界人の邸宅でも同じで、一時的には残ったものの、いずれも、震災後は、この地から移転してしまった。

野毛に邸宅をかまえ、震災にあった財界人について、町の人々は次のようにいう。

「寄付などを富豪から地区では受けませんでしたね。市の方へ寄付していたんじゃないでしょうか。市全体が被害を受けていましたから、富豪の人たちも事業の方がやられていて、とてもそれどころじゃなかったんじゃないですか。地元の方でもそんな要求などせず、自分でどんどんやってゆこうという気魄に燃えていました。

ともかくその富豪も自分の事業のほうが大変だったんじゃないでしょうか。インドの貿易をやっていた人が神戸に行ったので、一時生糸の主流があちらに移ったんです。ですから横浜の方は対策に奔走していて、大変だったと思います。けれど、市には寄付をしてくれているんですね。例えば記念会館なんか、富豪がより集まって造っちゃったんですからね」(野毛町有志座談会)

財界人が去ったあとの野毛山には、震災復興事業の一つとして、原、茂木家の庭園を中心として二万七、五一七坪の土地をもって、大正十五年九月、野毛山公園が完成した。

震災の復興については、今だに地元の人は多くの追憶を持つがその一部をあとのページの写真に見ることができる。

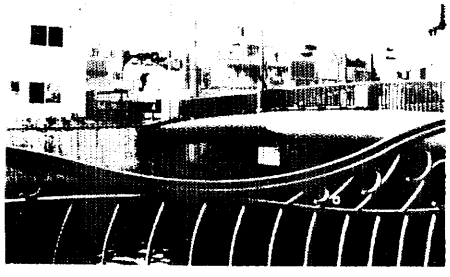
震災後の都橋。木製の仮橋が架けられた大岡川はどす黒く濁っている。対岸は野毛町、小さな建物は消防ポンプ小屋、うしろに大八車が見える。荷揚げ場も震災で崩れたままで、まだ復旧はされていない。小屋の下に長方型の排水口が見える。人がこごんで

横浜市の仮庁舎（旧中央職業紹介所）——現存している

仮庁舎での緊急市会

老松小学校罹災児童の野外授業――野毛山公園にて〈角田芳雄氏提供〉

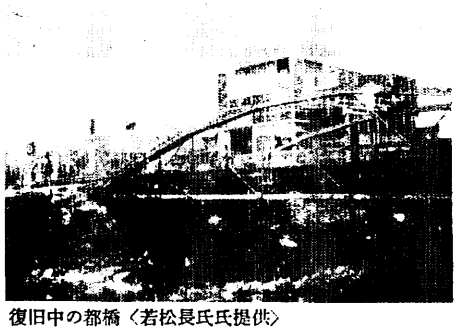
震災後の都橋――仮橋と川岸〈若松長氏氏提供〉

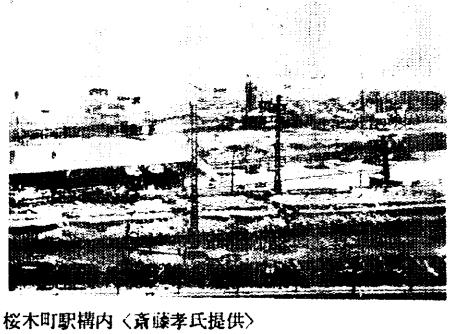

現在、同位置の川岸

入れる位の大きなもので、地元の人は「震災の火災のとき、ここへ逃げ込んで、一三人が助かりました。ずっとこの排水溝は野毛を通っていましたから、ここまでは炎も来なかったんです」（宮川町　山本正喜氏談）という。この位置は、都橋交番の下に当っている。

復旧がすすむ都橋。宮川町側から撮影したもの。川は大岡川、河床はかなり荒れている。建物の看板には「鈴木電気店」「〇〇貯金銀行横浜支店」とある。まばらに店がある野毛の情景がみられる。

桜木町駅構内。いく重にもつづく地割れができ、建物の屋根もくずれ落ちている。焼けて骨だけになった貨車は、まだ片ずけられていないが、二条ばかりの線路が、はやくも敷かれている。復旧が始まった直後の状況である。


復旧中の都橋〈若松長氏氏提供〉


桜木町駅構内〈斎藤孝氏提供〉

◉区画整理――この地区での復興の第一にあげられるのは、土地の区画整理であった。野毛町一、二丁目と宮川町は第四地区。初音、黄金、日ノ出、英、三春の各町、霞町と南太田字西中耕地、前里耕地の大部分が第五地区に指定され、区画整理によって、道路に大はばな改良が行われた。道路幅は一三メートル、一五メートル、一八メートルを二二メートルに広げられ、日ノ出町、初音町などのざくざくな道はまっすぐに改良された。幹線の三路線が新設された。

さらに桜川は一八、大岡川は二二メートルにそれぞれ川はばが

広げられ、川からの物資の積み降しの便利のため、川の護岸の肩をけずって堀川、中村川などと同じように物揚場が設けられた。

それに、いままでの宅地は不整形で、路地や袋地の土地はなるべくそれぞれの筆（土地一か所の単位）ごとに正形にして、その一辺は必らず道路に面しているように施工された。特に商店、病院、旅館、浴場などは、その位置や間口が重視されて、なるべく有利なように整理された。

この整理によって、建物が移転、整理されたが、野毛地区の街区整理の最大なものとなった。現在の街区は、今でもこのときのものである。こうした結果、道路交通、一筆毎の土地、そして舟運上にいちじるしく便利となり、さらに鉄筋造による橋梁がかけられた。

町の人々はこの区画整理について次のようにいう。

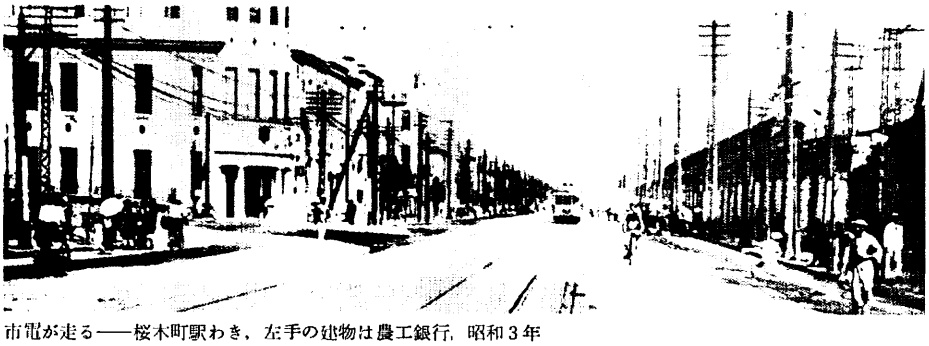
「野毛が、横浜の消費需要に答えられたという理由のひとつに、地主が二割、土地を出した震災後の区画整理があげられます。現在の街はその区画整理のままですが、道幅が一番狭くてもすべて六メートルにつくられていて、人々が通って来るのが非常に楽なんです。道に面している所が多いので、どこも商いの適地となり、商売する人がとても多かったですね」

「区画整理は非常によく出来ているんですが、自動車のない時代にやったものですから、今となっては道路が狭いですね。なにしろ二年間でやってしまいましたんですから」

「大岡川は昔、五間の川幅でしたが、震災時の一部崩れたものの、石垣はもったのです。再復興事業で川幅が広げられ、現在の二二メートルにしたものです。あそこを掘って、いまの石垣を造ったとき、木をさしたような、六尺ぐらいの松板が沢山出て来たんです。もうひとつ珍しいのは、竹の簀がそのまま出てきたんです。そうすると、今の川ふちより五間先、現在の川の真ん中が渚だったと見られます。それから先は全部埋地ですね。野毛は海っぷちだったといって差し支えないと思います」（以上、野毛町有志座談会）

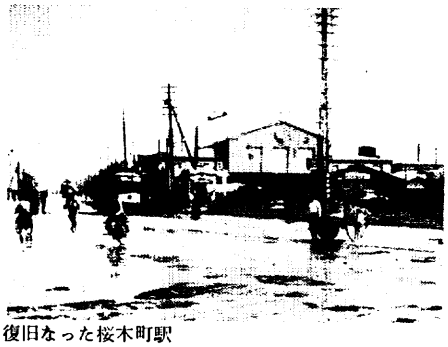
●市電の整備――拡げられた道路（議定道路）の上に市電の路線が敷かれていった。昭和二年（一九二七）の五月十二日に霞町―初音町間（西戸部線）、三年七月には初音町―阪東橋間（久保山線）、その十二月二十八日には日ノ出町一丁目―吉野町三丁目間（日ノ出線）が、小きざみではあったが次々と延び、初音町や黄金町は交通の上で便利となった。初音町の交差点もこのときに造成され、道路輸送のうえに、市電の交通網でも中心地の一つとなり、西区や南区へ通ずる交通上の大切な拠点となった。

開通のときは「大勢の人たちと一緒に日ノ丸の小旗をふって、開通を祝いました」という地元の人も多い。町の人々にとって、市電は大いに歓迎された交通機関であった。「なんといいましても、市民にとって市電は、一番早くて一番安い乗物として愛用されておりました。特に通勤客の早朝五銭というのは魅力で、電車の



市電が走る――桜木町駅わき，左手の建物は農工銀行，昭和3年

復興後の桜木町駅周辺〈斎藤孝氏提供〉



復旧なった桜木町駅

まわりにぶらさがって乗っていることがありました。文字通り鈴なりですね。それに、乗り換えキップをうまく使って、片道七銭であっちこっちの用を全部足してきたなんて、得意になっていた人がいたもんですよ……」（同座談会）しかし足となった市電も、昭和四十七年（一九七二）三月三十一日をもって廃止されることになる。

◉湘南電鉄――つぎに震災後の復興の大きな柱は湘南電鉄の開通であった。これよりさきの震災前、桜木町から大船にいたる国鉄の延伸が計画されていた。土地の買収が始まり、震災直前には一応整地され、高架の土台コンクリートの杭打ちも完了していたし、この用地を立退いたあとの、あちこちの路地の整地がほぼ整ったばかりであった。しかし震災が直接の原因となってこの延伸計画は、中止となっていたのであった。

それに対して私鉄の導入が、本市震災復興計画の一つとして組みこまれた。湘南電気鉄道（現、京浜急行線）の敷設と、黄金町と日ノ出町駅の二つの駅の開設であった。

湘南電気鉄道は、その沿線の浦賀、三崎方面を郊外住宅地や遊覧地として、開発を図り、京浜地方との乗客、貨物輸送によって収入をあげることを目的とした。大正六年九月鉄道敷設の免許申請、十四年（一九二五）十二月会社創立、折から震災後の復興事業とのかかわりのなかで、昭和五年、黄金町―浦賀間を開通させた。黄金町は一時期終着駅となった。さらに、今まで黄金町、横

浜間はバス輸送だったものを電車に切り替えるため、この区間を二つに区切り、黄金町から日ノ出町まで一部、鉄道省の計画廃止の用地（日ノ出町）を利用して〇・六キロメートルを湘南電気鉄道株式会社が、また日ノ出町から横浜駅まで二・七キロメートルを京浜急行電鉄株式会社が、それぞれ分担して工事を開始、このとき日ノ出町と戸部の間、野毛山の丘陵下のトンネル工事は巨額な工事費に加えて困難な工事となった。昭和六年（一九三一）十二月、現在のように全部スラブ式高架で、工事が完成した。

そして、黄金町駅は五年四月一日、日ノ出町駅は遅れて六年十二月に、それぞれ駅舎やホームが竣工した。

「湘南電車の日ノ出町の駅付近の如きは、新横浜の一景をなすものとして特筆に値ひする。駅の直ぐ真上に、線路に跨って設計された鉄橋なども気が利いてゐる。…この鉄橋は好個の休み場所でもあり、休みながら都心の市街美を眺めるためにも絶好の高さだ。整備された日ノ出町や長者町の大通りに、青々と甦る美事な街路樹を背景にして、右往左往する自動車の二十日鼠のような敏捷さが、都会地のめまぐるしさに馴れた瞳底に、一点景として映るのは、都人士でなくては解し得られぬ悟りの愉快さである。明るい雨の降る日、此鉄橋の上に傘を傾けて、夢みることより他に用のなささうな一人の男が立ってゐた。五、六台の湘南電車が竹を割るやうな頓狂な警笛を響かせて、彼の脚下を行ったり来たりした」（山本禾口『横浜百景』）

◉町名変更――町並みがととのい、湘南電車が高架を走り、市電が広い道路を通り、交通体系がととのったこの地域は完全に市街化していった。そしてこれにともなって、町名町界の変更が行われた。

昭和十年（一九三五）七月一日、清水町と霞町の全部、それに南太田の一部が加わって赤門町が新設された（昭和十九年四月一日西区新設により、二丁目だけ西区に編入）。

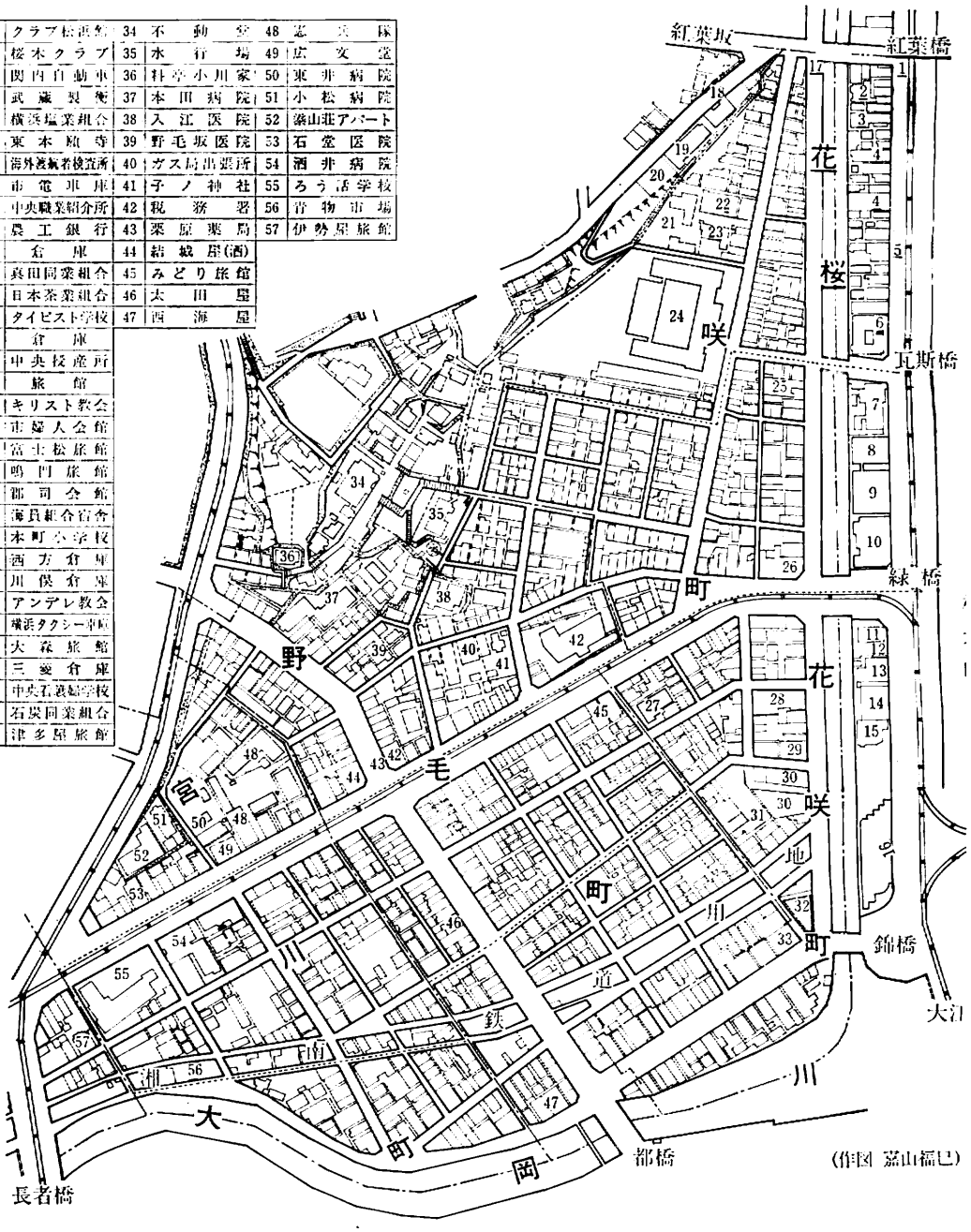
このときのことを、古老は次のように語っているが、町名の変更のときの動向を示すものの一つである。

「はじめ、私たち住民は英町と霞町、それと清水町とを合併して一つの町にしようという意向を出したんですが、市の方が困る、英町には公益質屋がある、合併するなら英町は残してくれというんです。

それで霞町と清水町が合併して赤門町になりました。町名は赤門東福寺が有名なので、私たちが提案して赤門町となりました。英町はそのままで、町内会は赤英町内会としました。

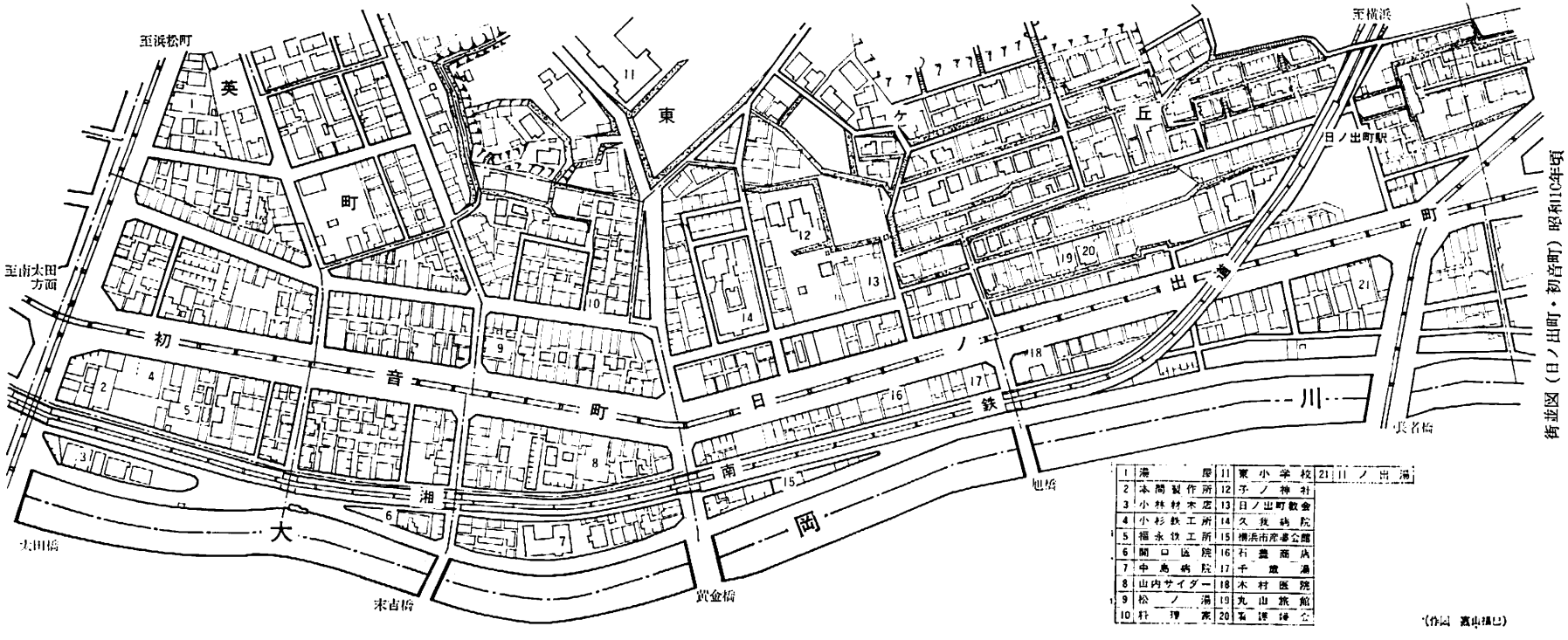
あとのことですが十九年四月西区へ分割のとき、いまの赤門町二丁目は昔は霞谷戸といっていたんで、霞町とかしたらどうかって、西区の人たちに云ったんですが、向うは駄目だといって、結局は町名はそのまま、西区赤門町二丁目となってしまいました。赤門といった方が世間に通りやすいということだったんでしょうね」（赤門町一丁目　潤米保太郎氏談）

1	クラブ松浦館	34	不動堂	48	志賀隊
2	桜木クラブ	35	水行場	49	広文堂
3	関内自動車	36	料亭小川家	50	東井病院
4	武蔵製麺	37	本田病院	51	小松病院
5	横浜塩業組合	38	入江医院	52	藤山荘アパート
6	東本願寺	39	野毛坂医院	53	石堂医院
7	海外養蚕者検査所	40	ガス局出張所	54	酒井病院
8	市電車庫	41	子ノ神社	55	ろう唖学校
9	中央職業紹介所	42	税務署	56	青物市場
10	農工銀行	43	栗原薬局	57	伊勢屋旅館
11	倉庫	44	結城屋(酒)		
12	真田同業組合	45	みどり旅館		
13	日本茶業組合	46	太田屋		
14	タイピスト学校	47	西海屋		
15	倉庫				
16	中央授産所				
17	旅館				
18	キリスト教会				
19	市婦人会館				
20	富士松旅館				
21	鳴門旅館				
22	郡司会館				
23	海員組合官舎				
24	本町小学校				
25	西方倉庫				
26	川俣倉庫				
27	アンデレ教会				
28	横浜タクシー車庫				
29	大森旅館				
30	三菱倉庫				
31	中央工業婦学校				
32	石炭同業組合				
33	津多屋旅館				



(作図 蒲山福巳)

街並図（野毛町・宮川町・花咲町）昭和11年頃



街並図（日ノ出町・初音町）昭和10年頃

（作図 嘉山博巳）

湘南電車が敷かれたことによって、駅のまわりはもとより、周辺、特に野毛の商店にふたたび活気をもたらしたが、日ノ出町方面、野毛山すその中流階層の住宅地は、震災後にこれらの人々がもどることも少なく、町の性格が住商混在の住宅地域となっていった。そのなかでも中心的なものは、赤門そばへの大型集団商店としての市場の設置であった。赤門市場がそれで、今まで住宅地のなかに散在していたものが、震災後ここに集約された形で、マーケットを形成したのであった。一四棟二四店は、市民に日用必需品を販売した。藤棚や南太田方面からの買い物客も多く、一時は子安の大安、本牧の上台、高島町の桜橋とともに、四大市場といわれたという。

◉**赤門市場**――「酒屋、雑貨屋、煮豆屋、肉屋、八百屋、米屋、干物屋、精進揚げ屋、菓子屋、パン屋などの店がありました。同業が二軒ずつ位あったため競争でした。毎月一日、十五日が特売日で、スリが出る程の賑わいでした。私もよく買いに行きましたけれど、安かったですよ。新鮮でいいお刺身が十銭位で買えましたから毎日でも食べられました」(第一北部有志座談会)

こうした市場の設置は、かつての門がまえの家、静かな屋敷町の街並みが変わり、下町的な移行であったといえる。

◉**赤門の縁日**――こうしたなかで、赤門東福寺の界隈は今までより以上ににぎやかになった。特に赤門の縁日は賑わった。なかでもえん魔の縁日は、盆の十六日、正月の十六日と「やぶ入り」に

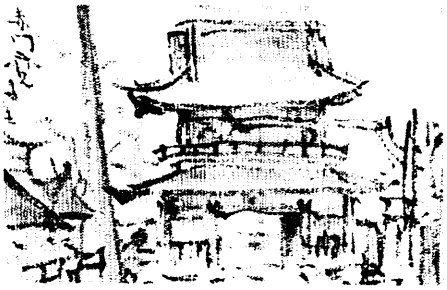
赤門市場から祭礼の御輿を出す――昭和初期〈森主三氏提供〉

旧赤門市場跡(赤門町一丁目所見)――いまは露地となっている。

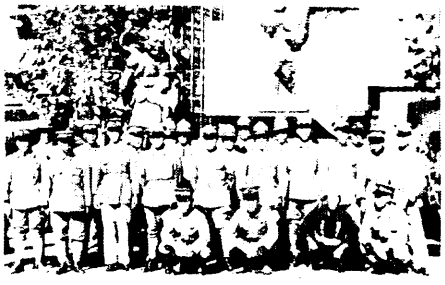
合わせての二回があって、地元だけでなく「やぶ入りの小僧さんや娘さん達がわんさと押しかけて、すごかったです」（同座談会）

震災後の昭和六年（一九三一）十一月一日震災で焼失した山門を再建、仁王像の入仏式が行われたが、このとき町の青年団や氏子が奉迎の奉仕をしたのであった。「東福寺の焼ける（編者注・戦災）前の仁王様は、名のある仏師の作で立派なものでした。青年団や氏子が主体となってこちらに引いて来ました」（同座談会）

またこの時の青年団の一人は、「まことに光栄な奉仕として、これを夢中で引いてきた」という。東福寺の仁王さま、えん魔さまは震災後も依然としてこの地域の象徴であり、町の人々にとっては赤門といって親しまれていたものであった。



赤門といわれた東福寺山門（小島一谿画“横浜百景”より）



東福寺仁王像の青年団奉迎（昭和６年）〈秋葉義七氏提供〉

◉公的利用――街並みの復興とともに、この野毛地区は、またまた公的に大いに利用されることになった。それは、開港の際、戸部役所、役宅などが建設され、当時の政策の上で活用されたと同じであった。横浜市あげての震災復興にあたって、ふたたびこの地区は山にも平地にも市の施策としての施設が置かれるのである。

市庁舎が港町に帰ったあとの中央職業紹介所は、罹災者の職業紹介にフル活動するが、十三年には、中村町や花園橋脇、翁町より先がけて市営桜木食堂が開設され、一旦廃止されたのち、昭和三年には復活、罹災労働者の食生活に活動することになった。

二年、野毛山の原・茂木邸の跡地の庭園全部と水道の給水場を加えた丘に、復興局によって工事費八二万円で、野毛山公園が開

震災記念館――現在の市営老松会館

旧横浜税務署――（野毛町３丁目）

園。そしてその公園入口の坂わきには、横浜市図書館が開館した。それに、本市博物館のはしりといえる震災記念館が設立された。さらに四年の六月、不景気のなかで中央授産所が桜木町に、そして野毛町の国有地には横浜税務署が開庁した。

この間、催事も桜木町を中心に開かれた。大正十四年三月二十日には横浜復興特産品展覧会が駅前で、四月一日には興産館の屋上では浜交会・つどい会・新興美術協会の合同主催で横浜美術協会展覧会、それに昭和四年六月十六日に市主催の社会事業博覧会が同じ桜木町で開催されるなど、そしてなによりもターミナルの桜木町駅は、人の集まる中心地となった。

それに造船所の好況のなかに近隣も繁盛していた。なかでも掃部山の芸妓組合は三五店をもって顧客に好評であり、さらに料理屋の紅葉閣が加わって一層の充実を見せていたのであった(『演芸かがみ』)。このため戦前、花柳界としてにぎわいを見せて独特の風景を出現させていたのであった。

◉司令部の丘——日中戦争に入ると、こうした独特な雰囲気も消えて、市街地を見下す山は軍事に利用されていった。早くも昭和八年には、野毛町に憲兵隊が駐屯した。九年には掃部山公園内に男子修養道場が開かれた。十二年(一九三七)の十一月、この頃はまだ野毛名物の菊花大会も行われていて、二五日間で一五万五千人の参観があった。時局柄このとき皇軍人形が人気を呼んだという。

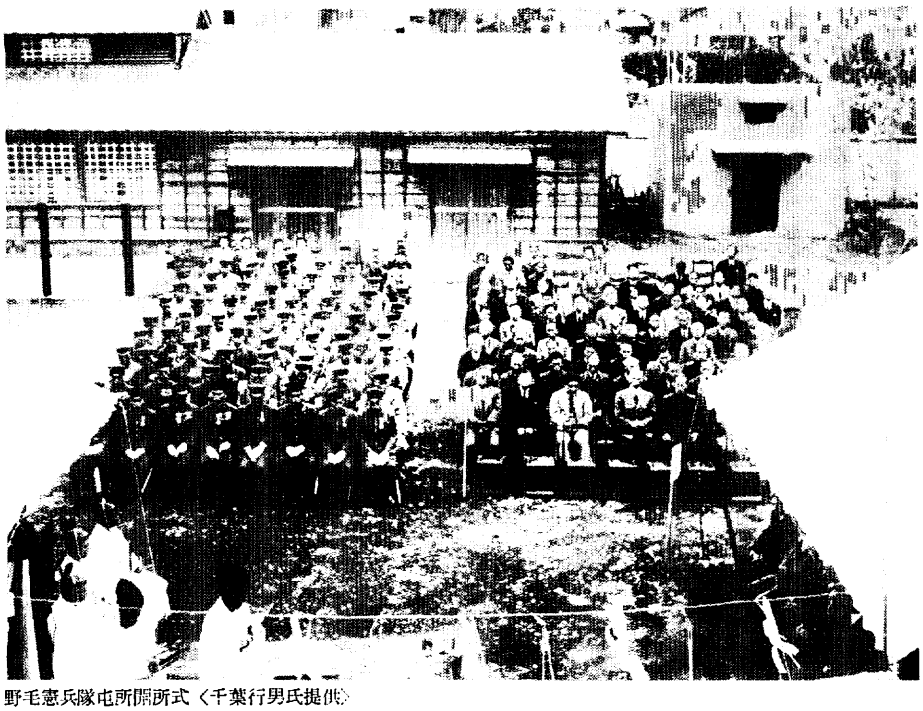
昭和十年から十二、三年頃の花咲町一丁目の場合、錦橋通に集中して、多くの問屋があった。非常に繁盛して正月の初荷のときなどは、陸揚げした商品を運ぶ荷馬車が、道一杯にあふれるほどであったという。

しかしこうした町の雰囲気も、十三年頃には次第に戦時色に染まっていった。戦時色はすぐに自動車の燃料に見られた。交通量の多い桜木町駅前には、燃料節約のため木炭を使ったバスが走り、円タクがガソリン統制で辛うじて走った。この統制で桜木町駅から根岸競馬場まで四十銭が五十銭、というように、およそ三割高になった。それに十三年の五月に湘南電気鉄道のバスが興産館の前で、後部から全焼した珍事があり、乗客は無事であったが、木炭車特有の事故であった。

一方、野毛山公園では十月恒例の菊花大会が行われたが、公園の自然の起伏を利用して大パノラマが作られた。「武勲輝く津田部隊廬山山岳戦」と題して、木形の兵士の菊人形が数十体というもので、いかにも時局を表現したものであった。

十月十日には、野毛山公園のはずれの公園茶寮が改装されて、横浜出動軍人援護会、傷痍軍人倶楽部などに利用されることになった。

十五年(一九四〇)には中央職業紹介所に女子工員養成所が設けられ、十六年に震災記念館に展示されていた記念品が金属回収のもとに供出された。焼けた電車、折れまがったレール、破裂し



野毛憲兵隊屯所開所式〈千葉行男氏提供〉

た水道の鉄管、火でとけて大きな球となった硬貨のかたまりなど、六〇〇点、二、八〇〇貫（約一〇・五トン）で、いずれも震災の惨事を物語っていたものであった。

十六年四月六日、野毛山に横浜連隊区司令部が開庁した。近衛師団長ほか陸海軍人と知事、市長、県・市会議長など五〇〇余人の出席によって式が行われた。これは軍事の代表的施設であった。さらに、遊園地の一部には暁部隊の高射砲陣地が設置され、公園にはカーキ色の軍服姿があふれることとなった。

◉金属すべて供出――軍事施設がつくられた野毛山の下、十七年（一九四二）六月不動尊の水行場にもいよいよ金属回収の手がのびた。一体四貫目（一五キログラム）、真鍮製の仏像三六体、それに境内の、鉄棚、天水桶、さらには香炉のはてまでが供出させられ、兵器に変えられた。

こうしたなかで九月一日、もとの震災記念館が、横浜市民博物館として開館した。出展品は、皇室関係、歴史、市勢、大東亜共栄圏のパノラマなど五千点であった。そしてのち、太平洋戦争の真珠湾攻撃の展覧会が開かれ、市民が長蛇の列を作った。

一方、掃部山の井伊掃部頭の銅像は滋賀県井伊家立会のもとに、十八年六月離魂式が行われ、これまた金属回収となった。

戦時下に入った野毛一帯は、要塞地帯の一部となって、写真撮影はもとより、みだりに徘徊することは許されなくなった。緑につつまれた公園のなかの老松小学校や市立図書館に空襲を予想し

連隊区司令部跡地（西区・老松住宅あたり）

水行場と羅漢像があった崖地

て、十九年十月市役所が分散入室、さらに図書館には陸軍の部隊がその一部を徴用し、屋上は監視哨に使われ、機能しない図書館となった。港町の市役所には昭和二年区制施行以来、中区役所が併設されていたが、十九年には、桜木町の興産館に疎開した。

町もまた臨戦体制に入っていったのは当然であって、ここでも隣組を中心としての人々の活動が続けられていった。

戦争下の野毛地区も他と同じように、商店街は歩道に、住宅地は適当な丘すそなどに、それぞれ防空壕を掘り、灯火管制のもとにすべてが組み込まれていった。桜木町駅からは多数の出征兵士を送り出し、また戦病死兵士の「英霊」をむかえた。

防空壕は十八年頃に隣組総動員で東ケ丘の山すそに多く掘られた。高さ一・八メートル、深さ（長さ）一〇～一五メートル位のものであったが、防空壕では何人もの避難婦女子がけむりにまかれて窒息死した。

防空壕跡――入口はふさがれいる（赤門2町丁目）〈秋葉義七氏提供〉

◉**戦災**――五月二十九日の大空襲によってこの地区も全滅した。震災復興で建てられた税務署、市図書館、桜木町駅舎などのいくつかを残して、一望の焦土、がれきの山となった。震災をはるかに上廻る大きな被害であった。

「一番最初に火が出たのは、薬屋の稲垣さんです。あそこは工業薬品を置いてありましたから、震災の時も最初に火を出しました。それで今は、発火するような薬品は、保土ケ谷に置き、ここにはないとのことです。混合薬品ですから、町なかの薬屋として、注

隣組の人々――花咲町にて〈村上盛一氏提供〉

戦災地——宮川町一帯、手前の切通しは京浜急行日ノ出町駅、遠くに横浜港、西区東ケ丘よりみる〈村上盛一氏提供〉

戦災地——左手花咲町，中央の建物は横浜税務署，その上部は中区役所，右手一帯は野毛町〈横浜市図書館提供〉

戦災地——野毛坂と宮川町一帯，焼けトタンが散乱，風呂屋の煙突だけが残った〈村上盛一氏提供〉

意しているとのことでした」

「副会長の平さんが最後までバケツリレーしてましたが、とうとう火に囲まれ、都橋の交番に入って助かったそうです」

「私は空襲の時町内会長をしていたのですが、市から野毛には、商売をしている人だけを入居させるようにと、依頼がありました。これも市の政策の一つだったんでしょうね」

「戦災の時は皆、老松学校の講堂に避難していました。しかし、この辺りは負傷者は少なかったですね。皆、疎開していたからでしょう。私の所でも、家内も親父夫婦も、家内の里が高崎でしたので、そこへ疎開していて皆無事でした」(以上、野毛町有志座談会)

◉黄金町悲惨――特に黄金町駅周辺の被害は大きく、悲惨そのものであった。東野伝吉著『昭和二十年五月二十九日』(『講談社現代新書』)にはそれが克明に記されている。

町の人はいう。

「赤門、英は戦災でも焼けることがないと思っていたところ、この辺では最後に焼夷弾で丸焼けになりました。日ノ出町から黄金町まで一度に焼けました。住民は皆疎開し、残ったのは町内会長をやっていた私だけです。戦災は震災よりよっぽどひどかったですね」(赤門町　潤米保太郎氏談)

黄金町駅の戦災死者は六二八人(前掲書)とされている。

警察により駅のガード周辺の死体の検視が行われた。

そのときの状況は、中区役所の資料によれば、三八歳の主婦と六年生(男)四年生(女)二年生(男)が『南区白金町湘南停留所黄金町駅ガード下』で焼死。

九歳の女児黄金町ガード下ニ於テ窒息死、焼死、『所持品、衣類多少』

四八歳の工員、焼死、南区白金町一ノ一附近、所持品『がま口の口金一ケ』

会社員の妻三二歳。長女九歳。長男三歳。白金町一ノ一附近。『所持品ニ依リ判明』

二五歳の女性。午前一一時ごろ。白金町一ノ一附近。『服装ニテ確認』とある。

こうした簡潔な記載にも当時の死亡者のありさまが十分想像される。

「私は、家の防空壕に入って毎日、被災証明を書き、一八〇人もの死人が出たので、死人を焼いてあげなければなりませんので道路で焼きました。そして、瀬戸物屋の焼け跡からカメを拾って来て、その中にお骨を入れ名札をつけて遺族に渡しました。引き取り手のなかった遺骨は、久保山戦災死者共葬場に納骨しました」(赤門町　潤米保太郎氏談)

いま、この地区にはもはや戦中と戦災のきずあとは残っていないが、よくみれば町のかたすみにその遺物が見られる。

東福寺の山門を入って右側、そこに円型のコンクリートに砂が

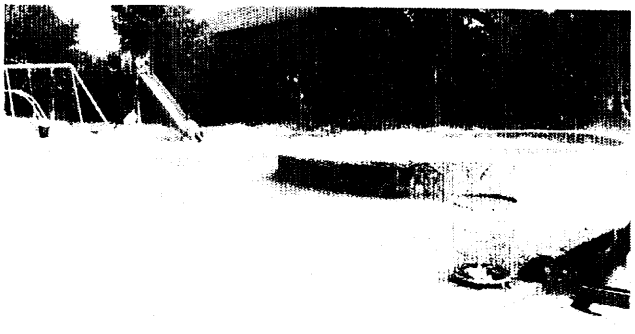
戦災者地蔵――黄金町駅周辺の戦災横死者をいたんで篤志家によって祀られた地蔵尊、はじめ黄金町駅の脇にあった（南区西仲町浄門院境内）

国旗掲揚塔の「八紘一宇」――戦時の陰影が残されている（東福寺境内）

入れられ、いま子どもたちの砂場となっているが、これは、戦時中に作られた防火用水の跡である。

町の人によると、昭和十五、六年頃造られたが、結局は戦災では何の役にもたたず、いわば無用の長物であったという。区内には、残り少ない戦時中の遺構の一つである。しかし、こうしたものすらも次第になくなってしまっている。

●証人――例えば野毛町二丁目の旧日本相互銀行野毛支店敷地の金庫、戦災地にただ一本、倒壊もせずに立っていた宮川町一丁目の風呂屋の煙突、野毛坂から日ノ出町方向への坂のコンクリート製欄干、黄金町駅には、昭和五十四年（一九七九）の駅舎改築になるまで、コンクリートのガードに鋭角的に削られた機銃掃射の弾痕が残されていた。煙突は三十年代、そして欄干は一部をのこして最近取り替えられ、弾痕は黄金町駅のは改築によって消え



戦時中の防火用水跡（東福寺境内）

た。

これらは、数少ない物的証拠であり、もの言わぬ証人であった。

第三節◉異臭のなかから

(1) 戦後がここに

◉戦後の野毛――多くの犠牲者を出して焼失した野毛地区は、終戦とともに復興がはじまった。

戦後の野毛地区は、大まかに分ければ、ヤミ市の露天（露店）出現時期、ヤミ市を解消して新生の時期、そして、市街地開発プランから二十一世紀プランに組み込まれてゆく時期、この三期に分けることができる。

このことは、つまり、野毛町を中心としてその周辺と日ノ出町方面の市街地（商店地区）、桜木町駅と造船の町をふくむ海岸線一帯などの地理的条件が大きく左右してきた。あるときは密接に関連し、あるときは個々に、その時その時の為政者によって利用されて、その歩みをつづけて来たのであった。そしてその歩みは直接、間接的に根深く現在に投影しているといえる。それにしても野毛は依然として関内や関外の入口、喉元で、困苦の防波堤となっていることは、昔と変わらないといえよう。

◉露天指定地――戦災ののち敗戦、昭和二十年（一九四五）十月十一日、焼け尽くされた横浜の市街に、横浜市を中心として再建の案がきまっていた。関内の接収地部分を除いた花園橋から山下町一帯は銀行会社、商社街。野毛の税務署前から花咲町にかけて商店街。歓楽街は本牧四丁目――小港――新山下――元町――大丸谷と、チャブ屋からチャブ屋を結ぶ地帯であった。野毛地区の戦後は、この計画から始まった。

十一月一日、県・市と横浜露天商組合とは、市民の日用品の需要に応ずるため、野毛の通りに横浜マーケットを開店した。そして二月、娯楽に飢えた市民の娯楽施設を建設するために、野毛山に六カ所の興行場がバラックで建てられた。

マーケットは早くも人気の街となっていた。ザキや関内の目抜

マーケットを空から見る（昭和24年）――手前は大岡川，左上は桜川，川にそってマーケットが並ぶ

野毛のマーケットのはしり――台の上に品物をのせて売っている，復員軍人の戦闘帽が目立つ〈横浜市図書館提供〉

きは接収され、元町では遠すぎ、山下町は外国人の本拠地ということから、野毛以外に好都合の場所はなかったからであった。

年を越した一月八日、野毛の通りをふくめ、市内六カ所の露天指定地の衛生保持を目的とするを懇談会を行った。市は露店の世話人を集めて、ひとつの地区には数カ所のドラム罐のごみ箱を設置すること、飲食店の食器は必ず水洗を十分にすることなど、衛生上の注意をうながした。しかし、こうした注意はさして守られることなく、野毛は露店の町として活気を呈することになった。

◉クジラ横丁――露店の野毛通りが活気を示しはじめた頃、駅に近い埋立て途中の桜川に沿い、露天のマーケットが発生した。クジラ横丁（又はクスブリ横丁）、カストリ横丁などと呼ばれ、主に食べ物が売られていた。

モウモウと立ちこめる鯨の肉を焼く煙の異臭も、この頃の人々には一層の食欲をそそった。異臭とともに、ここには一種異様な活気がかもし出された。

ここには、統制も禁制も通用せず、ささやかに市民の胃の腑を満たしたのであった。さらにこれらの露店からはみ出して、まわりの錦橋や緑橋あたりには、屋台が無秩序に出現した。やはり、ここでも主として食べ物が売られた。

この横丁や、橋の周辺の屋台は復員の兵士、かつては産業戦士といわれた元工員など、職と食を求めて集まって来る人の群で一杯であった。

野毛のマーケット　一人口平均1.8メートル、看板だけが立派、小さな看板に良い飲物、安いお酒とある。これから人が集まってくる。左は中区役所（神奈川新聞社提供）

野毛のマーケット　いわゆるクジラ横丁、小さな店が並んでいる。雨あがりの早朝か。うしろは埋立なかばの桜川（現、高速道路）に異臭がただよう。左上に緑橋、かたわらのドームがある建物は農工銀行（のち勧業銀行）（横浜市図書館提供）

この頃は物資は配給、価格も統制されていたが、極端な物資不足の折から、需要と供給のバランスが失なわれた。市民は建前論よりも実質的に食を求め、衣を求めた。このマーケットには衣料や食糧がどこからともなく集められた。品物が有るところ人々は群がり、値段をつり上げてゆくことになった。野毛のマーケットは、闇価格でなくしては通用しなくなった。それでもヤミ市は爆発的なにぎわいとなった。新しい盛り場の出現であった。

当局の監視の目をくぐって、白昼、統制品の米飯や衣料が堂々と売られた。二十一年八月十四日、当時管轄の加賀町警察署によって、米類・せんい製品の配給統制品販売の一斉取締が行われ、禁制品のかなりの量が摘発された。

◉宝物焼ける——花咲町には、古くから精米所があったが、戦後

は県食糧営団花咲精米所として県下最大、五八馬力で一日一、八〇〇俵の精米を行う能力を持っていた。米と聞けば、当時の人びとにとっては宝物に匹敵したので、精米所は宝物の集積所といえた。ところが、こともあろうに、二十二年（一九四七）十二月八日、この工場から出火、小さな建物の建てこんだ野毛マーケット裏を炎がなめ、工場と倉庫、道路をへだてた屋台など二四軒を全焼、事務所四棟が半焼という大火となった。消防車一七台が出動、更に進駐軍の応援も得て鎮火はしたものの、玄米二、三〇一俵、もち米二八五俵、精米一八〇俵、小麦粉百ポンド入一九〇袋、加州米八五袋などをあたら灰にした。この量は市消費量の〇・八日分に当っていた。新聞は火災の原因を一浮浪者のたき火の不始末か、米を狙っての放火らしい」（『朝日新聞』昭二十二・十二・十）と推測したが、この頃の人々にとっては残念でならない事件であった。

◉イメージを変えた――野毛通りの露店は京浜間でも有名になったが、歩道上のバラックの店がぽつぽつと簡易な店に模様替してゆくと、車道にはみ出して、まちまちの板やトタンを使った露店も一様に天幕を使ってスマートな露店としてお目見得、改善された。二十一年十一月のことで、野毛露天施設組合がとり入れた「移動式連鎖店」、つまりいつでも動かせて、一店一店がつながるような店で、別名「ブランタリ・チェンストア」。間口六尺、奥行四尺五寸のもので、ひとこま一、三〇〇円であった。この天幕の店は好評で、露店のイメージを変えた。

◉デンスケ――こうした盛り場となった一帯には、ここに来る人々を目当に街娼がはびこり、また路上では監視の目をくぐって賭博が行われた。すでに二十二年夏、デンスケ賭博で摘発される者もでていたが、二十三年五月頃には、もはや野放図に広がっていた賭博行為にたいして、伊勢佐木警察署は、武装私服一〇〇人の警官を動員、野毛マーケットのデンスケ賭博の一斉手入を行い、百数十個の道具類を没収し、一三人を検挙した。

手入の当日は伊勢山皇大神宮の三日間にわたる大祭で、それをあて込んで、関西方面から三〇〇名に上る「旅デンスケ」と呼ばれる一群が入り込んでいた。「彼らは中区大丸谷、野毛のちゃぶ屋、旅館などに集団的に投宿して、胴元、責任者、見張りおよびさくらを入れて最少限六、七名が一組となり、一日一万四、五千円をもうけていた」（『神奈川新聞』昭二十三・五・十八）

野毛のヤミ市一帯には、こうした賭博だけでなく、禁制品の外国煙草（洋モク）の立売りも多かった。二十三年三月十八日、横浜地方検察庁、専売局はMPの協力のもとに急襲、取締、大量のタバコを押収した。しかし、いったんは押収しても、すぐ次には立売りが出て、くり返しのありさまとなった。

◉すべての体臭――戦後の野毛は、きれいごとで済まされない地区であった。法令をもとに行政機関が取締を重ねても、さほど効果があがらないばかりか、もとの黙阿弥ということもしばしばだ

った。戦後の混乱状態が、まともにこの地区に集中したといえる。異様な群衆の体臭は地区一杯に広がっていた。

それは、ここに集まる人々のすべての体臭であった。なかでも、ハマにゆけば何とかなる、仕事にありつける、銀シャリも食える、という人々がターミナル桜木町駅に群集した。浮浪者といわれる人々、風太郎（フーテン）といわれる人々は、その代表的な一群であったが、これらの人々は、戦争の被害者そのものであった。

二十三年（一九四八）夏から秋にかけて、野毛のヤミ市などには一、二〇〇人からの浮浪者がいたという。（『読売新聞』昭二十三・七・十四）

二十三年の八月には七二五人が増え、ほかに西区内には二〇〇人。ビルの玄関やマーケットの露店など、所かまわず寝るという具合であった。朝早くからの土木建築や港の仕事で一五〇円から二〇〇円の日当となるが、あぶれれば、一〇円か二〇円でくすぶり横丁で腹ごしらえという生活がほとんどであった。

当時の新聞はこう報道している。

「玄関や窓の下でたき火はする。用便もたれ流し、中区役所さえ掃除も追っつかず、つい最近、散水車を持って来て水圧清掃を試みた。……きびしい生存競争に一日平均一人ぐらいずつ病気で倒れてゆく――今まで問題となりながら放置されて来たが、中区役所では近く県・市民政部、警察、労働行政関係者を招いて対策を協議するという」（『朝日新聞』昭二十三・九・四）

●屋台――二十三年十一月、警察及び野毛振興会は、桜川寄りのクジラ横丁、クスブリ横丁、カストリ横丁の露天商にたいして、屋台を組立式に改め、いつでも撤去できるようにすることを申し入れた。このことは、桜木町駅が横浜の玄関口であり、やがて野毛山で日本貿易博覧会が開かれるために、美観を保つ必要があったからであった。

しかし、この申し入れは簡単にうけ入れられることはなく、難航し、ようやく露天商側が折れて、組立式の屋台に改造することになったのであった。錦橋寄り一三〇軒が改良したが、ドブの臭いを充満させた桜川沿いには、相変らず屋台が並んでいたのであった。

●気軽な町――二十三年、十二月二日、横丁のオデン屋から発生した火事は、マーケットの密集家屋をなめた。消火活動もむなしく、一〇棟、二三戸が全半焼した。戦後の野毛の大火であった。それぞれの店は師走大売出しの正月用品を灰にして、一八〇万円の被害をトップに約二、二〇〇万円の被害となった。家財を搬出すると見せかけた火事場泥棒も出て、洋品類なども相当盗まれたのであった（『読売新聞』昭二十三・十二・三）。しかし、この火事の復旧は目覚ましいものがあったようで、翌年の正月には仮営業が行われて、野毛で開かれる貿易博覧会までに、どうにか間に合うこととなった。

野毛は露天の町ともいわれたが、市民大衆にとっては露天で気

野毛の通りに人が集まる――道の左右に屋台がつづいている。左の丘の中腹には横浜市図書館が見える（昭和23．4年）〈横浜市図書館提供〉

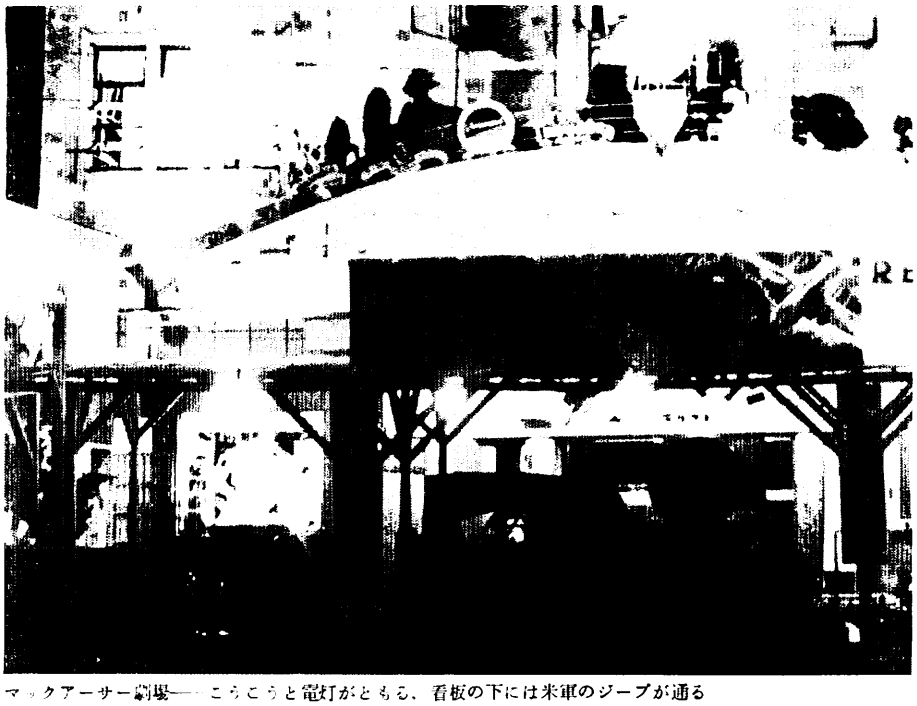
軽に物を買うのは、手軽さだけでなく魅力であり、野毛に対する親しみを増幅させていた。

◉笑えない話――親しみのある町、野毛で、たまたま松竹映画『悲しき竹笛』のロケーションが行われた。二十四年八月末からで、延五〇〇名の自由労働者がエキストラの仕事にありつくことができた。港の労働はびっしり八時間で二五〇円だが、これは実働一時間、あとは自由、時ならぬいい仕事に、労働者はほくほくであったという。

だがこれは例外中の例外であって、エキストラを紹介した横浜職業安定所では、求人口が九月の末にはバッタリと無くなっていた。求職者は毎日一、五〇〇人、安定所の入口では、一枚三〇円で「履歴書書きます」、というにわか商売が流行した。新聞によれば「自筆らしく下手に書いて下さい」とか「女文字らしいのを」などの注文があったというが、笑えぬ話であった。

それにしても、町全体は、やがて開かれる貿易博覧会の商戦の準備に入っていった。ただし野毛の露天は。不潔さと異臭をそのままにして――。

◉マックアーサー劇場――ヤミ市、露天、こうした一連の戦後がつづくなかで、少しはずれた野毛の本通り（四十年代からこう呼ばれた）には、マックアーサー劇場、光音座、国際映画劇場の三館が建設された。マックアーサー劇場は、邦画とショーを上演する、戦後横浜最初の市民劇場として注目された。館名は一般から



マックアーサー劇場――こうこうと電灯がともる、看板の下には米軍のジープが通る

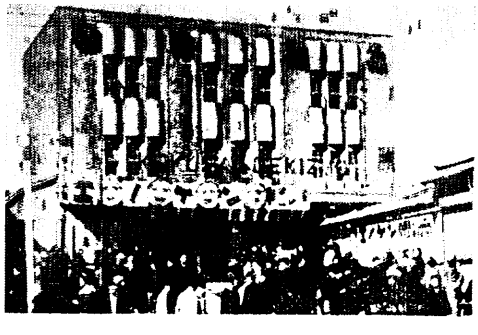
公募され、堀内敬三（音楽家）、北林透馬（作家）らの審査によって、マックアーサー劇場と命名されたものであった。この頃区内では戦前からの横浜東宝、横浜日活館、横浜松竹のほか、横浜国際劇場、マックアーサー劇場、オリンピア劇場、レアルト劇場、光音座などに市民が殺倒、日曜などはもとより連日押すな押すなの盛況であった。

二十二年十月横浜国際劇場では、東京帝都座で二カ月間連続公演した空気座の『肉体の門』が来浜公演。ブギの女王といわれた笠置シズ子も特別出演、少女美空ひばりも出演したのはこの頃であった。

次いで二十四年十一月には横浜市民芸能祭も開かれている。マックアーサー劇場は外国映画で、光音座は邦画でと、それぞれ市民の人気を集めた。野毛は、また娯楽のメッカとして有名になった。

◉場外馬券――こうした映画娯楽のメッカに、二十三年九月、地方競馬初の場外馬券売場が横浜国際劇場前近くに店開き、娯楽街に加わった。発売は戸塚競馬五日目の第五レースから第七レースだったが、レースと発表の間には一時間近くのズレがあって低調ではあった。それでも売上一万円の予定が倍の売上げとなって、まずまずのスタートであったという。

こうした娯楽街には、今日そのおもかげはないが、わずかに光音座と日本中央競馬会野毛場外馬券売場につづいている。野毛の



国際劇場　看板にエノケン劇団公演とある。人が集まっている（榎本敏雄氏提供）

戦後変質のきっかけはこのあたりにある。

◉**黒い芽**――野毛の平地の地つづき日ノ出町駅と黄金町駅の間方面は、街娼やパイラーの居住地帯となり、正常化を求めた町民の努力にもかかわらず、いわば変質した暗い面だけが、この地区に汚染し、蔓延(まんえん)していった。京浜急行のガード下を中心として麻薬の売買が盛んになった。戦後、悪の根源となる薬物乱用の黒い芽が、半ば公然と取引きされていたのである。

地区に流れる大岡川は、戦災溺死者の命をうばったとは思えない清澄な流れが残ってはいたものの、川面には水上生活船が浮び、戦前の面影は見られなくなった。ただ、末吉町を経て永真地区に接するこの地域の一部には、戦前と似て非なる進駐軍相手のバーや小さなキャバレーが発生し、敗戦国特有の徒花(あだばな)が咲いた。しかし、このなかでも、町内会を中心とする、町の人々による復興への努力は、着実にすすめられていった。

日ノ出町や初音町に隣り合せた赤門・英の両町は、戦災前に比較して著るしく住民の異動があって、大きくその顔ぶれは違っていたが、他町と同じように復興への努力が重ねられていった。そして前述のように、この地区での空襲の被害はまことに悲惨をきわめたが、三年忌には町をあげて戦没者の法要が行われた。

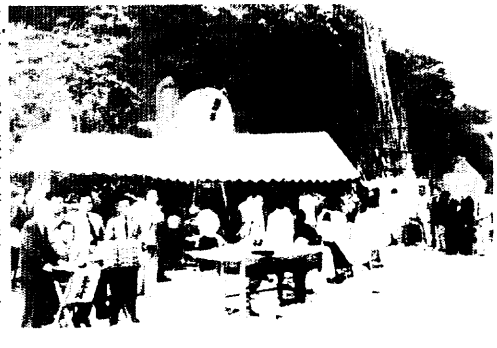
◉**喝采**(かっさい)――野毛地区のうち、海岸線の桜木町駅や横浜造船所のまわり、そして野毛の丘一帯も「戦後」そのものであり多岐であった。

三菱重工業横浜造船所（横浜工場）では、二十年（一九四五）十一月、八時間労働制を採用、生活必需物資の高騰を理由に数倍の賃上げを実施。翌二十一年三月二日には、戦後初の貨物船「陸心丸」（四、六二八トン）を早くも進水させた。市民にとって、拍手喝采のひとときであった。

◉**空腹のなかに**――そして市民が空腹のなかにあった二十一年六月、花咲町の本町小学校講堂では、戦後初の第一回「ハマ展」が開催され、写真、デッサン、油絵などの作品二〇〇点が展示された。これは市民の文化活動の始動であり、これもまた市民の熱い感動を呼んだ。

桜木町駅にはまた、つぎつぎと海外から引き揚げてきた引揚者、復員軍人によって、時には広場はあふれることもあった。二十一年七月一日には、駅前に生活相談所が開設されて、戦災者をふくめた生活相談が行われた。その一方では主食買出しに対する取締がこの駅でも行われた。二十一年十一月、一日平均米・俵、甘藷二俵分が取り上げられていると当時の新聞は報じている。（『読売新聞』昭二十一・十一・八）また十二月には、駅前の県有の空地に引揚者有志によって、協進産業という食料や衣類を販売する二二店の本格的なマーケットが開設された。これはのちのゴールデンセンターに発展してゆく。

そして、桜木町駅前ではこの年、県によってさつま芋苗の自由販売が行われた。飛ぶような売れゆきであり、戦後の食糧難を解



東福寺にて　秋葉義一氏提供

赤英町内会戦災死亡者供養法要

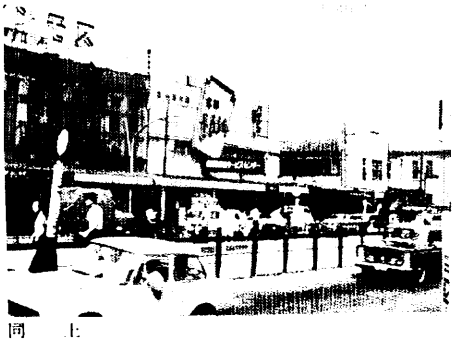
桜木町駅前風景（現．桜木町１丁目読売横浜ビル位置）

消するための緊急食糧増産週間のひとつの行事ではあったが、こうしたことは、市民の食糧難へのささやかな施策として終った。

◉野毛祭り――この年の夏に野毛二丁目の町のかたすみでは、四間四方、板がこいの野天ぶろがお目見得、大人五〇銭、子供三〇銭、一日四〇〇人の入浴客で大繁盛という風景も見られた。

そして町は町で、ヤミ市の氾濫とはうらはらに、二十三年（一九四八）五月十一日には、商店会の野毛振興会が発足。「野毛祭り」が催された。夜は二丁目の仮舞台で、のど自慢コンクールが開かれ、人々は自慢ののどで唄いまくった。そのうえ、花火がたかだかと打ち揚げられ、豪華な仕掛花火が野毛の夜空を彩った。しかし花火は花火でも、明治初期野毛の豪勢な川開きの花火大会

桜木町駅わき商店街（現．桜木町１丁目ビオシティ位置）〈木村宗吉氏提供〉



同　上

同　上

とは、これまた似て非、戦後瞬時の景気づけにすぎなかった。

◉**五色のテープ**――横浜造船所では、二十三年八月には捕鯨船の興南丸（三八二トン）が完成し、五色のテープに彩られた進水式が行われた。町は、花火と進水式が刺激とはいえないまでも、翌二十四年には駅前のデパートでは、歳末売出しに大わらわとなった。しかし、店は必ずしも好景気とはいえなかった。横丁のマダムの談。「景気は夏からガッタリで、やっと食べている程度ですよ。それに税金でしょう。全く泣き面にハチで、明日を考えると心細くなりますね。わたしんとこは一坪の店ですが、これで税金はといえば、営業税が年四千円、所得税が一期分――三ケ月ですよ、四百円ほど、飲食税が第一次二千五百円だったでしょうか。何しろこの界わいじゃ、払い済みの人なんか殆んどありませんよ……」（『月刊よこはま』昭二十四・十二）

◉**どよめき**――野毛平坦部でのこうしたうごきのなかで、野毛の山では群衆のどよめきが挙った。二十一年五月一日、戦後初のメーデーであった。メーデーは県下各地で戦後の復権として行われたが、横浜地区では、野毛山公園の広場で行われた。参加者は、折から青空市場の野毛町から関内へとスタートしたのであった。

次いでこの月の二十日、鶴見、川崎の労働者約七、〇〇〇人が野毛山公園に集結、遅配米の即時配給、働けるだけ食わせろをスローガンとして市内をデモンストレーション、米軍もあわてて装甲車二台を出動させて警備に当った。

十一月には同じ野毛山公園で電産労働組合主催の人民大会が挙行され、十二月十七日には県下の各労働組合、農民組合、外地引揚者など二十数団体、三万人を集めた吉田内閣打倒国民大会が挙行された。

翌二十二年五月三日、新憲法施行にあたって、神奈川県主催の祝賀式が九日国際劇場で挙行され、県下の名士約一、〇〇〇人、内山県知事、憲法普及会長芦田均、石河市長、それに米第八軍の高官マックナマスらが出席した。県立第一高等女学校の記念歌の斉唱で式が終ると、ひきつづき芸能祭が行われた。一方これに呼応して、市は神奈川新聞社と共催で新憲法施行記念行事を野毛山で開催した。

だが、この頃の市民生活は、困窮そのものであった。掃部山公園では十一月二十九日、神奈川県民主団体協議会の呼びかけによる生活危機突破県民大会が行われている。

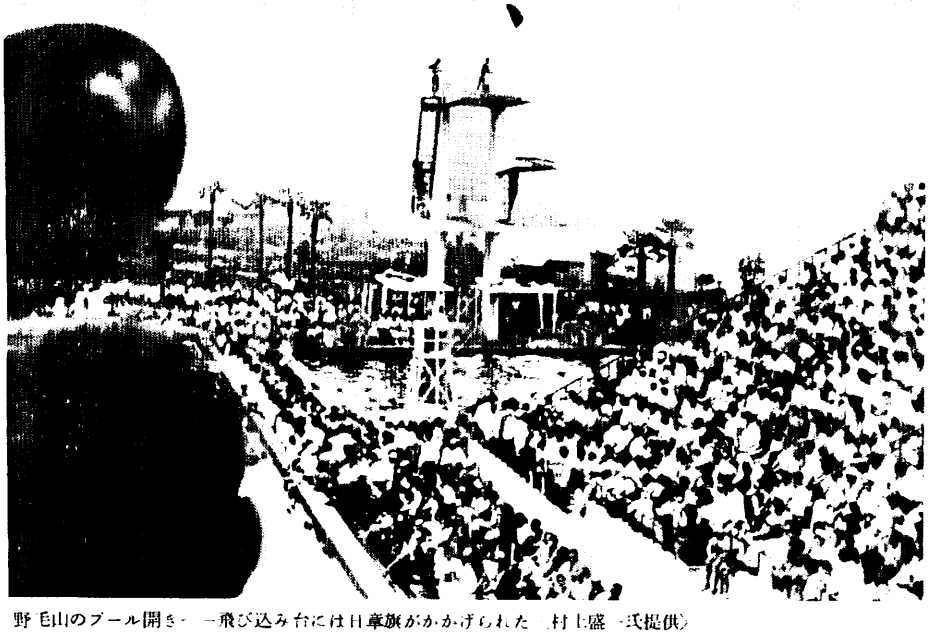
◉**平和ムード**――こうした労働意識の高揚と、民主々義への発揚のなかで、一方ではふたたび返った平和ムードがこの山の一角、皇大神宮のなかに見られることになった。二十一年の十月はやくも、皇大神宮の神前結婚が月中だけでも二百組を越え、神宮の係員はてんてこまい。服装も国民服や標準服が紋つきと袴、金らんどんすに変っていった。その翌年の七五三には、親たちに手をひかれた子供たちの晴着姿が多く見られた。三、〇〇〇人以上の参拝者、一組三枚で三五〇円の写真、三本組で二五円の千歳あめが

とぶように売れたという。二十三年の正月の三カ日は、七、八万人の参拝者、家内安全・商売繁盛の守り札、五円札一枚のおみくじ、一本三〇円の破魔矢がとぶように売れたといわれる。

こうした市民のうごきのなかで、二十二年九月一日には紅葉坂の教育会館に移転していた市立図書館が野毛にもどった。ただし一、二階は市の復興局が使用し、ささやかな再出発だったが、書籍を自由に閲覧できる開架式とカード式とを合せ採用して、市民の便を図った。

◉貿易博覧会――昭和二十四年（一九四九）三月十五日から三カ月間、戦後の一つのしめくくりのように、県・市共催で日本貿易博覧会が開催された。神奈川区反町と野毛山の二カ所が会場に選ばれた。野毛山は児童館、観光館、科学発明館、天文館などであって、科学発明館ではテレビジョンが一般公開されて、人々の目をみはらせた。両会場合せて入場者は三六〇万人、反町会場には天皇・皇后両陛下、宮家、吉田茂首相ほか政府要人、米第八軍ウォーカー司令官など多数の参観者があった。予算五億円、出品十余万点。

博覧会は前記のほかに、五月一日から貿易博芸能祭、花まつり、日の丸デーなどの催事が行われた。日の丸デーでは会場内の野外劇場で米軍軍政部司令官、山口国務大臣の憲法普及講演ののちに、平野愛子や竹山逸郎などと参加者による合唱によって「日の丸の歌」が発表された。



野毛山のプール開き――飛び込み台には日章旗がかかげられた（村上盛一氏提供）

そして、貿易博覧会のフィナーレのように、この年の夏、九月十五日に、野毛山のプールが完工した。第四回国民体育大会水上競技大会の会場となった。長さ五〇メートル、幅一七メートル（九コース）の競泳用、一〇メートルの飛込台、長さ二メートル、幅一五メートル、深さ五メートルの飛込用の二つのプールを持つもので、工事費二、八〇〇万円、一万人の観客が収容できるスタンドもつくられた。大会当日、全国四六都道府県の選手が競泳。野毛の山に高らかなファンファーレが鳴りひびいたのであった。

野毛の山はまさに平和であった。しかし、ひとたび平坦部にもどれば、ヤミ市は独特のムードをもって盛んであって、まだ戦後のけじめがつくというのにはほど遠いものがあった。

(2) 精算と後遺症

◉マーケット――日本貿易博覧会が終っても、野毛にはまだ、戦後のくすぶりはつづいていた。このくすぶりの原因は野毛本通りと桜木町周辺の露店によるマーケットであり、マーケットの早期解体こそが、野毛の発展につながるとは誰もが考えていた。市当局と露天商との間には、撤去をめぐって多くの折衝が行われた。市としては特に桜川を埋立てて、これを幹線道路とすることが、都市計画上で大きな問題であった。このためには当然障害となる露天屋台の撤去こそは第一の課題であった。二十五年一月九日の交渉で、ようやくカストリ横丁の移転のメドがつくかに見えたが、そう簡単には、屋台業と市との話し合いはつかず、くすぶりつづけ、一向に実行ができないまま、二十五年中は空振りとなり二十六年に入った。

この頃、野毛を筆頭に、市内にはこうしたマーケットが京浜急行新子安駅前と同駅西口、鶴見駅西口とにあって、いずれも都市の美観もさることながら、都市計画上でも撤去を必要としていた。市建設局によって、二十六年八月十六日、新子安駅マーケットに、その第一弾の強制撤去が行われた。このマーケットは二十二年に無届建築、その後本建築に改修、再三の移転通告をも無視してきたもので、戦後初の強制撤去であった。それが露店整理の皮切りとなったが、野毛では難航をかさねていた。

二十六年十一月、市と野毛商業協同組合との間に、ようやくカストリ横丁とクジラ横丁の取りこわしの話がまとまった。市は、この頃高島町～桜木町間の桜川を埋立、幅二七メートルの新道路の建設を開始していたが工事は遅れ、さらに間接的ではあったが、職業安定所の移転問題など、問題は山積の状況のなかにあった。

取りこわしの話し合いは、市にとっても、大きな進展であった。市側は埋立はもとより道路造成に必要な水道敷設工事（錦橋・緑橋間）に着手、カストリ横丁の屋台八五軒の前の道を、通行禁止とした上でこれを撤去した。

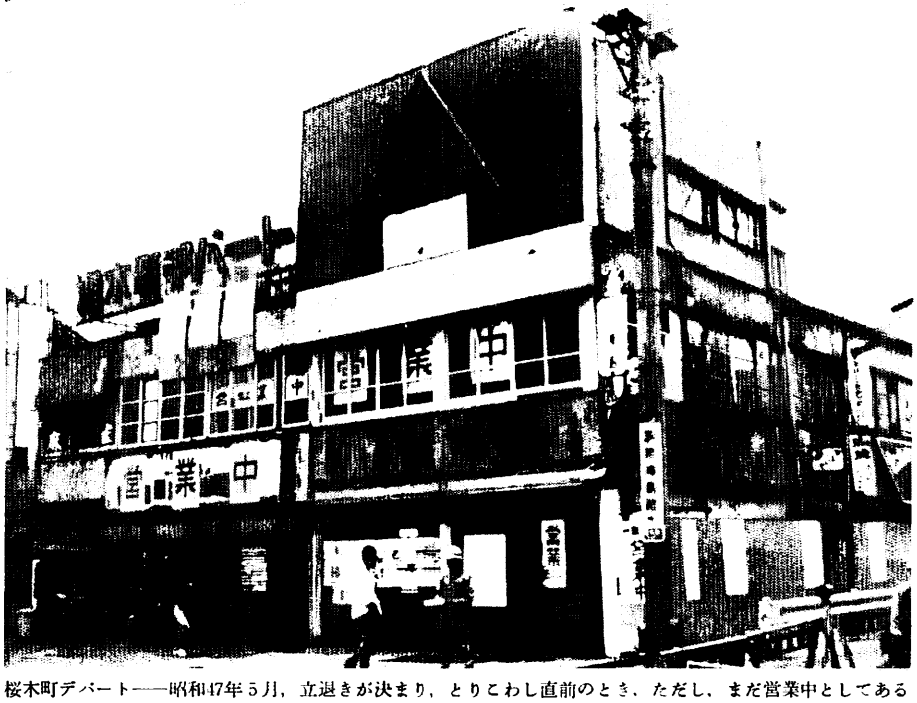
しかしこれは一部であって、市の再三の立退き要求でもカスト

り横丁の一部とクジラ横丁の屋台は動かなかった。この数四六四軒。市はこれらの屋台を収容するため、中区役所の裏に新しいマーケットを建てることとした。

◉**桜木町デパート**――二十八年（一九五三）二月、ようやくマーケットの株式会社桜木町デパートが完成した。木造二階建で三六〇坪（一、一九〇平方メートル）、一室約三坪で一二八部屋（店）あり、ほとんど飲食店で、クジラ横丁、カストリ横丁の露天商の一部を化粧品、小間物、くだもの店など数種類の店によって収容することとしたのであった。ただし、資金などの関係で、ここに露天の全部が収容されるというわけにはいかなかった。

桜川の埋立の工事は、こうしたなかでも、着々と進んでいった。しかし桜木町デパートに入らなかったカストリ横丁生き残りの露店三八軒は、動こうとしなかった。市はついに強制撤去にふみ切り、二十八年三月末実行した。その結果、クジラ横丁、カストリ横丁はようやく姿を消したのであった。

◉**駅前にがんばる**――一方、桜木町駅前一〇二坪（三三七平方メートル）の土地にも一九軒の屋台があった。道路計画に支障があるだけでなく、美観の上からも好ましくないので、二十七年三月から市は再三にわたって立退きを交渉していたが、応ずることなく、二月三日には遂に強制執行を予定、作業員百人をくりだして一九軒のとりこわしを計画したが、屋台側は訴訟による現状保存を地方裁判所に請求、執行は都合二回にわたって停止するありさ



桜木町デパート――昭和47年5月，立退きが決まり，とりこわし直前のとき．ただし，まだ営業中としてある
〈神奈川新聞社提供〉

まで、二十八年二月十四日、今度は都市計画法などを根拠として知事名によって、一九軒にたいして三度目の通告を行ったのであった。けれども訴訟は続けられ、二十八年七月十七日、市は敗訴となった。

この後、市の代替地の斡旋などで、両者は歩みよりができ、遂に二十九年二月一日に露店は自主的に屋台を取壊したのであった。これは当時、大きな事件としてマスコミを賑わしただけでなく、市にとっては、他の地区の不法占有処置の試金石ともなった。

◉水上ホテル――こうしたさなかにもかかわらず、二十五年後半でも市内には、出稼ぎ人が増加の一途をたどっていた。ハマは進駐軍の特需、港湾の好況などで、当時の人々にとっては格好の職場となった。桜木町駅、柳橋は職を求めて、自由労働者がたくさん集まる所となっていた。爆発的ともいえる人口の増加は、宿泊所が不足し、駅構内はもとより中区役所の表玄関など、ひさしのある所ならばどこでも、およそ一〇〇人ほどが雨露をしのいだものであった。

市は早くから、宿泊所の増設に心をくだいた。二十四年九月、市は民生運営事業協力会と協力して、はしけの廃船三隻を借りうけ、船内を蚕棚のように区切って簡易宿泊所に改造、柳橋付近に係留した。これらは、水上ホテルといわれ、かもめ、あけぼの、なぎさ、とそれぞれ命名された。収容人員は一度に六〇名ないし七〇名ほどであった。

水上ホテルの居住者は二十五年（一九五〇）十月の一カ月間だけでも昼間一、三〇三人、夜間には五、三三二名、一日平均二一四人の利用（『毎日新聞』昭二十五・十一・三十）であった。料金は宿泊料、寝具つきで一泊一〇円から二〇円であったという。さらは港湾自由労働者のために、二十五年三月一日、勤労者福祉会館に市を完成させて、福利厚生の道をひらく努力をはじめたのであった。

水上ホテルはその後、公営、民営のほか個人の居住船などをふくめて一三隻となり、大岡川に浮かんでいたが、二十八年八月、陸上宿泊施設がふえるに従って廃止され、引揚げられたのである。

しかし水上ホテルは水上にうかぶ廃船であったので、悲喜劇を生んだ。二十六年一月二十二日、大岡川の末吉橋では水上ホテルが転覆する事件が起り、また柳橋では間もなく県営内豊丸（三〇〇トン）が二〇〇人の労働者をのせたまま、折からの悪天候のなか三〇メートルの突風にあおられて、都橋まで流されてしまう珍事もあった。だがこれはユーモラスとはいえない事件であった。

◉イメージ一新――こうした戦後の落し子、クジラ横丁の撤去さわぎがつづくなかで、野毛の商店街では、競輪の場外売場のさわぎがおこった。すでに競馬は、二十四年から場外売場が開かれているのだが、二十五年五月十日、新らたに小田原競輪のレースからこの売場が設置されたことにより、人の集まりが多く交通や営

中区役所の表玄関――鉄筋三階建、丸い屋根の小屋は宝くじ売場〈今村慶太氏提供〉

業の妨害となるとして、地元商店街などから設置に対する反対が起った。

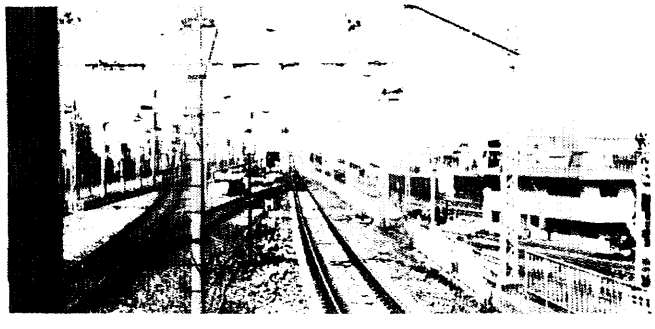
二十六年に入ると野毛の商店会もようやく活動がたかまり、五月十二日、商店街入口にはネオンアーチが完成し、夜に入ると点火された。さらにこの十二月国際劇場の横にニュース劇場がオープンした。ニュース映画の劇場としては戦後初のもので、全国でトップとなった。木造九〇坪(二九七・四平方メートル)、六〇〇人収容、料金も二〇円～三〇円と格安、市民にとっては手軽な娯楽となった。

二十八年には、都橋の近くと、野毛大通りの交差点には、それぞれネオンアーチが設立され、アーケードも野毛一、二、三丁目、花咲町一丁目、宮川町二丁目にかけて延長一、〇〇二メートル余が設置された。アーケードは直接販売実績とはならないものの、日よけ、雨よけ、風よけになって、来客者の利便をもたらすものであり、野毛のイメージの斬新さということで人気が増した。

●桜木町事件――これらのことは、野毛地区での娯楽性が多くなったことを意味した。野毛町を中心とする一帯が、戦後の活気のある町としてにぎわいを見せているさなか、突如、桜木町駅でモクモクと黒煙が上った。駅構内ホーム五〇メートル手前で国電が炎上したのであった。最前部車両から出火、二両目にと火は移った。二十六年四月二十四日の午後一時四十分ごろであった。焼死者九七名、重軽傷者六四名という大惨事であった。死体が、ドアの開かない電車のなかに折重なった。

消防車二台、救急車三台、横浜市警察の小林本部長ほか警ら隊、武装警官二四〇名が現場に急行、消火と救助に当った。負傷者二三名は国際親善病院、横浜中央病院など八つの病院に急送されたが六名は病院で死亡した。

桜木町事件の救助活動



桜木町事件の現場――右側鉄柱手前から二本目あたりといわれる

この惨事ののち、五月七日と十二月二十四日に、鶴見の総持寺でこれら死亡者のための追悼式が行われた。一周忌に当る二十七年四月二十四日には、鶴見総持寺に金銅造りの観音像が、さらに三十九年十一月九日には遭難者慰霊碑が総持寺境内に建立された。

◉交通禍のきざし――大事故ののち、町は平穏にもどった。桜木町駅の付近には広告塔がそびえ、商店街の街頭放送も行われた。某証券会社の屋上からは、戦時中、姿を消していたビニール製のアドバルーンが、横浜の戦後第一号として揚ったのも、この頃であった。

この年、駅前には読売新聞横浜支局の建物が竣工、駅前の様子に変化が見えはじめた。

一方、野毛の商店街では、協同組合を結成、創立総会が二十七年（一九五二）二月十九日に開かれ、六月十五日には神奈川労働金庫が野毛三丁目に開店した。この地区にもようやく戦後の金融機関が進出した。さらに、八月二十二日、桜木町三丁目九番地にエクアドル領事館（総領事アウレリオ・ザムブラー）が設置され、僅かながらの国際性もみられるようになった。

この二十七年、駅前は幹線道路に当っていたため、ひっきりなしに車が往来し、騒音の町となりはじめた。のちにいう交通戦争の前哨戦ともいえた。市警察本部では二十七年十一月、鶴見駅をはじめ、日抜きの通りで騒音実態調査を実施した。平日の午後一時、駅広告塔付近は、大体八〇ホーンという音量が計測された。鶴見駅の六五～七〇ホーンにたいして、かなりの高さが確認された。のちの騒音防止条例の制定は、こうした実態調査をもとにしたという。

◉緑橋グループ立退き――交通のはげしくなった桜木町駅前商店会でもアーケードネオンを取りつけ、まさに野毛も桜木町も商戦たけなわとなっていた。

桜木町と野毛の中間、町名でいえば花咲町、旧桜川は前に述べたように、昭和二十年代にはカストリ横丁の撤去、移転が終り、道路の造成が行われていた。しかし旧桜川のうちでも、緑橋から西区にかけての部分は、埋立が半ばであり、ここには、屋台が川岸に連続してあった。二十九年春、市は居住者にたいして立退き命令を出した。ここには住む人およそ一六五戸約八〇〇人、この立退き先は、難航の末、市は南区六ツ川町に住民の居住地を選定した。しかし地元の六ツ川町内会長ら代表は、その移転に反対した。

一方、居住の人々の婦人代表約三〇人は、市建設局を訪れ、移転にあたっては一〇日前後、仕事ができなくなるので、この間の生活費を支給してほしいと陳情、片や受入れ反対、片や移転をさせるべしという陳情、市当局はこの間に立って苦慮することになった。

難産の立退き問題はついに破談となり、市は十月十四日、強制代執行に踏み切った。

宮川橋開通——対岸は福富町西通，接収解除後の荒地のままである〈松本勇造氏提供〉

宮川橋通——町をあげて祝った，道路の上に薬玉が飾られ祝賀の軒ちょうちんが並ぶ〈松本勇造氏提供〉

現在の宮川橋通

「さて、三十年十月十四日、横浜市はゲートル姿の用地課長の号令一下、千人の作業員、千人の機動隊をもって『一大強制代執行』を敢行した。作業はなんと僅か四五分で完了し、私の胸には言いしれぬ無情の感が残った」（中田志郎「私ごと横浜史」『市民文化』一九八〇№5）この結果、六〇戸だけは南区の市有地へ、四〇戸は神奈川区へ、残り六〇余戸は大岡川周辺へと転出したのであった。

花咲町方面のバラックの撤去移転が、強制代執行によって結果を見たが、一方、野毛の背面に当る宮川町、なかでも橋の周辺の地元では、復興の肚がきまっていた。このきっかけとなったのは、宮川橋の閉鎖の解除であった。宮川橋は古くから、関内と野毛地区とを結ぶ地点として大切な橋であった。それが関内の接収によって、金網が張られて、通行禁止となっていたので、地元の人々にとっては不便この上もないことであった。

◉山の栄え——こうした、横浜の戦後の精算ともいうべき各状況の改善、さらに野毛での商店街再建の傾向のなかに、野毛の山一帯の場合はますます充実をみた。

山頂の皇大神宮の初詣は、前年よりも倍と盛況。そして山裾の野毛不動尊では、二十五年七月一日には縁日が復活した。縁日は毎週土曜日と二十八日に行われ、八〇数軒の夜店がでた。夏の夜に電灯をかがやかして並んだ。

野毛山公園では、二十六年（一九五一）三月三日、県下初のボーイスカウト・スプリングパレードが挙行され、新生の野毛山の

空から見る野毛町一帯——昭和36年頃，街並みがととのっている。右中央のビルはゴールデンセンター（現，ビオシティ）その上桜木町駅，横浜造船所が見渡せる〈田村泰治氏提供〉

山頂近くには、四月一日、市営野毛山動物園が開園した。一、二〇〇名の来賓で平沼商工会議所会頭、石河市長らによって開園式が行われ、野球の始球式ならぬ市長から水鳥にエサが与えられた。市内の遺家族一万二、〇〇〇人、薄幸の子供ら七〇〇人が招待された。入園料大人一〇円、子供五円、開園時二二種、二〇〇頭（匹）、二十六年中にはゾウ、ライオン、クマなど六八種、五一四頭（匹）の動物がここで飼育された。横浜で初の動物園のオープンで、野毛山は折からの花と人の群で埋まった。

そして冬に入ると十一月十六日からは、野毛山遊園地内に、一二〇坪（三九六・六平方メートル）のゴム・ローラー・スケート場が既設建物を改造してオープン、貸靴五〇足を持ち、この種施設としては関東有数のものといわれた。

こえて二十七年の夏に入ろうとする六月十三日、遊園地では、埼玉県入間郡から、天然記念物の源氏ぼたる二万匹をとりよせ、園内に放った。横浜の中央部ではすでにホタルは全く見られないとき、夏の風物詩が演出されたのであった。

二十九年十一月県立図書館と音楽堂が紅葉ケ丘の旧、神奈川奉行所）の跡地に建設された。いづれも壮麗な建物で、全国的に注目をあびた。

昭和三十年頃から高度成長期に入ったといわれているが、この年の県立音楽堂では十二月八日、横浜復興同盟（半井清会長）が初の総会を開き、横浜復興の根本条件について決議が行われた。

山頂で横浜復興ののろしが挙がれば、この下、海岸線の横浜造船所では、これに呼応するかのように、戦後の造船ブームのつづくなかで、三十一年（一九五六）二月一九日、世界最大の出力をもつディーゼルエンジン（一万二〇〇〇軸馬力加給大型機関）の開発に成功している。

◉いやな名物――野毛町を中心として、野毛の復興と改造がなされてゆくなかで、日ノ出町方面には、今までこの地区には見られなかった異常な事態が発生していた。この地区の一部が売春と麻薬の巣となったことであった。これより先、この辺の裏通り、京浜急行のガードに沿う一帯には、ぽつぽつとバラックが建てられ、そこにはバーもどきの一杯飲屋、簡易な宿泊所などが発生していた。特にガード下は、一時的に戦災者の仮住居となってはいたものの、こうした飲屋や簡易の宿泊所ができるのに都合のよい場所となっていた。

そこには、進駐軍兵士を相手とする売春が行われていた。いわゆる青線の地区であった。

「そもそも、この辺が青線になっていったと言うのは、曙町が飛行場に接収されて、そこで商売していた人達が追われてこちらに入って来て始めたというのです」（第一北部有志座談会）

パンパンガールといわれたこの街娼は、うす暗い黄金町駅ガード下などで盛んに暗躍したのであった。駅がある黄金町あたりはその中心地点となった。「この界隈には一時『青線』がありまし

たね。黄金町から白金町の川っぷちにかけてです。それに青線は曙町、日ノ出町とか、黄金町のガード下といった所もそうでしたね。その頃のまず、いやな名物だったんです」（同座談会）と町の人はいう。

◉**危険な白い粉**――この売春と表裏一体となったのが麻薬であった。この地区に限らないが、売春と麻薬は因果関係を生んだ。

「この辺一帯は、残念ながら、むかしは麻薬の巣だったんですよ。私ども新聞に書かれてから、それは私ん所の裏じゃないかなんてびっくりしました。あるときうちの店員が、電信柱の割れめに男が何かをはさむのを見たんですが、そのあとすぐ、他の男が来て、それを持ってゆく。前もって金を渡して売るんですね。それで店員が何だろうと思って、それをひっぱりだしたんですね。そしたらチンピラにしつこく狙われましてね。店員には暇を出して、すぐ国へ帰しましたがね」（同座談会）

麻薬、このことは、当然町にとって、商売に大きくひびいた。地元の人はいう。

「何しろ人が寄りつきませんでした。あんまり騒がれるので、おっかながっちゃって」（同座談会）

昭和三十一年は麻薬ヘロインの全盛時代に入っていたという。当時のボランティアは次のように記している。

「大岡川の川岸には、暴力団の組が、二重扉の密売小屋（トーチカ、非常口付）を築いてガッチリと蟠踞（ばんきょ）していたのである。金港資源協会（注、昭和三十年七月、桜川埋立で廃品回収業の仕切りを行う、ヒロポン患者治療を行う…編者）は、八つのトーチカの丁度真中あたりで、ヘロインの匂いがプンプンする様な場所だったから、危険を感じないでいられなかった。前年には、周辺の路上で縄張り争から派手に銃弾が飛び、まきぞえをくった市民が傷いたばかりだった。

……こうした中で私は、密売者は自費入院、麻薬使用者で金の無い者は民生安定所を経て医療保護で入院させて、両者のケジメをつけていたが、やがて対策は公然化し、大岡川周辺の電柱にビラを貼ったところ、今度は女性を含む使用者達がどっと押し寄せて来た。入院は難しくなり、協会のバラックや、中区英町十六番の地の自宅に患者を収容し、私がつきっきりで脱慣させることになってしまった」（中田志郎「私ごと横浜史」『市民と文化』一九八〇年No.5）

これは当時をしのぶ一端といえる。

昭和三十三年（一九五八）四月一日売春防止法施行。きわだったものは無くなったものの、ガード下を中心として、徘徊（はいかい）する女性はまだあとを絶たなかった。あやしげなバーやのみ屋は、「明朗会計の店」とはいうものの、あるときは、麻薬の取引き場であったり、秘かな売春の中継地点ともなった。

三十七年頃になっても、たび重なる警察当局の取締にかかわらず、この地区の麻薬は依然としてはびこり、世のひんしゅくを買

って、週刊誌のルポルタージュは麻薬専売地帯として、書きたてた。まさに戦後を象徴する社会問題となった。

三十七年（一九六二）七月初め、麻薬がきれた中毒患者が多数路上にあふれ、中毒患者の死体が大岡川に浮いた。「麻薬銀座の貴婦人」とあがめられたもと良家の娘が、骨と皮で体重二六キログラムとなり果てて死んだり、家族がちりぢりになったなど、いくつもの悲劇がうまれた。

◉麻薬撲滅を目ざして――こうした麻薬禍にたいして、警察当局の取締は厳重をきわめたが、町内でも麻薬退治に立ち上った。明朗な町にすることが町の人々の念願であった。「やがて『麻薬撲滅運動』をやろうということになって、日ノ出町と黄金町が提携したんです。運動の代表は日ノ出町から出ました」（第一北部有志座談会）

昭和三十七年十一月十三日、日ノ出町で環境浄化町民総決起大会が行われた。麻薬の町の汚名返上をスローガンとしたもので、意気は上った。

「麻薬退治のときは、伊勢佐木警察の人を町内会館に泊めて、毎日のように取締りをしました。二〇人ぐらい会館に制服で交替交替で詰めていました。その上、末吉町のビルの上から、たえず、隠れて写真を撮っていました。そうこうしているうちに、私の家の裏に麻薬の相談室が作られました。その小屋はたしか区役所か市役所かで『麻薬相談室を作るので、空いている土地を貸してくれないか、金は市役所で持つから』といったが、金はいらない、空いている土地だからって、貸しました」（同座談会）

翌三十八年（一九六三）二月、日ノ出町一丁目の日ノ出町会館では神奈川県麻薬禍撲滅環境浄化運動協議会が発足、三月十五日には初音町三丁目に「横浜市麻薬更正相談室」が設置された。

市川房枝、中山マサなど国会議員が調査のため、来町したのもこの頃のことだった。

こうした一連のうごきのなかで、全国にさきがけて麻薬患者収容施設の、「県立せりがや園」（港南区下永谷町）が開園し、関東甲信越地区麻薬取締官事務所横浜分室が北仲通に設置され、麻薬禍の対策がさらに進められた。さらにこの年七月には、麻薬取締法の一部改正が行われ、一段と取締が強化されていった。こうした一連の方策は、この町の麻薬撲滅のひとつの布石として、効果をあげてゆくことになる。

◉最後の露店消える――一方野毛町の方では明るい面もあった。桜木町駅前の中区役所は三十六年四月に関内の住吉町四丁目、旧横浜興信銀行の建物に移転して、中区役所あとの建物には市民ギャラリーがオープン、戦後ハマの本格的な芸術展覧の場となった。

さらに、この市民ギャラリー裏の桜木町デパートが解体され、跡地は高速道路となった。桜木町デパートのバーや飲食店は長者町などにそれぞれ分散した。しかしまだ野毛本通りには、六二軒

市民ギャラリー（昭和四十年当時）〈神奈川新聞社提供〉

野毛本通りの昼さがり――左右の道路わきに露店が見える〈横浜市図書館提供〉

ほどの露店が残っていて、自動車交通をさまたげ、町の美観をそこねるなど落着きを取戻した町には迷惑この上もなかった。しかし二十五年頃から市は撤去の交渉を重ねてきたが、一四年ぶりで、ようやく決着を見ることになった。

三十八年十月、市長は市内の再開発整備計画を打ちだしたがこの一つが本通りの露店の撤去にあった。しかし交渉は難航、ようやく昭和三十九年一月に、都橋から宮川橋間の大岡川べりに、二階建の商店ビルを建てることで結着した。

◉精算のはじめ――しかし、地元の宮川町内会は二月、露店商の移転は困る、として反対し、市長に陳情した。だが、結果として十月には六二店が新装成った都橋ビルに入居、都橋ビル商店会が結成された。ここにおいて、野毛の面目が一新されることになった。

一方、露店がなくなった野毛本通りの商店街は、歩道に生垣を設け、アスベストを敷き、アーチをふやし、アーケードを手直ししたのであった。

こうした、もろもろのうごきは、まさに野毛の戦後の精算であり、新しい野毛のイメージづくりの第一歩であった。

都橋ビルの夜景

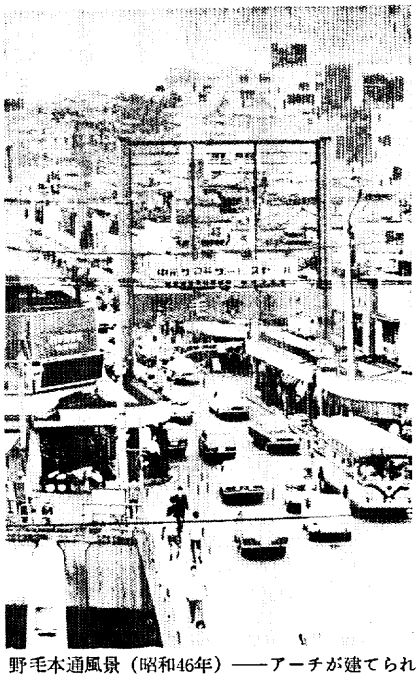
(3) やはり野毛

◉**野毛の山**――いつでもそうであったように、野毛地区は、野毛の山とのかかわりにあり、山と平地の相互関係は宿命的で、昭和三、四十年代もこの関係に変るところはなかった。

昭和三十七年十一月、県立音楽堂に隣接して県立青少年センターが竣工した。ここも堂々とした建物で青少年ホール、プラネタリュームなどを持つ青少年のための県下最大の建物として誕生した。さらに、三十九年七月県立婦人会館が竣工した。

これらの施設の新設によって伊勢山は県の文化センター地区となっていった。

一方四十一年の五月県立青少年会館が紅葉ケ丘に開館、野毛山では貯水池を拡張復活、遊園地に市電の廃車車輛を置き、遊戯施設を全廃して草木中心の公園に造り変えた。動物園では四十三年五月ちびっ子動物園、四十六年十月には爬虫類館が設置されていった。さらに四十五年八月、今度は、市勤労青少年センターがオープンし、そして掃部山では、九月に井伊掃部頭の銅像前で掃部頭の記念祭が挙行された。



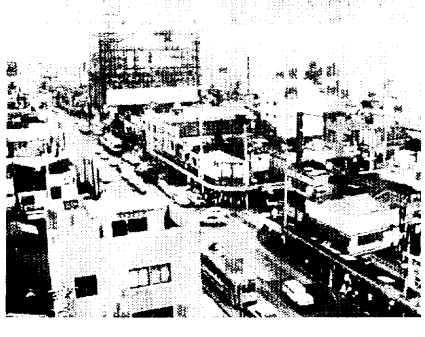
野毛本通風景（昭和46年）――アーチが建てられた，自動車も多くなった〈神奈川新聞社提供〉

◉**文化施設**――一方、横浜市図書館でも、昭和三十八年には閲覧室、四十二年には書庫を増築して内容が充実された。さらに、巡回貸出し制度ができ、市民に広く図書閲覧の機会が与えられていった。

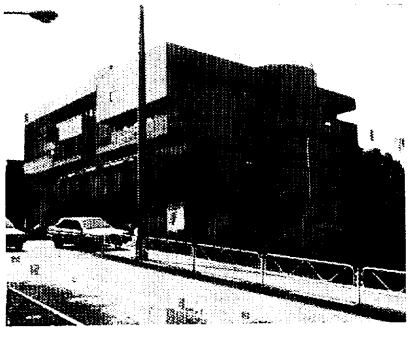
図書館では、単に図書の閲覧だけでなく、各種の展覧会が開催されている。横浜と明治維新展（四十三年十月十一日～）、著名文人書簡展（四十四年六月十七日～）横浜の埋立展（同年十月二十三日～）、横浜の交通展（四十五年十一月二十六日～）、横浜の空襲展（四十七年五月二十五日～）など、その行事も盛んであった。

四十五年（一九七〇）八月、かつての震災記念館は、市営の結婚式場老松会館となって、市民に活用された。老松会館は、戦争中は市民博物館となっていたが、戦後米軍接収ののち、市会議場、横浜市立大学経済研究所、市職員研修所などさまざまに利用されてきたものであった。

四十七年三月、県立の図書館に隣接して、県立文化資料館が建



野毛大通りを見る（昭和四十六年）〈神奈川新聞社提供〉



県立青少年センター

設された。県内の貴重な資料を収集、保存し、一般公開をするものであった。こうした施設が加わり、野毛山一帯は、文化的施設の集中する文教地区となったのであった。

こうした野毛の新しい位置づけがなされるなかで、震災復興によって昭和二年に建設された市図書館や、市長公舎（同四年）、老松会館などの各施設が老朽化し、しかも狭くなったので、機能拡大のために、四十八、九年にわたり市において、野毛山総合整備構想がたてられていた。その内容は、現存する施設の一部は高層化、一部は改築するものであった。しかし介在する民有地の問題などによって、ついに実現を見ることはなかった。

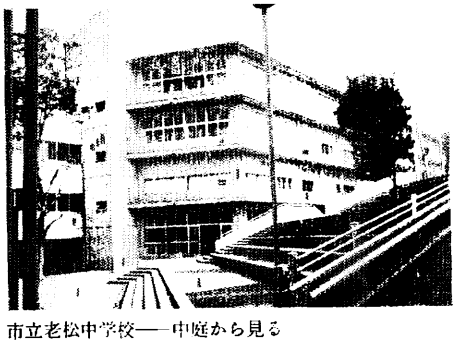
その後野毛の山一帯は、震災後建設された老松中学校が、市の老朽鉄筋校舎改築の一環として改築されたほか、さしたる変化を見ないまま現在にいたっている。公共施設はそれぞれに活動が行われて、文教地区としての定着がある。それに野毛山公園、動物園を中心とする地域には四季おりおり、市民の憩の場となっている。皇大神宮や不動尊は相変らず市民の信仰を集めている。

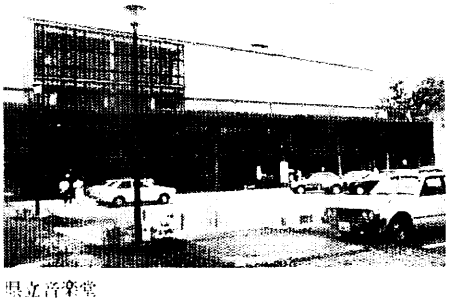
◉駅のまわり――野毛の山が、こうして変化し充実してゆくなかで、三十九年、桜木町・磯子間の根岸線が開通。桜木町駅はターミナルとしての機能は失ない、根岸線のなかの一つの駅となってしまった。

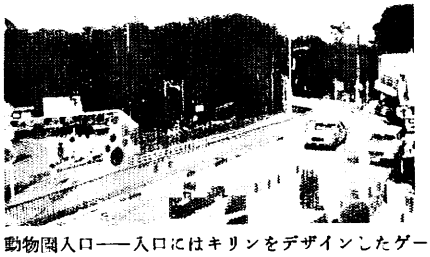
そして駅周辺は、かつての中区の玄関口としての位置を大きく後退することになった。これに対する起死回生策が叫ばれはじめ

県立図書館

市立図書館


市立老松中学校――中庭から見る


県立音楽堂


動物園入口――入口にはキリンをデザインしたゲートがある

県立文化資料館

た。四十一年には、駅前の地下道工事がはじまり、六月には、旧中区役所の建物を利用した市民ギャラリーに、無名作家の発表の場として「自由展示コーナー」を開設、十二月には地元の再三の陳情もあって駅と野毛とを結ぶ地下道が完成、翌年の十一月には、横浜桜木町郵便局が改築完成、業務が開始され、昭和四十二年（一九六七）十月、鉄道開業百年記念にあたって、桜木町駅前には「鉄道発祥記念碑」が完成除幕した。さらに四十三年五月には、駅前にゴールデンセンターが営業を開始。この地区にとっては初めての高層ビルが華麗な姿として誕生した。

五十一年（一九七六）九月、市営地下鉄が延伸開通し、地下鉄の桜木町駅が設けられた。桜木町駅やゴールデンセンターの地下街ができ地下道によって花咲町、野毛方面へと結ばれた。

地下鉄は横浜駅から上永谷（港南区）までの延長一一・五キロメートルだが、この間の工事には多くの困難を伴なった、なかでも大江橋下、大岡川の河床の下を横断するトンネル工事はシールド工法によって行われたが、当時東洋一の難工事といわれた。

桜木町駅のまわりの、こうした一連の動きとはうらはらに、この地域での抜本的対策による再生にはまだ遠いものがあった。ゴールデンセンター自体も両側の道路にはさまれ、周囲からは孤立した存在になっていった。この地区の一種の衰退がはじまっていた。

◉造船所移転――この傾向は、駅のうしろ内田町の一角、すなわち横浜造船所にも影響していた。造船界の全国的不況の到来であった。

造船業界、特に横浜の造船は戦後しばらくの間、日本全体が貧困にあえぎ、産業も振わなかった時代、ひとり気を吐き、工業の発展と貿易の振興に貢献していた。

特に高度成長期に入り造船景気は上昇。横浜造船所は世界の国々から受注、造船トン数も世界一、輸出額においても国内第一位となった。

朝な夕なに、ここへの通勤者が桜木町一帯にあふれたのもこの頃で、鋼材を運ぶ起重機はひっきりなしに動き、大型船の造船や修理の船がドックに所狭しと並んだ。さすが広い工場の敷地も手狭に感じられた。

しかし、昭和四十年代から受注が減少、人件費の高騰などの悪条件が重なっていった。

この頃、三菱重工業横浜造船所を本牧と金沢埋立地へ移転することが計画され、四十一年には本牧埋立地の一角に本部機能と本牧工場が新設され、四十四年三月には、大型ドックが完成した。このドックは二〇万トン級の船舶が修理できるマンモスドックであった。

一方、金沢埋立地三三ヘクタールの土地にボイラー・タービン工場等の一部移転が計画された。四十六年十一月二十九日には、市と三菱側との間で、原則的に移転の合意が成立、移転は具体化

の方向にむかった。

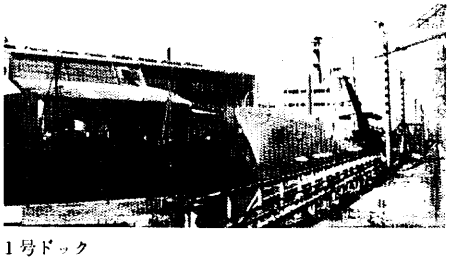
この間四十七年十二月、世界でも最大級のタンカー甲南丸（一六万四、五一七トン）を横浜工場・本牧工場合同で建造した。

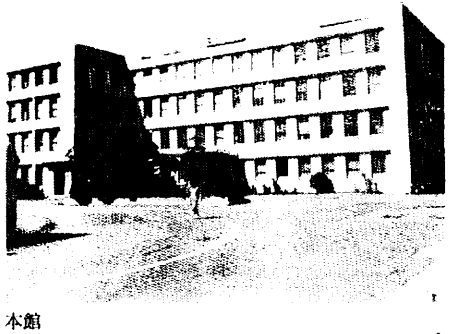
五十三年八月、造船所は造船制限計画によって船台二隻を休止させ、陸上部への事業転換が決った。横浜工場では五十四年十一月、イラン向けのタンカー「ダブリーズ号」（六万九、〇〇〇トン）の進水式が行われ、五十五年三月、三菱商事のＬＰＧタンカー「ガズリブラ」（五万五、〇〇〇トン）が竣工、最後の造船となった。これまで七三八隻、約六〇〇万総トンの船を建造した大きな実績はここに終ったのであった。

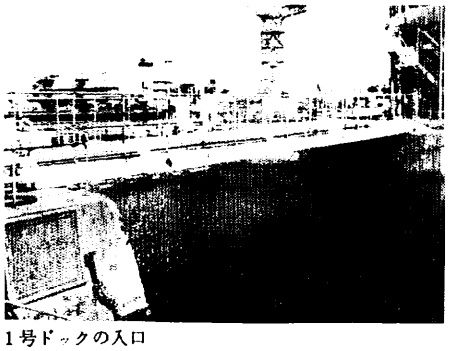
一方、こうした造船所（横浜工場）の幕が引かれるなかで、隣接の東横浜駅の貨物取扱量の減少、新貨物線誕生による駅の廃止などの状況もからんで、港湾機能の充実という大問題に対処するため、横浜駅東口あたりから桜木町の海に臨んだ一帯を再開発しなければならなかった。

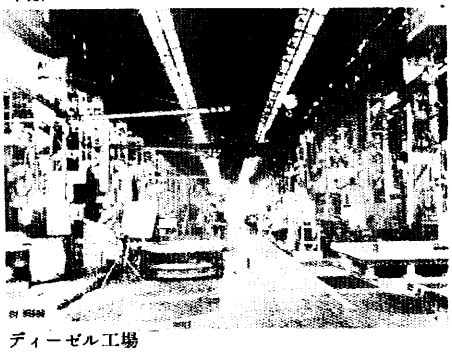
◉青い海――横浜市と三菱との間の移転の合意によって、いよいよ再開発の具体的なプランがねられ、五十四年には計画が決定された。

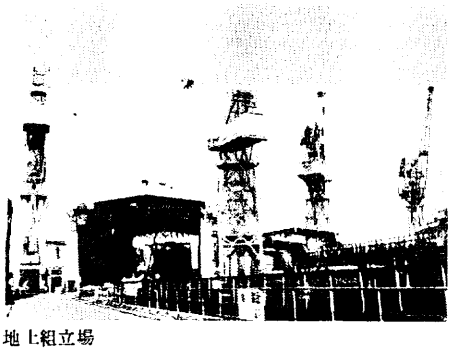
五十六年（一九八一）十二月細郷市長は、二十一世紀前半を大体の目安において「市民として誇れる都市・横浜」として、市の総合基本計画『よこはま21世紀プラン』を発表したが（沿革編参照）、このなかで中核となるのは、都心臨海部総合整備事業であ

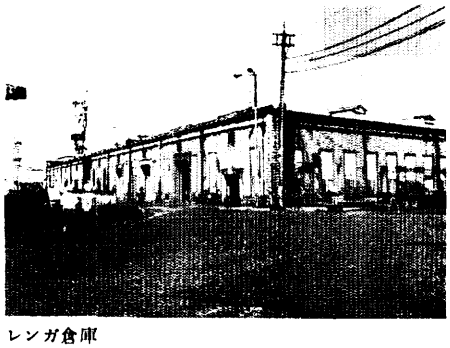

1号ドック

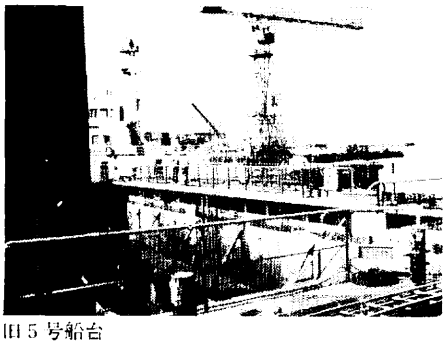

本館

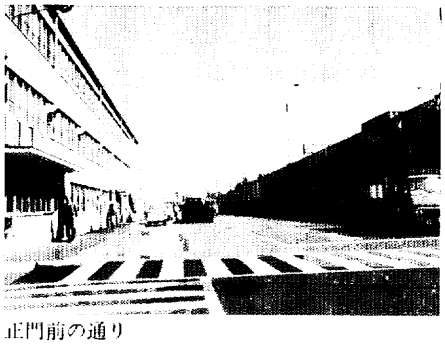

1号ドックの入口


ディーゼル工場

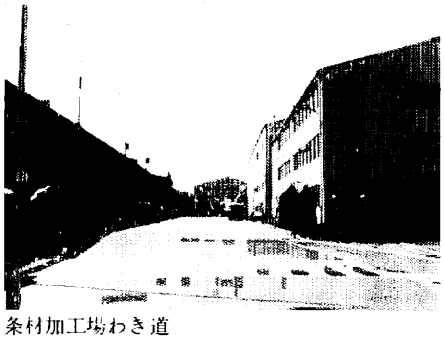

地上組立場

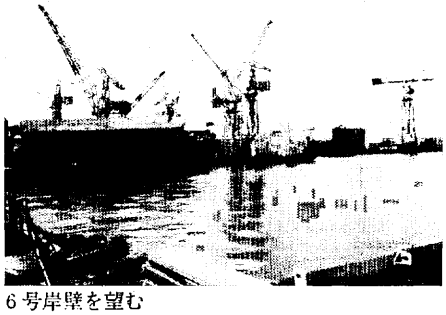

レンガ倉庫


旧5号船台

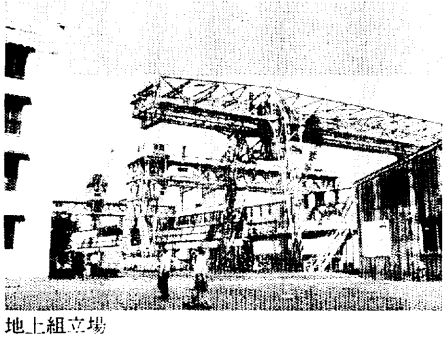

正門前の通り

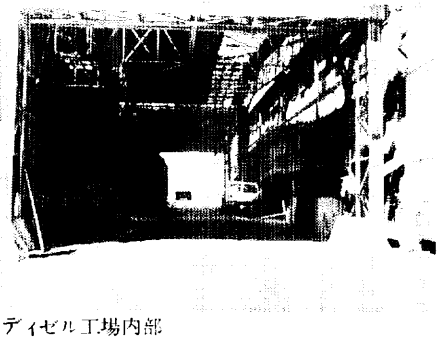
6号岸壁

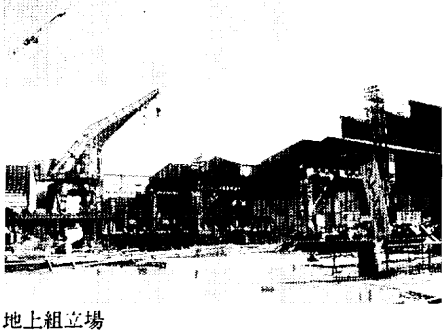

条材加工場わき道

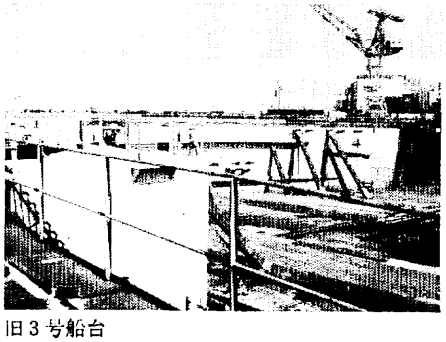

6号岸壁を望む

条材加工場


地上組立場


ディゼル工場内部


地上組立場


旧3号船台

った。

この計画は、関内駅と横浜駅地区にはさまれた海側の地域、高島ヤード、高島ふ頭、三菱重工業横浜造船所跡地、新港ふ頭にわたる約一一〇ヘクタールの地区にたいして、「都心機能の強化をはかり、首都圏の中核都市として、三〇〇万都市としてふさわしい都心を形成する」（『よこはま21世紀プラン』横浜市、昭五十六・十二）というものであった。

横浜造船所（横浜工場）は敷地三一万六、六〇〇平方メートル、建物延一五万七、七二〇平方メートル、従業員約三、六〇〇人であった。終末期の総生産高は五十三年度で七八六億円、五十四年度は九二六億円（うち船舶、鉄構造材など四七・六パーセント、機械三〇・四パーセント、原動機関係二一・八パーセント）であった。

おびただしい労働者によって得られた業績の造船所も、五十八年三月、本牧、金沢への移転が完了した。残された一号ドックには、五十八年八月横浜誘致が決まった帆船「日本丸」が、やがて係留保存される。いまその工場群の跡はコンクリートの原野となった。再開発を待つこの平地には、横浜港の青い波が旧ドックの岸壁を洗っている。

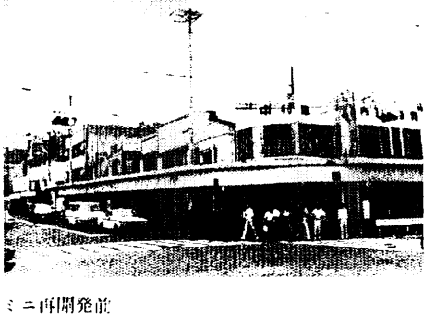
◉**再開発計画**――このような、野毛の山、そして桜木町駅のまわりの開発整備のさなか、野毛・花咲・宮川の各町では、飲食店を中心とする商店街が形成されていったのであった。

だが、伊勢佐木町商店街の復興と、同商店街と横浜駅西口との商戦のさなか、野毛地区は斜陽化の傾向を見せはじめていった。

野毛地区でも、商店経営の人々は、地区の再開発の必要を早くから察知していた。すでに四十年代の野毛は、店舗数は県下で四位と多く、飲食店は五位をかぞえているものの、販売額は十五位と低率を示し、店舗一坪当りの販売額は一八五万円、一位の西口ダイヤモンド地下街の四〇〇万円にくらべてはるかに低く、普通一店経営上必要とされる二〇〇万円をも下回わる状態となっていた。都市としての環境が低下し、商店街のなかに二五・六パーセントの住宅があり、道路交通では車が地区の中心部に入れない狭さであり、さらに入口の桜木町駅前、国道十六号線はひどい交通渋滞であるなど、さまざまなことが、この地区が伊勢佐木町と横浜駅西口との間の真空地帯に入ってしまった原因と考えられた。

その上、三十年後半から四十年代、桜木町駅構内を主として、中区役所周辺の浮浪者は、衛生上放置できないほどになっていた。三十六年七月には市ではこの人たちを一斉収容。二二名を収容（推定では全市で一六〇名）したという状況であったこともあり、地元のみならず、市においてもなんとかしなければならないという状況であった。

昭和四十年（一九六五）十月、地元野毛商店街協同組合は、建設事務所に商業計画案の作成を依頼して、再開発への意欲を見せた。次いで四十二年十二月、今まで商店街の商店主は四派にわか



ミニ再開発前

ミニ再開発後

れ、それぞれ善意による対立をみせていたものが合体、横浜中央市街地連絡協議会が結成された。

◉**成果**――四十三年以来、市は山口辰男元横浜市大教授らの基礎調査を基に、さらに建築事務所に基本構想案（ＲＩＡ案）の作成を依頼した、この間、地元間で摩擦が生まれたこともあって、野毛地区開発研究委員会が設置され、商店主の結束がつよまっていったが、ふたたび、各町を単位に再開発準備組合が結成され、地区をブロック別に分けて開発ということに変った。以来、四十六年から、数回にわたる計画と修正、地元説明、懇談をくり返し、ようやく計画案が小さな一地区に限ってまとまったのが、五十三年八月に入ってからであった。

市の案は、野毛町三丁目を第一種市街地再開発事業として発表された。都市計画事業の一環として組み込まれ、五十六年二月、日本住宅都市整備公団の手によって、着工されたのであった。

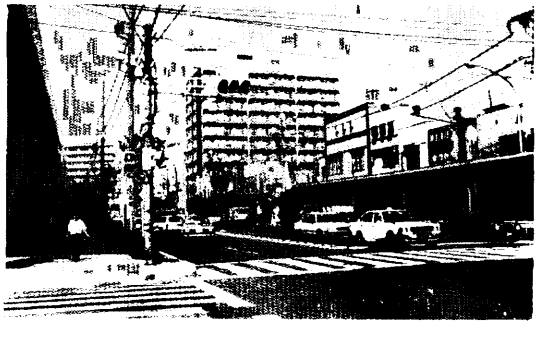
しかし、今までの店舗や住宅の移転、とりこわしなどに意外と日数がかかり、翌五十七年三月になって着工、五十八年十一月にオープンした。地上九階建、地下一階。いわゆるミニ開発といわれるもので、はじめの頃の全面的な地区の改造から、かなりその方向が変ったといえた。

建物は、野毛のサクラ（チエリー）、と真珠（パール）を合成した「ちぇるる野毛」と名称がつけられた。四階以上は七二戸の住宅、三階には中区始まって以来の「野毛地区センター」が設置された。集会室（一〇八人収容）、工芸室、料理（実習）室などの各室がある。

店舗はスーパー・ダイエーほか、一四店が入った。なかに、横浜信用金庫野毛出張所がオープンした。これは界隈ただ一つの金融機関で、地区にとって利便をもたらした。建物面積九、六三八平方メートルで、ユニークな建物として、この地区開発のさきがけの感がある。

◉**民間計画**――こうした野毛地区の部分的な開発が検討され、実施されていくなかで、民間の建築計画がその間隙を縫うように次々と発生して、開発計画のさまたげとなりかねなかった。その一つが、桜木ハイツの問題であった。この建物は、ゴールデンセンターに次ぐ規模の建物計画であった。四十五年九月、当然地元では、開発計画に水をさすものとして、反対に立ち上った。しかし、建築確認の行政行為により、開発をさまたげない条件のもとに、地元は、反対のホコを納めたのであった。

この頃野毛地区でひとり気を吐くのは、野毛場外馬券売場であった。敷地一、〇七七平方メートル、地上五階四、三二〇平方メートルの大きなビルに、レースのときは、ファンが群集した。四十六年度だけでも実に四五五万余の人々がここにレースをたのしみ、一五九億円の売上（中央競馬会調べ）となっていた状態であった。四十六年四月、競馬会は、傍近くの建物の増築工事を計画したが、地元宮川町の賛成に対して再開発のグループが反対、と



野毛も部分的に高層建物がふえ出した

の増築工事が行われたのは、実に十年後の五十六年四月に入ってからであった。

レースに来る人々は京浜急行を利用する人が多く、日ノ出町駅は、時ならず乗降客が増加した。四十六年五月十日には駅前の交差点に、県下最初のスクランブル式横断歩道が新設された。

◉**トルコぶろ**――しかし、このさわぎのなかに、一方ではトルコぶろ騒動がおきていた。四十六年（一九七一）十二月には、野毛二丁目にトルコぶろが開業されたことがきっかけとなった。

トルコぶろは、野毛一、二丁目、宮川町、関外地区の若葉町、末吉町、福富東通、福富西通の、各町の地域が指定地域となって、二十八年（一九五三）六月、野毛に早くも一軒（一六室）が営業許可され、三十五年以後に次々と建設され、四十六、七年にはこのピークをむかえていた矢先であった（第二章関外地区参照）。トルコぶろ建設は、地元を大きく刺激した。

地元は風紀上、そして再開発のさまたげとなるとして反対。トルコぶろの指定地域だから問題ないとする業者と鋭く対立した。四十七年一月、地元の人々、野毛一丁目、二丁目、宮川町の各町内会の一、〇〇〇人の参加によって住民大会が開かれ、トルコぶろ建設反対、指定地域除外の要求を主眼として地元の意思が統一された。この結果、新規に建設されたトルコぶろは、中保健所の営業許可がおりないまま開店し、すぐ休業となったのであった。

再開発計画のまとめのために、このさまたげになる新しい建物建設への反対は、四十年代後半からは、はげしく、揺れに揺れたのであった。そしてその延長としてのミニ開発は、地元の人にとって、これが布石となり、再開発のはしりとなるか、または「みなとみらい21」プランによって、その隣接地としてどのように発展してゆくか、地元では将来への期待が高まっていった。

町の人々はいう。

「埋地の方がまだ発展していない頃、もう野毛は繁盛していたのです。それが震災でまる焼け、復興によって、もとの町のようになったのですが、こんどは戦争でやられました。関内と伊勢佐木町とが接収となり、アメリカ一色にぬりつぶされた時、日本人が大手を振って歩けたのは野毛でした。まさしく横浜の日本人町となったのです。それが、伊勢佐木町方面の接収が解除になって復活したとたん、野毛はだめになりました。繰り返しているんですよね。

私は野毛に生れ、野毛に育って七十七年。有為転変とは、まさにこう言うことかと思いますね。想い出はいくつもあります。いま野毛は斜陽と言われていますけど、やはりヨコハマの野毛には違いありません。どう変ろうと、野毛の町は私どもの故郷ですよ」（野毛町　大塚一郎氏談）

◉**川筋の美化**――変りつつある野毛の再開発のうごきのなかで、四十年代に入ると野毛町のまわりも、少しづつの変化を見せはじめていた。日ノ出町などの道ぞいには、鉄筋の商店が次第に建て

られ街並みの変化が見られてきた。それに大岡川水系には小魚が繁殖したというほほえましいニュースも報道された。

しかし、その川岸、京浜急行ガード下わきは、四十年代に入って川の清さとはうらはらにバラックの屋台が並び、公道を不法占拠していた。

四十七年八月、市は旭橋周辺の不法占有者にたいして、勧告に応じない者について、屋台を撤去した。そのあとには、水銀灯が建てられ町は明るくなった。このことは、地元初黄飲食店組合や町内会の防犯・防止をはじめとする不断の努力の結果であった。

そのかいあって、ガード下の飲食店数は約二倍になり、小ぎれいな店が増えた。初黄飲食店街には一三二店、内訳はバー一九軒、スナック一〇軒、食堂五軒、残りの九八軒はほとんど大衆酒場であった。(昭和五十四年現在)

かつて、麻薬銀座と呼ばれた地域は、こうしたことから明朗な町へと変身してゆくきっかけが生れたのである。

◉桜咲く――次いで、五十六年(一九八一)二期工事として、一、二〇〇メートルのサクラを主とする植樹帯を完成させ、いままで雑然と置いてあった屋台や、不用品、自転車類を一掃させ、すっきりとした河岸に美化させたのであった。

「今まで、悪口をいわれても、誇れるものはありませんでしたが、これで桜の名所ができました」と地元の人々はいうが、これは一部の処置にとどまり、まだ大岡川左岸には、こわれた屋台や不要品が捨てられ、ただ不潔というだけでなく、戦後の暗いイメージを知る人にとっては、著しく不愉快であった。

地元連合町内会長(秋葉義七会長)らは、この清浄化を市に陳情、五十四年(一九七九)の六月には地元協議会が作られた。

市は太田橋から長者橋にいたる、川沿いの道路約八〇〇メートルの間、川岸の不法占有物件を撤去し、そのあとに樹木をベルト状に植えた。

◉戦後が消えて――このような都市環境の整備が行われるなかで、戦後を代弁する一つの施設、日ノ出町の子神社隣りにひっそりと建っていたボーイズ・ホームが、五十六年四月解体移転した。ボーイズ・ホームは昭和二十年代の初め、戦争の孤児たちを収容し、多くを成人にまで育てた実績を持つ施設で、県下中郡大磯町に移転後も、福祉施設として活躍している。

さらに、旧桜川、そこはかつてクジラ横丁の周辺として屋台が並んだ所だが、川の埋立にもかかわらず、ただ一つ陸橋で残った紅葉橋が改修された。伊勢山と桜木町、花咲町とを結ぶ重要な道路の一部であったが、老朽化もさることながら、今までの川幅八メートルがそのまま道路幅で、交通の障害ともなっていたので、これを解消するため十三メートルに広げる工事であった。昭和五十七年三月、五億八千万円、三年間をかけて改修、親子三代揃いの父子によって、渡りぞめが行われた。十二時間で二万六千台(五十四年二月現在)の自動車交通はいく分か緩和された。

大岡川の左岸

解体中のボーイズホーム・子どもの家
〈日の出町二丁目町内会提供〉

さらに五十六年四月、桜木町に健康福祉センターが完成した。ここは市救急医療センター、市社会福祉センターなど福祉関係の総合的な施設である。地上一二階、宏壮な建物である。

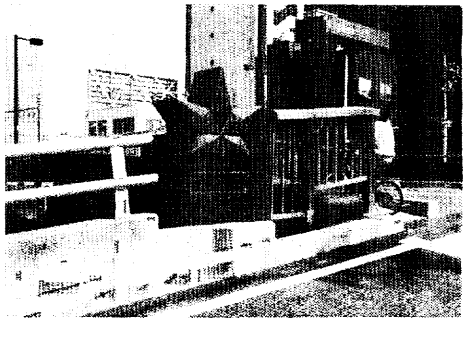
これらのことは、野毛町を中心とする、再開発計画の渦中のなかに入ることなく、ともすれば忘れられていた一地点でのことで、五十年代後半に入って、ようやく解決されていったのであった。これら野毛地区の戦後の残滓が、ようやくここに精算された、といえるのであろうか。過去とみらい構想とのただなかに、いま野毛の地区がある。

◉河口の情景――この地域にはまた、横浜港東端に当って大岡川の河口があり、弁天橋、大江橋で関内へと結ばれている。いま大江橋に立つと、弁天橋までの間は、はしけ溜りとなっている。朝もやに、あるいは夕映えに浮ぶいくつものはしけが、労働の合間に憩いのように浮ぶ。あるときは川面の五彩のネオンの華やかさとは違って、船内に小さな灯がともるときもある。ましてこれが霧の夜でもあれば、ひとしお、その情緒が湧いてくる。

河口には、桜木町駅側から貨物線の大岡川橋梁が架けられ、貨物列車が時折、港にばく進する。港を見通し、朝の陽にきらきらと輝く川面、ヨコハマのミナトの情景がここに残されている。

◉桜木町駅――現在この地区の中心はやはり桜木町駅である。桜木町駅は、一日平均の乗降客は六万人～六万五、〇〇〇人（五十七年度）、東横線を含めると約十万人である。駅前のバスは市バス、

桜木町駅（右）とその周辺



改修された紅葉橋

神奈中、相模、東急合せて二八系統、利用者二万三〇〇〇人で、市民の足として重要な駅である。駅舎は、昭和三年、震災復興当時のままで、当面、改築の計画はないとされている。隣接の貨物専用の東横浜駅が移転して、跡地は未利用のままとなっているが、将来、横浜市のすすめている「みなとみらい21計画」(沿革編参照)によって、横浜造船所の跡地と共に改良される筈である。

駅前広場は、昼夜を分かたずコンテナ車、トラック、乗用車などが通過しており、周辺には桜木町郵便局、読売新聞横浜ビル(七階建)が建てられ、大岡川の水面にガラスの壁面を輝かしている。

川に沿って、首都高速道路横浜・羽田線が半地下で通り、国鉄根岸線に沿って三菱重工横浜造船所の跡地が海側に広がり、港へ向って一号から七号までの岸壁のほか、工場群が展開し一大工場地帯をなしている。紅葉が丘からのクレーン林立の眺めは、壮観であったが前に述べたように、昭和五十八年三月には全面移転となっている。

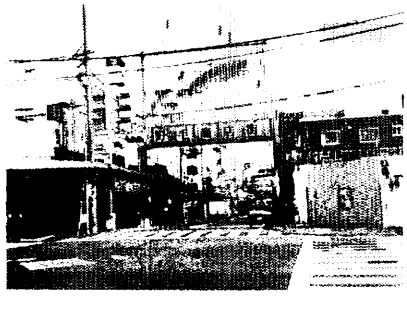
◉駅のまわり――この鉄道線路をはさんで陸側に、桜木町が細長く続いている。一丁目から三丁目までが中区、四丁目から七丁目までが西区だが、町そのものの形態は変っていない。一丁目は桜木町駅、道路をはさんで真向いに駅前派出所、ゴールデンセンター(地上十階、地下二階)がピオ・シティと改名して偉容を誇る。となりに横浜市健康福祉センター(横浜市救急医療センター併設)が並び、横浜勤労青少年福祉会館が続く。この建物は旧中央職業紹介所で、前述のように、震災と戦災とを生きぬいて旧状を残すただ一つの建物である。ほかに町域では、旅館や寺院、商社が並んでいる。

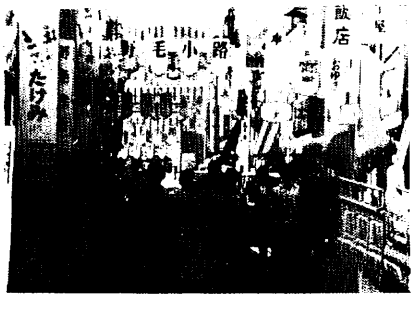
ピオ・シティ裏の高速道路から西側、いわゆる野毛の商店街一帯には、幾筋もの道路が入口をあけている。

◉野毛山一帯――野毛、花咲、宮川町一帯には、住宅・商店が混在しているが、ここには飲食店が多く、夜は特ににぎわいを見せている。花咲町一丁目の大岡川沿いには商店、問屋が並ぶが、建物はすべて低層建築で、このあたりから野毛町一帯にかけての高層化は、まず先のことになりそうである。いまこの界隈の高層建物は十一階建ての桜木町スカイハイツ(一・二階飲食店、四・五階は法人事務所、六階以上が住宅)ほかに七階建(花咲一丁目)、五階建(野毛二丁目)のビルが続くのみである。

地域内には、横浜ニュース劇場・光音座・横浜文化劇場と映画館かもめ座、ストリップの日の出劇場があり、かつての興行街の名残りを留めてもいる。

野毛は商業の町である。いま野毛には、野毛商店街協同組合(会員一一八店)、野毛柳通り会(一九店)、花咲町一丁目を中心とする協同組合野毛桜通り商栄会(三二店)、宮川町商栄協同組合(七六店)が結成されている。野毛のそれぞれの商店街の活動は活発で、気軽に買えて信用のおける店という声が多い。





野毛飲食街

この商店街の活動とともに、地元の町内会なども、宮川町町内会館、町内会事務所を拠点に活発である。

野毛の地つづき、県道から北側、伊勢山、野毛山ぎわの一帯、花咲町音楽通り、本町小学校付近には商店が並び、その背後は住宅地帯である。花咲町、野毛不動下の水行場あたりには、戦後の古い街並みが見られる。

◉**子の神さま**——野毛町の先、日ノ出町方面は、京浜急行日ノ出町駅が中心で、初音町方面へと広がり、その先は南区に接している。駅前のわずかなスペースには、京浜ストア日ノ出町店や、パチンコ店などが並び、夜にはネオンで美しく彩られる。駅前には、七階建のビルが建てられ、今まで最高の高さを見せていた京急ガードをはるかに超えた。駅裏手の崖下には、山手英学院予備校があって学生や受験生たちのメッカとなっている。県道は、大岡川に並行して直線に延びているが、左右に商店、商社が建ち並んでおり、東ケ丘（西区）に接する奥まった住宅地には「子神社」が静かなたたずまいを見せている。社こそ小さいが、春秋の祭礼には盛大な祭りが行われ、地元から子の神さまといわれ親しまれている。近くには神奈川県ハイヤー・タクシー会館があって、そこには無線など業界の中枢機能がここに集まっている。そして、その筋向いの、六階建てのビルがこのあたりで一番の高層ビルである。日ノ出町から、初音町方面へと続くその県道沿いには、自動車の交通量が多い。

◉**黄金町駅周辺**——県道は、南区前里町から、南太田方面に通じているが、途中、初音町三丁目は、主要地方道藤棚・伊勢佐木線と交差する地点で、ここも交通の要所となっている。京浜急行黄金町駅は、現在一日平均の乗降客は二万三、三二〇人（五十七年度）で、南区や西区方面への通勤者も利用する主要な駅である。ただし駅前に広場がないため駅周辺は、さほどの繁栄は見られない。この地区は、こうした商業地区ではあるが、飲食店の密集する一帯もある。大岡川沿いに走る京浜急行の高架下を町域とする黄金町がそれで、ここにはバーやスナックなどが目白押しに営業しているが、戦後、市民の間に持たれた暗いイメージは今はない。ここの商店は組織的には結束しておらず、初音町の七店、黄金町の二店は、他地区の商店会である黄金阪東大通商栄会（二六店）に加入している。

このあたりの、戦後の混乱による環境の悪さは、ようやく昭和四十年代になって終ったが、前述のように大岡川沿いの浄化施策によって、両岸にはプロムナード植栽によって定着した感があり、新しい景観を生んだ。この川にようやくボラやハゼが戻ったといわれ、時折、植栽された柳の下で釣りを楽しむ人が見られる。

◉**これから**——一方、西区境の赤門町や英町は、赤門通りをメインとした住宅、商店混在の土地である。この赤門通りの入口は、県道の初音町一丁目に始まっているが、この通りの中心は赤英会館（町内会館）や横浜赤門郵便局あたりで、一帯は住宅地であ

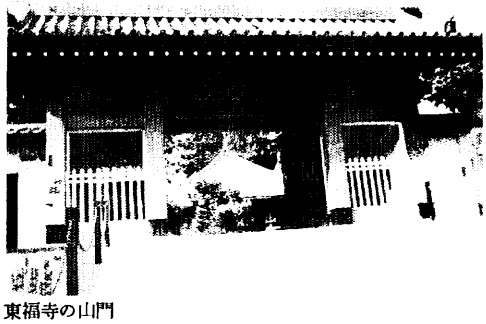
子の神社

黄金町駅

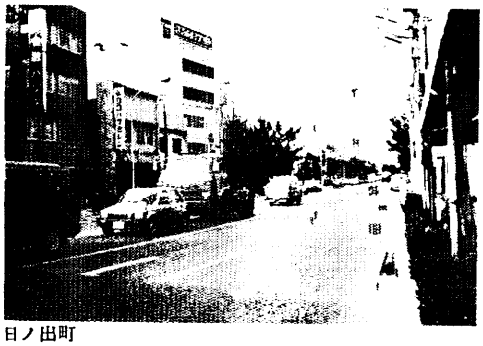
る。この住宅地は、西区東ケ丘に向ってひな段状的に続いている。丘の上には、関東財務局東ケ丘住宅が三棟、さらに市立東小学校がある。赤門町一丁目のはずれは東福寺で、深い緑に包まれた霊園の山を背後に朱塗りの山門、そびえる本堂はこの町のシンボル的存在である。

野毛地区はこのように、各地域ともにその様相が異っていて多様である。野毛の西側にあたるこの一帯には京浜急行の二つの駅があって、日ノ出町駅前交差点、黄金町駅前および阪東橋交差点など、交通上重要な地点であるにもかかわらず、駅前施設や駐車施設が少ない土地柄とも相まって、単に通過地点となってしまっていて、野毛東部のような景気に影響されることはない。しかし、東部地区のミニ再開発を契機として、野毛再開発の総合的な見通しはどうか、これとどう関連していくかということが、今後のこの地区の課題である。

赤英町内会の街なみ


東福寺の山門

日ノ出町駅


日ノ出町